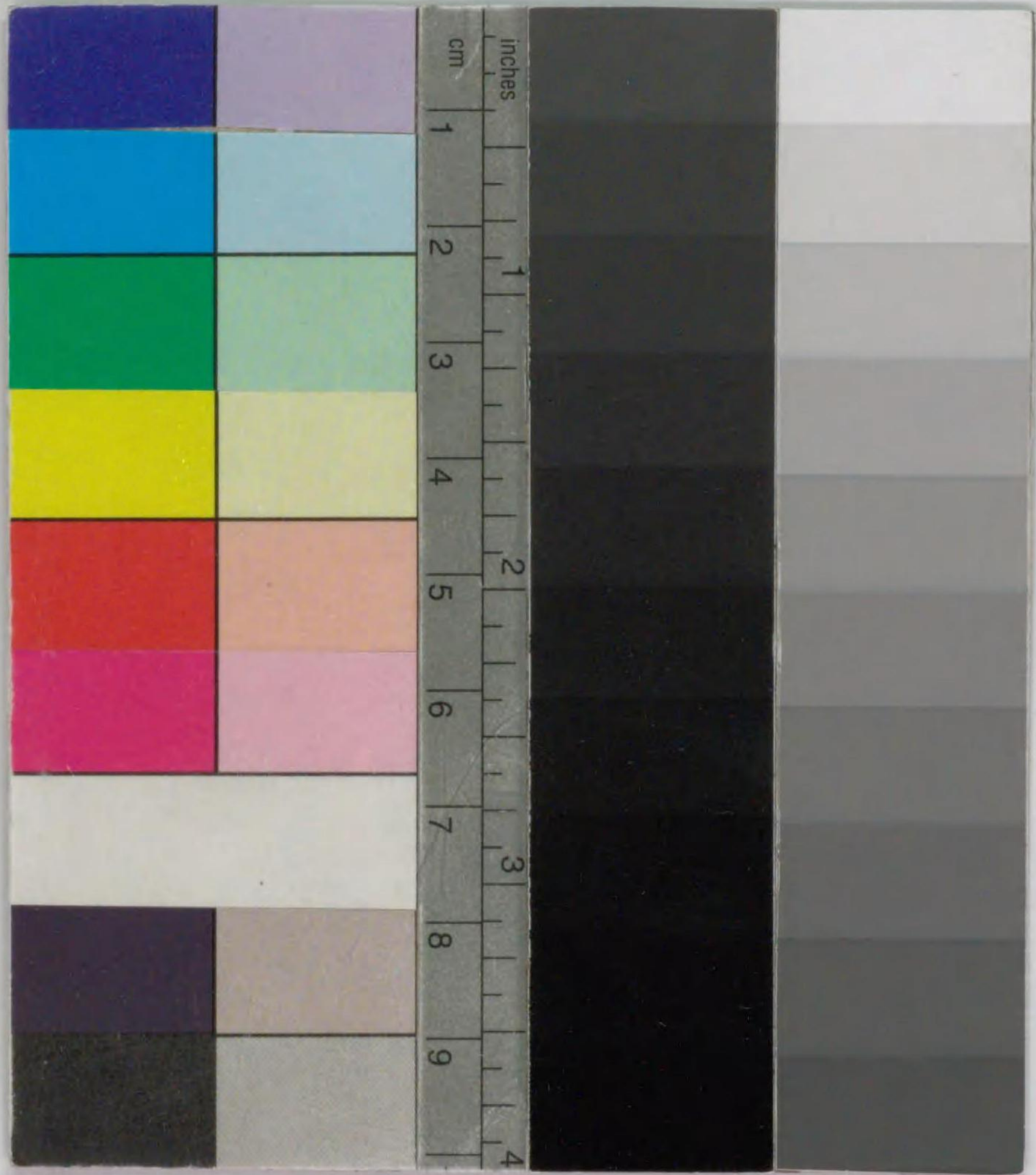


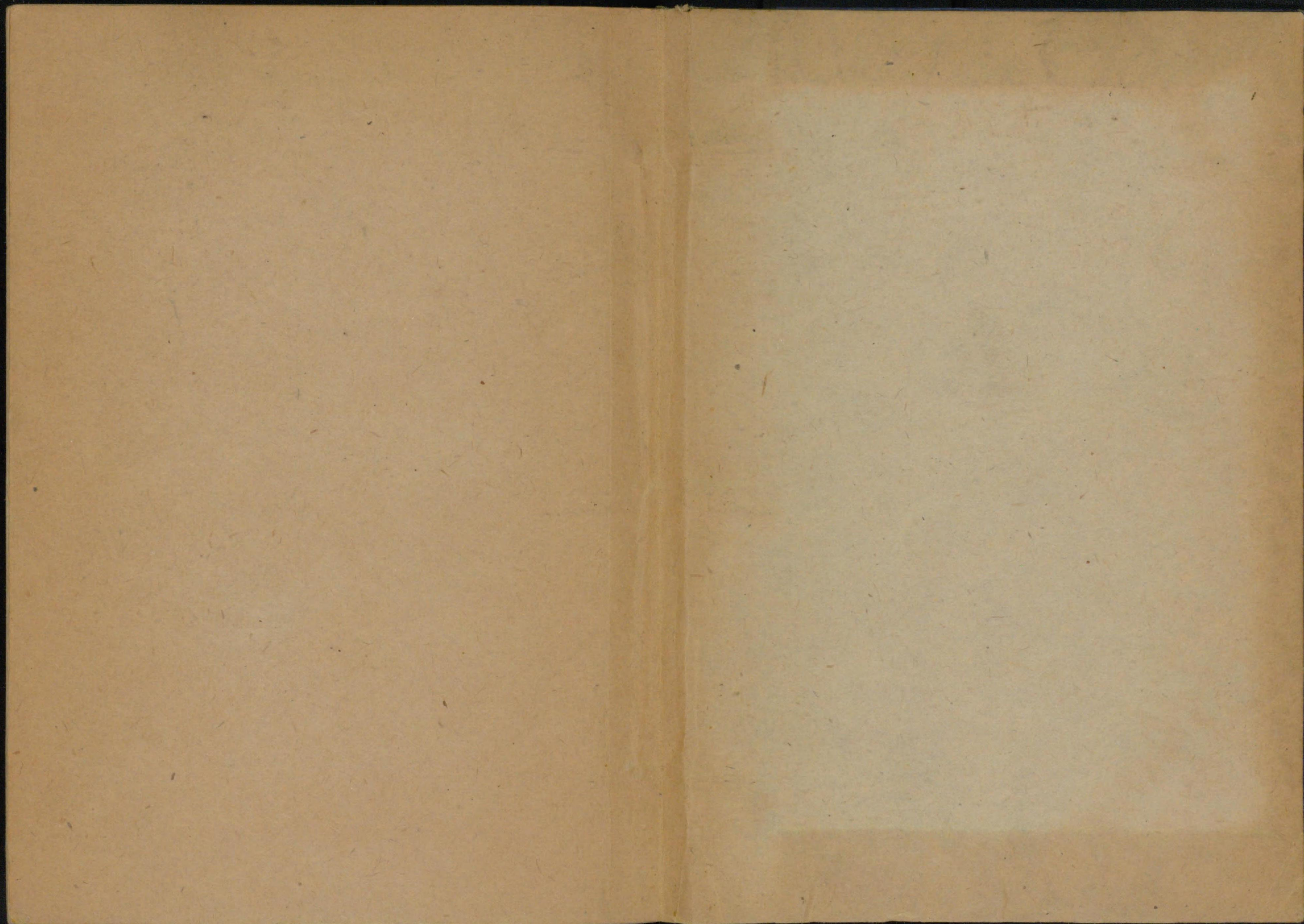
583-15



1200501523050









155

391





本集參考書

凡流曲三味線

近代日本文學  
大原才五卷

昭和三年  
九月發行

國民圖書株式會社

色道傾城禁短氣

日本名著全集  
集才九卷

昭和三年  
四月發行

日本名著全集刊行會

世間子息氣質

日本名著全集  
集才九卷

昭和三年  
四月發行

日本名著全集刊行會

傾城歌三味線

近代日本文學  
大原才五卷

昭和三年  
九月發行

國民圖書株式會社

水谷不倒校訂

帝國文庫  
第八篇

其磧自笑傑作集

全



納本

東京

博文館版



終本

解題

水谷不倒

503-15

其磧と自笑とは「八文字屋もの」の中心人物である。自笑は安藤氏、通稱八文字屋八左衛門、京都鉄屋町通誓願寺下ル町の書肆であつた。

其磧は江島屋市郎左衛門と稱し、もとは京極通誓願寺門前に餅屋を営み、大佛餅とて繁昌し、巨富をなすに至つて轉業し、六角通柳の馬場に移り、後漸く奢侈に流れ、其磧の代に至つて遊興に耽り、産を傾けたといふ。されば其磧は芝居町遊廓の事情に通じ、頗る文才あり、西鶴に私淑して、自ら其誕を嘗るものと稱し、其作を模倣して著す所の浮世草子極めて多し。其磧は元文元年六月、七十歳で歿したが、自笑は其磧よりも二三歳長じ、而も其れより後延享二年十一月十一日に歿した。齡九十歳に近しとあるから、八十六七歳の長壽を保つたのである。

其磧自笑著作上の關係は、元祿初年其磧が松本治太夫の淨瑠璃を新作して、其正本を八文字屋から出版した時から始まつたやうである。當時八文字屋は單なる淨瑠璃本屋で、まだ一向振はなかつたが、當主八左衛門即ち自笑は才幹あり、機を見るに敏であつたから、延寶以來上方文藝の興隆に際し、近松作の歌舞伎狂言本などを出版して、大いに業務の發展を企てつゝあつたが、恰もよし其磧は、元祿十二年正月『役者口三味線』といふ評判記を著し、之を八文字屋に與へて出版させた。之が好評を博したので、同十四年更に『傾城色三味線』を著した。此作は浮世草子として、其磧の初筆であるのみならず、八文字屋での初刊本であつた。これも評判好く、八文字屋から出るものは、皆面白い



といふやうな譯で漸く書肆の名が知られるに至つた。即ち是迄の正本屋は、一躍浮世草子の版元に出世した。されば其磧と自笑との間は、さながら水魚の如く見えだが、好事魔多しで、はしなくも兩人の間に、葛藤を生じた。其原因が何であつたか。思ふに利益問題から感情の疎隔を導いたのに外あるまい。最初其磧は、其作を公にするに當り、作者として名を出すを好まなかつた。然るに自笑は、我出版の歓迎せらるゝに、無名で出すのは如何にも残念と思つたのであらう、其磧に向つて名を出さんことを勧めた。併し其磧は之に肯せず、再三強ひらるゝに至つて、若し名を出す必要があるなら、書肆で何とか出しておけ位の返答をしたのを、自笑は好い事にして、「作者八文字自笑」と、麗々しく自著の如くにして出版した。而も「八文字屋もの」がますます流行して、自笑の文名がひとり高きを見ては、其磧たるもの餘り好感は有てなかつたであらう。既に略々諒解濟の事ではあつたが、今更ながら縁の下力持の餘りに負擔の重きに堪へ得なかつた事も、決して無理とはいはれまい。遂に其磧は一計を案じ、自笑に一泡を吹かせ、彼れが傲慢の鼻柱を取拉いてくれんと思つたかどうか、兎に角彼れは江島屋市郎左衛門の名を忤に譲り、四條御旅町に新本屋を開店して、自著の出版を企て、唯評判記だけを、従前の好みとして八文字屋に與へ、江島屋と相版の利益を分たん事を要求した。勿論これは威嚇であつたに相違ない。自笑も去るもの、之に應ずる筈もなく、斷然拒絕して、自家出版書の端に、江島屋の新本屋に對して悪言を放つたなど、漸く事が面倒になつた。爾來反目抗争を續けること五六年の長きに亘り、享保三年に至つて双方疲勞し、且商人の喧嘩損あつて益なきことを悟り、兩人和解して又元の鞘に納まつたが、此期間に於ける其磧の奮闘は實に目覺しく、製作上に新趣向の案出されたものが少なくなかつた。氣質も「の」の如きは其一例といへる。八文字屋も勿論拱手してはゐなかつたが、併し江島屋の活躍に對しては一籌を輸した。自笑は其磧を失つて、他に代作を求め、又文才あるに任せ、事實自分にも筆を執り、若干の著作を試みた。斯くて兩人和解して再び手を握ることになつたが、従前の如き温情は保たれなかつたらしい。兎に角其磧は前のやうに其

作を八文字屋で出版したが、然る時は作者自笑其磧連名で出し、而して其磧は自著を他の書肆から出版するの自由を保留してゐた。されば其後の彼れの作は、其過半は八文字屋から出版したが、他の一半は菊屋、谷村等の書肆から出版した。尤も江島屋は和解後暫時にて閉店した。

自笑其磧の間は、斯の如き経緯があつたから、同じく「八文字屋もの」でも、種々の曲折がある。最初は八文字屋から出版したものには、作者の名の無いものが多い。例せば『色三味線』、『曲三味線』の如き、其次は自笑が單獨で作者と稱してゐるもの。即ち『傾城傳受紙子』、『禁短氣』の如き、而も是等はいづれも其磧の作である。江島屋八文字屋對立時代は、江島屋版は其磧の作であること論なく、八文字屋版は自笑が名を表してゐたが、其中には其磧が前に與へて置いた作もあり、他の代作もあつて、實際どれだけが自笑の作であるかは詳でないが、併し『男女伊勢風流』、『傾城籠昭君』、『風流訛平家』、『義經風流鑑』等若干彼れの作と信すべきものがある。

本集に收めたものは、初期の作で『曲三味線』と『禁短氣』對立時代の『子息氣質』、『明朝太平記』以上四種は、いづれも其磧の作であり、其他『歌三味線』は連名ではあるが和解後の作であること前述の如く、『虎ノ巻』、『五人娘』、『諸國物語』の三種は菊屋版では又其磧の作、唯『自笑樂日記』だけが、其磧の作でないといふだけで、自笑其磧の連名ではあるが、恐らく代作であらうし、結局九種の中には、自笑の作といふを發見せぬ。されば本集を『其磧自笑傑作集』といふは、やゝ妥當ならぬやうにも聞えるが、實際はどうあつても、兎に角彼れが作者を代表してゐる以上已を得ぬ事と思ふ。自笑は其磧の歿後、多田南嶺を聘して代作せしめたが、彼れも亦名を出すを好まず、自笑又は其笑瑞笑等の名義で出版してゐた。八文字屋には斯く無名の作家の潜在して自笑に虚名を成さしめたのは奇縁といはねばならぬ。



### 風流曲三味線

「八文字屋もの」の中『色三味線』に次いで古いものである。出版は寶永二三年頃。作者の名が缺けてをるが『野傾旅葛籠』の序に由つて、其積の作といふことが證せられてゐる。巻首「女道衆道並の岡の隠家」の一文は、いふまでもなく西鶴の『一代女』「老女の隠家」の發端を學んだもので、昔夷屋吉郎兵衛座の歌舞伎若衆と、六條三筋町三夕といふ太夫のなれの果とが、色の諸分を語るといふ趣向である。併し『一代女』は老女の自傳ともいへるが、此作は唯二人の老人を假りて話の端緒を引き出したに過ぎぬ。一之巻持丸長入がやりくりの話。二之巻音羽峰右衛門といふ浪人の話。三之巻から六之巻までは淀屋辰五郎の話で、比較的長編から成つてをる。而して『色三味線』の如き斷片的挿話の集成でなく、いづれも首尾照應、脚色を有し、其積が筋物小説の技巧を見るべき好標本と云つて可い。尤も是等の筋立は、當時の歌舞伎狂言から取入れたといふことが、『曲三味線』の廣告文に出てをるが、之に限らず西澤一風の作にもある通り、淨瑠璃や歌舞伎の趣向を利用することは、作者間の新傾向であつて、現代語でいへば、劇の小説化とでもいへやう。漫談的浮世草子が、段々筋物小説、即ち稗史の道程に入る、一つの進路であつた事が判かる。

### 傾城禁短氣

序文に「寶永八年卯月中旬、作者八文字自笑」とあるから、當時の人は自笑の作と信じたこと勿論である。又自笑も『樂日記』などにも、自分の作の如く宣傳して、世人を瞞着してゐるが、其積の作であること、『旅葛籠』、『目利講』等に由りて證せられてゐる。色曲兩三味線と同じく、遊廓の情話が題材になつてをるが、其主眼とする所は、男色女色の優劣論に滑稽を弄した所にある。此種の論議は嫖客間に、眞面目に行はれたものと見え、寶永五年版の『風

流三國志』にも、「志の男女講談」、「志の禁談義」など、説教僧の談義法廷の形式に倣ひ、男色論を圖したのもあつたが、『禁短氣』は同じ題材を安土宗論に擬して面白く表現した點が特色である。殊に作者に油の乗つた時代であり、取扱ひ方がいかにも巧妙で滑稽に富んでゐたから、非常に喝采を博し、『禁短氣』といへば讀書子で知らぬものなきまで有名となり、數版を重ねた上に、なほ二編三編と續編をさへ出版するに至つた。

### 世間子息氣質

所謂八文字屋の「かたぎもの」の一で、而も最初の作といはれてゐる。併し實際は『寛潤役者容氣』の方が、一二年早いのであるが、餘り知る人がなく、第一の估券を『子息氣質』に奪はれた譯だ。此作は正徳五年江島屋から出版したもので、其積が八文字屋と競争すべく、心血を注いで種々新案を立た中の異彩であつた。

「かたぎ」といふ語については、典型又は性癖といふ意味に用ひられてゐるが、其積の所謂「かたぎ」はむしろ後者の性癖に當り、子息氣質といへば、人子の分を盡し、親に孝行、家業を大切に勵むといふ典型的ではなく、之に反し親の愛に馴れ、我儘が増長し、邪道に陥つて勘當帳に付くといふ、世間ありふれた道樂子息、即ち不良青年の種々想を描寫したもので、殊に町人階級に屬してゐる點が特色である。構想は西鶴の町人もの、就中『本朝廿不孝』などから得たものであらう。唯之を『子息氣質』と新しい名で賣出したのが作者の手柄である。西鶴の作でも『廿不孝』といふ名では受けなかつたらしい。『子息氣質』は新しくもあり、又感じも可い。丁度享保の改革の時であつたから、教訓的作意の歡迎されたこと勿論で、種々類型の作を産み、其積だけでも六七種作つてをる。中にも『娘谷氣』は此作の追加として翌享保二年に出、同五年には『親父形氣』を自笑と連名で八文字屋から出し、遙か後『手代氣質』を出してをる。他の作は一々述べる邊がない。但し新井白蛾の『老子形氣』、多田南嶺の『母親容氣』和譯太郎(上田秋成)



の『妾氣質』等、内容は姑らく措いて、是等の學者までが其蠶みに倣つたことを思ふと、いかに八文字屋の「かたぎもの」の有名であつたか判かる。

#### 國姓爺明朝太平記

近松の淨瑠璃『國姓爺合戦』が三年間も打續けたといふ素晴らしい人氣は、當時際物師の店頭を悉く國姓爺化したといふ事は、本書の序文に由りて知る所であるが、其影響は浮世草子にも及び、享保元年『國姓爺御前軍談』が出版された。作者は多分西澤一風ならんが、其趣向は唯近松の淨瑠璃を、貴人の前で口演するといふので、淨瑠璃を稗史體に直したまでである。『明朝太平記』は同二年版で、是又際物の一種であるが、其積は別に趣向を立て、且鄭成功の事蹟も多少斟酌して、而も大體は近松の淨瑠璃を踏襲し、和藤内、千里ヶ竹、虎、九仙山、すべて人口に膾炙した部分は如才なく取入れてゐる。『明朝太平記』といふ名に就いては、『漢楚軍談』、『三國志』等の演義史類や『忠義太平記』、『西海太平記』などいふ繪入の通俗軍書が、當時盛んに行はれたから、其れにかぶれたものに外ならぬ。而して其積が、『國姓爺合戦』から題材を選んだ事は、是又劇の小説化の一面を表したもので、今後彼れの作はますます此方向に進境を見出してゐる。

#### 傾城歌三味線

『子息氣質』、『明朝太平記』は正徳から享保の初年、江島屋時代の作であるが、兩家和解後、自笑其積連名の作は本書一種である。享保十七年の八文字屋版である。其頃は概して大形本が流行してゐたが、此『歌三味線』と『友三味線』外二三種は、『曲三味線』や『禁短氣』に似た横本である。『歌三味線』は三味線類本として「傾城もの」に屬し、

内容は玉屋新兵衛三國小女郎の事を扱つた筋物小説である。其序文に由ると、「玉屋は初卷五冊に著し、おきくは後となし、加賀越前を合せて十卷となしぬ」とあり、即ち此『歌三味線』が前編で、後編は翌十八年版の『傾城友三味線』である。おきくとあるは、おきく幸介の話で、いづれも其頃の巷談が材源になつてゐるが、淨瑠璃にはやつたといふは、其頃國太夫節で語られた事をいふのであらう。

#### 鬼一法眼虎の巻

享保十八年菊屋から出版した其積の作である。牛若の戀物語には、古來二つの話題が行はれてゐた。一は矢矧の長者の淨瑠璃御前と、一は鬼一法眼の三の姫とである。前者は『淨瑠璃物語』(一名『十二段草子』)に、後者は『鬼一法眼』又『判官都ばなし』にして、いづれも假名草子に行はれてゐる。而して淨瑠璃姫との戀は純なものであるが、鬼一の三の姫とは、牛若に兵法の奥義を知らんとする政略的の戀であるだけに、近松以後の技巧的操芝居の脚本に適する所から、文耕堂長谷川千四が、之を題材として『鬼一法眼三略卷』を新作し、享保十六年九月竹本座に上場して好評を博した。彼の「大藏卿」や「菊畑」など今に喧傳されてゐるが、此作を例の通り、其積が小説化したのが、即ち本書で、其外題の如きも殆んど其儘で、唯『鬼一法眼三略卷』を『虎の巻』に改めただけである。

#### 咲分五人媳

これも淨瑠璃種の一である。三莊太夫は古き説經の正本が材源になつてゐることは、本書の序文にある通りであるが、説經節に語つたものは、三莊太夫に三人の子があつて、太郎次郎は親に類する悪黨であるが、三郎が情深く、安壽對王を庇護するやうに書いてあるのを、竹田出雲は之を翻案して三人の男子を五人の娘に改作し、惣領娘は阿呆、



次女は發明なれど跛足、四女は啞、五女は眼病、唯三女おさんだけが満足であるが、之は實の三女が早世した爲、聲の三郎に後妻として迎へた養女であり、他は親の因果が子に報つて、皆不具者になつたといふが主眼になつてゐる。これが享保十年竹本座の操に掛けられた『三莊太夫五人嬢』である。其頃の『五人嬢』は、形體上には何の障りもなくいづれも器量よしてあるが、惣領娘は無常心、次女は風雅を好み、三女は親に似た剛愎、四女は洒落もの、五女は賭事を好くなど、形體上の不具を個性の缺點に求め、其所に作者は滑稽の使ひ道を見出してをる。同じ淨溜璃種でも、此作の如きは比較的效果の揚つたものとしなければならぬ。

#### 其磧諸國物語

此作は其磧歿後六年、寛保四年に菊屋から出版したもので、其磧最後の刊本になつてをるが、此年號は或は再版かとも思はれる。併し未だ確證を得ぬ。内容は敵討に搦んだ武士氣質を寫した話題から成り、其れが相模、甲斐、駿河、越後、伊勢の五編別々の話であるから『諸國物語』と題したのである。後に柳亭種彦が此編成を學んで、『邯鄲諸國物語』を著し、近江、出羽、大和、播磨の卷等に分ち、此作の事を記してをるので、有名になつてをるが、其磧の作としては別に傑れたものとも思はれぬ。

#### 自笑樂日記

延享四年八文字屋版で、作者は自笑其笑の連名になつてをり、其序跋に由れば、自笑は九十に近き長壽で、最早筆硯に携はることも出来ないから、作者は子の其笑、孫の瑞笑に譲るといふ意味の事を記し、子孫二人を新たに作者として讀者に披露してをる。内容は山蔭長者のお家騒動を讀本體に綴つた迄のものであるが、唯自笑生涯の著作の標題を

目錄中に織込ませたのが特色になつてをる。詰らぬ努力に思はれるが、これも自笑の意を受けて書いたものであらう。此書には自笑の畫像と、俳句とが載せてある。自笑は其前々年即ち延享二年の十一月に歿したから、丁度遺稿の如くなつてをるが、恐らく其遺言に由つて同三年中南嶺が代作し、四年初春に出版したものに相違ない。しかし南嶺も自笑歿後五年、寛延三年九月歿し、久しく榮えた八文字屋も遂に衰へるに至つた。

—— 解題終 ——



# 風流曲三味線

## 目次

風流曲三味線	一
大色道傾城禁短氣	一五九
世間子息氣質	二六七
國姓爺明朝太平記	三三九
傾城歌三味線	四三三
鬼一法眼虎の巻	四九一
<small>新入板</small> 分五人媳	五九三
其積諸國物語	六五九
自笑樂日記	七七

— 目次終 —



風流曲三味線總目錄

一之卷

第一 女道衆道并の岡の隠家

御室の花見幕張のつよい婆が昔

なる龍のほたる尻付のよいちが昔

第二 仕掛のよいからくり舞

物領は高橋にかゝつて落ちた身代

次男は若衆狂ひに尻からぬけた身代

第三 一盃喰して乞食にもらふ命

見せかけ大じんはりやひの買論

あけて悔しの内藏の銀箱

第四 島原へ御來迎三尊の身替

黄金のはだへとは金につりがへの女郎

長屋の外井戸あいやい女房

第五 色より思ひを掛奉る曼陀羅

戀慕のやみの暗宿。あかどり足の食焼

貧のぬすみに戀のうたてい出來心

風流曲三味線



二之卷

第一 長老様の聲引出物

お寺の大黒殿は貧乏神のごごつた  
床前の鬮取おやま茶屋の念佛講

第二 中のよい貧家のならべ枕

女夫の敵討たり火打紙子牢人

ごまの灰と土風にあはぬが秘密

第三 花に嵐前髪に泡瘡

戀病に心の亂髪いわれぬおもひ

醫者のくすりでもきねんでもいかなく

第四 横槌見て楽しむ後家

大やしろて神達も分別にあたはぬ悪女

釋迦のわたくし金沙汰なしの身請

第五 心中に浮名のながれ川

なるはいやなり思ふはならぬうき世

きのふはだいにじんけふは請人やつかい男

三之卷

第一 仕過しの天狗仲間

新町と道頓堀をかけ持のかくや道心

雲中の投節のぼりつめた大臣達

第二 心中時花醫者

何にほれてか親仁が死出立

初戀を取むすぶ糸屋の小女童

第三 床の軍法女楠

兩大臣金の力くらべ松を引ぬく堺の兵

打そろふて太鼓樂遊

第四 八百兩が夜拔姿

菰きせても太夫は太夫

おくさまなりと帯の祝ひと

第五 淀鯉水の働

時々のうつり氣若衆もよい物

女より色ぶかい紫ばうし

四之卷

第一 元服しても子供心

兄弟の約束かたい岩國半紙取付世帯あふもふしぎ見通しのうらなひ

第二 萬福長者二代の大臣



第三 家振廻の御馳走は大みやうもどりおごりの花駕籠乗出したさわぎ  
手代仲間賦勢諷

第四 神鳴と異見はお蟲が嫌見るを見まねに僕が小宿ぐるひ  
帯とかぬ枕物語

第五 むかしわすれぬ美男大臣君がため心からせぬふつどめ  
一思案が金子三兩

五 之 卷  
あげ屋の酒むかい末社宮すゝめ口時ならぬ七草二日酔の水雞水

第一 時の用に立金の雞

第二 隙醫者の長ばなしにわか頭痛獨寐の床に氣をやむ娘  
筒持せの裏腹  
無いからおこつてもがり分別我より先に三百兩の手附金

第三 善悪を見ぬく主人の眼  
一しゆの狂歌に知る盗手萬の寶より腎水の請賣

第四 名残は盡ぬ泪の酒盛  
くるわの花もちりくんに成大臣の身上いひ立になる女郎の向ふ疵

第五 三百兩にかつき物  
手鍋さげても若殿の祖母さま身は賣ながら儘にならぬ女

六 之 卷

第一 思ひもよらぬ東下り

第二 抑是は謠の師匠藤戸はいそさし通さるゝやさをんな  
さびたれ共形見の長刀

第三 姉の敵うつゝないやつし神子さんちやのかうしは千本の櫻  
幽霊も好た風

第四 悪所がよひも幸ひに成立聞命はのびぬうどんや打おふせた敵  
再び歸宅の悦び

第五 持ならひの太鼓ならぬ世わたりむさしのひろい心の大巨  
○神の御利生

あづまがよめいり庭には金銀の島臺一家はんじやう喜悅の百味



風流曲三味線 一之巻

第一 女道衆道并の岡の隠家

南風に廻りのよい風車の客衆

昔より花紅葉月雪をながめて。是たのしみともて興ずる事恐らく虚かと存る。智慧あり顔に髭なて。朝から晩まで何として。ついには詠あきて首の骨を痛め。興つきて欠伸せらるゝを思へば。畢竟外聞ばかりの樂しみにして。眞實おもしろきといふにはあらず。慮外ながら我等が物好。物いはぬ花もをかからず。紅葉が赤とて酒の相手にもならず。たゞ常佳見ても美女は名木。雨にいたまず嵐にちらず。晝は願の下に首を入れて艶顔をながめ。夜はまたいふに及ばず。命をむしるほど面白い事あつて。朝夕飽といふ事なく。世界に此替りになるやうなたのしみ。釋迦の時代からないともへて。世々の賢き人も何か此外に榮華なしと詞を殘し給ひぬ。され共富乏の別ありて。艶なる慰成がたし。爰に前生にてよい慰の種を蒔置。今戀草としげり。萬自由なる暮し。都の町中はつけとゞけやかましまし。岡崎といふ所に若隠居をかまへ。黒谷近けれど佛の道をきらひ。歌鞠茶事にも心を寄せず。たゞ人のもてあそびは女道と思入。金銀あるにまかせて酒娼美色に身をかため。浮世の隙をあき樽といふ大盡。口輕な末社四五人召つられ。輕い寢覺に酒など持たせ。心うきたつ花の春祇園邊へ出かけ。見わたせば花見乗物立つゞきて。鳥井よりは風俗をつくり。稀に土踏蹴出しあゆみ。されば此道者の詞に。來迎柱は金箔。女の內衣は緋縮緬といひしが。ひとつ前かへるたびにちらりと見へた所。いかなぢうめな魂も。皆そこへ〜と心ざすこそ殊勝なれ。殊更けふは曆見る迄もなく吉日に究るは。随分都の上物揃ふて出ると。おのゝ鼻をひこつかす所へ。智慧自慢と見へし男。大臣見しり奉る

ふりして目禮いたす。あれ誰じやとあれば。藤七と申す太鼓罷出。いまだ御存知あらずや。あれこそぎをん町の色茶屋の亭主と申せば。近比おかしさうなる男め。是へ召せとある。御意畏て彼の男を招けば。ゆるし給へ。夕部は風車の客あつて草臥果てた。御歸りの時分見苦しくとも我等方へ御供〜と申す。これは替つた客の名。よい風な客で廻るといふ心で。風車の客といふかたとへば。いかな〜。そんなおもしろい事でない。泊り客をなべて風車と申すといふ。随分洒落中間の我々。今迄此古事しらぬといふも無念の至り。さて其いはれはいかにと問へば。さればこそ大事の事をお尋あり。抑泊り客を風車といへるは。大豆でとまるといふ心と。何でもない事勿體つけて。是はと是も興になつて笑ひぬ。扱あの物が名は何とかと問へどこたへず。くちなし色の物大分もつて。色宿の亭主ながら大名貸の心懸ある男と。又大笑ひの後は酒に亂て。此好機嫌のいきほひに。いざ氣をかへて御室の花と頓飄なる末社が申出す。是替つて然べしと大臣勇み給ひ。辨當は最前の亭主仕出しと直に仰付られ。町の内は駕籠にて急がせ。千本あたりの野道よりいづれも駕籠より飛びおり。さまざまのもんさく盡して行ほどに。妙心寺を過て兼好の舊跡ならびの岡山の麓に。寛音なして一ツ屋の軒まばらに。見越の松杉枝をふらせ。びやくしん龍につくり。つゝじの帆かけ舟。櫻山吹のおのれと咲し外は皆兼好の嫌はれし庭木。所に住ながら徒然草さへ知らぬか。と淺ましく見入ば。一軒屋を中より仕切。一方には二十年も浮世を盗みたるおやぢ。頭は不斷の霜ふらせ。花はむかしに梅干の赤みがちな顔して。上下に取あはせて六七枚ほかなき齒を。打楊枝にて磨き居たり。さりとほしやらくさいおやぢ。と又一方を見れば。女の藤蘭て三輪組。髪は時ならぬ雪を戴き。今宵も知れぬ老の身の後世心もなきにや。持佛堂らしき物も見へず。片隅に香の物桶。次に寢道具。房付枕ふたつ並べ。壁もあばらに腰張は十二段の上り本。さるほどに隣なる住家ながら。夫婦の心ざしは幾歳になりてもしほらし。あの親仁めが無い齒を磨くも。此婆州に見せん爲なるべし。今さへあの不思議い時のむかしを聞かば何よりおかしかるべし。と大臣先に立て。親仁殿煙草の火一つたまはれと火繩差出せ



ば。夕部焼たまゝで火がないといふ。然らば。とあい住の婆が方へ手をさしのべて。かみ様火一つくだされといへば。老女顔をしかめ。隣の客なら火進ぜる事はならぬとすげなくあしらふ。是はしたり。親仁殿とは御夫婦ならずや。扱は親仁齒を磨きて男つくらるゝゆへに。外狂ひかと心まはりて。少しふり心じやの。さりとて面白からんとあるじが背を叩けば。翁大きにむつとがり。うまれてより以來つひに女といふものに詞をかはした事もない。十年ばかり合住すれども。隣の婆めと火の取かはした事なし。たとへば日本無類の美なる女心だて良ても。随分いや風の鼻そげ若衆にても。一つ口にて女道衆道を申す事勿體なし。總じて女の心ざしをたとへていはゞ。花の咲ながら藤つるのねぢれたるが如し。若衆は針はありながら初梅にひとしく。得ならぬ匂ひ深し。皆達もきりやうは人並にすぐれて見ゆれども。女の道が好きかして。風俗がびたつて氣に入らぬ。衆道好の衆中ならば。火を打て進せふといふ。いづれも聞て手を打。是はかくべつの思はく違ひ。それほどに男色の面白きわけを知らず。成程翁の推せらるゝ通。今日迄は女道門にはまり。是より難有い事はないやうに思ふ我々。ちと衆道の面白きかた承りたいといへば。隣の老女首差出し。是若いしゆ。必ずあの親仁めに眉毛よまれて。衆道門の窮屈な方へ落入たまふな。彼奴はむかしえびすや吉郎兵衛座に勤めし野郎の果多くの僧俗をたらし。佛經家業をほるばせし古狐のこつちやう。鳥井熊之助といふかぶき若衆のなれの果。かまへてたらされたまふな。と窪みし眼を見出して申せば。翁笑つて。それは汝が身のむかし。六條三筋町にあつて夥多の人をばかし髪切爪をはなし。そら誓紙をかきておろかなるむすこをのぼし。つゝに家を失はせし三夕といふ傾城の果。おなじつとめといひながら野郎は實多くして虚少く。かりにも髪切指切爪離すなど。身を切實にせし事なし。惣じてけいせいにかぎらず。一切の女の心いきの冷たき事をいふて聞かせん。縁つきせし時分は。臆にすはりて箸も静かにとり。鑪せゝらず。焼物に手もかけずして。萬たしなみ深く。燈火の影を少し背きて源氏伊勢物語を中音に讀みてゐて外へは心をうつさず。我男のうたゝねに氣をつけ。すそへふとんきせけるなど。皆

實らしく見へけれど。なじみかゝると夫を尻にしき。こちの人よばはりして先はいやなるりんきをしおほへ。遅く歸れば面ふくらかし。物いわずして手もとの道具を荒くなげやり。さまんゝ夫に氣をなやます。是おのれが〇〇にして。一夜もかゝさぬ思案から他をせく心の否さ。殊更なじむほど世帯氣出て身嗜もわすれて。かりそめの物参りにも風俗つくる心がけもなく。木綿足袋では裾のきるゝを悲み。上着の衣裏のよごるゝに氣をつけ。無理に首をかゝむるなど。さりとて否なる心入。まして子などある女房顔には美を飾れども内心は怒てかため。死もせぬ亭主の先だゝれたら。此金箱はかくしてと。我身のかたつきをきはめおく。爰を以て悪七兵衛も七人の子中はなすとも。地女に心ゆるすなと女道を見限り。今に名言を残しぬ。わけて憎きは夫の死期に涙雨をなし。姑の見る前にて髪くるゝとつかねて切かくるを。姑涙片手に押とめ。其方の心底尤なれども。いまだ若い身なれば我分別あり。待たまへといふをふりはなし。もはや私の髪の入御分別はふつゝ否てござります。主にはなれ何が面白ふて女房たてゝおりませふ。と無理にはさみ切て泣いて見せしわろが。月日のたつにしたがい帽子の下から切た髪を見せかけ。浮氣男どもの魂を浮かせ。あちらから戀をしかけさす企。さなければ鼻の高い坊主と念比し。むかしより二倍いたづらになつて。亭主の忌日も忘れて。後は世間にはつとした浮名のたつ事皆天性の不心中。若道とはかくべつの違いぞかし。扱傾城の身の上を申さふ。ちと耳いたくと聞いて下され。野郎ゝと名たてがましうおつしやれど。おなし勤の身ながら心中づくになつて。いかふ思入の違ひあり。まづ傾城は打見には公家方の御息女めきて。小判といふものは髪水入の蓋か。酒はどこ

の井戸から汲て来るぞ。と世の事しらぬ顔つきはせらるれど。衣裏の厚い大臣と見らるゝと。たとへば鼻缺にもせよ。兎唇にもせよ。近頃御前へは出しにくい男になづんだる顔つき。それもせめて形はいやくとも。分里がさばければまだしもなり。随分文盲無事なる男にありました日より。私が命は貴様の物と細目してぬくゝとしたうそ。是欲のいたす所なり。其上其日の客をさしおき。いかに勤なればとて。横をきらしにゆかるゝなど。かりにも勤若衆にない







りき。あるは近所のしろと女に忍びかよひ。宿にては物縫女を〇〇〇〇。またはおなじ若衆中間の同士討。相手なしのてんがう。夜學のしるしにはこゑに黄な音出て。顔に面皰あらはれ。姿のけうとくなるもかまはずさまぐのいたづら。大方の客には秘傳の〇〇〇を以て参り。誠の分を立てたる顔つき可笑。兎角互ひの身の上。いふほど肩が出て我身ながらはづかし。これ皆むかしくの事にして。有て過た事いへば鬼も笑ふとやらん。是よりはなしのもやうをかへて。そなたが若いむかし。見および聞およびたる替りし事を語りたまへ。みづからもいにしへ今の世の女郎の身の上さまぐなりし事も。ぼつ／＼思ひ出して話し申さん。と翁も婆も打寛いて過しむかしを語れば。大臣末社を始めとし。これ何よりの春慰みと辨當を爰にて開き。花を見るよりは聞て心のうきたつはなし。あら面白の花の三月。

第二 仕掛のよいからくり聲

惣領は高橋にかゝつておちた身代

世になき物は江の刀と化ものと。人の内證に金銀ぞかし。爰に都の真中に代々の銀持。此先祖無間の鐘をつかれしや。末の今に至るまで銀のなる木の山なして。利銀請取針口の音四方の貧家の耳を驚かし。我と其名を持丸長入とて六十餘歳になられしが。世の人の見分ちがいて。いつとなく身體うすくなりて。世間むきはむかしに替らず。随分氣がさに取まはしけれども。おのづから不自由さあらはれかゝりしわけは。兄弟三人ありしが。惣領は藤内とてきりやうよく坂田藤十郎に其儘の生れつき。人皆犬藤十郎とよびしが。それにつれて不斷の風俗坂田が藝をうつしぬれ事に妙を得。女郎を手に入。随分位を取て何ほどの粹も五六會にてはふりつけ。なか／＼手ごはき大夫も。坂田流の術を以てあなたより手を合せ。初會から門まで送るほどにしこなす事を得て。しかも口説の名人。今都の大臣に。此

藤内に續く分知もなく。嶋原の縦横十文字。遣手のくめが龜の尾に灸のある事迄知りぬいたる元手に身體皆になして。佛性なるおやぢも堪忍袋の口をひらき。あきれて何の異見もなく。五年以前に内證勘當して何處へか追うしなはれ。次の弟半内に家をゆづり。其身は隱居の心ざしありしに。此半内容色骨柄千石取にしても苦しからぬ生れつき。口跡もつたいありて。しかも實なる所。詞のおとし思入はづみ。皆山下半左衛門が風にうつりて。又なきおやぢの重寶なりしが。兄をさしおき弟の家づく道なしと。是も三年以前の秋の夕暮に行衛もしれずなりにき。乙は娘にて今の世のぬれざかり。粹らしき目もと可愛らしきふうぞく。山本かもんは是程にも似るものと戀しのふ人。京中に何千人といふことをしらず。毎日方々よりいひ入れれど親仁其談合に取のらず。二人の兄ども行衛なくなりし上は。此家繼すべき男子もなく。ことに今内證は惣領が色狂ひに皆になして。老の入まい思案におちかね。日比の律氣これよりかわり。貧より無分別をたくみ。我内へ似あひの養子をねがひぬ。見へわたりたる所は棟高うして庭ひろく。世盛りのむかし。銀にあかして物好にこしらへたる住居を。今からくりのさいはひに。入聲の敷銀にて此家を繼がすべき事をたくみ。拾貫目入十箱拵らへ。中には分もなき物を仕込。此寶瓦石におとれり。いかなる聲にてもあれ。銀百貫目美なる娘相添へ。家屋敷ゆづりて。此身は其日より發心の望といへば。皆欲の世の中。此家の養子を望事數を知らず。其中に難波の浦にかくれなき大盡のなれの果。全盛のむかしは世の人のするほどの事仕盡し。新町前の荻野にのぼつ。身置は下り坂に腰おすごとく財寶皆になし。さすが名高き大臣の幽なる身と成て。四季小紋のかさねに小袖。三枚裕も大替りして千種色の木綿布子の身せばにして。借屋住居の哀れに。やう／＼手代どもが情にて。主従二人の命を繋ぐ。上荷船の貸賃を一ヶ月に四十匁づゝあてがはれ。是を酢にも味噌にも米薪にもしてほそき煙りを立て。若盛にうづ／＼としてくらしぬ。其生れ付とへうにして氣さくなる事。大和屋甚兵衛が御影といふても苦しからず。殊に浮世をどりの名人。皆人和甚とあだ名せり。今此不自由な身になつて誰異見せねど。世に銀といふもの大切なるこ



とを知り。あはれ二三年前に此氣がつけば。ふしみぼりの家は一軒取とむるものと。かへらぬむかしを歎き。俄に氣を替て何かな渡世の營をと思案なかなる所へ。浮世小路の卸宿の勘吉。都の入鞆の口を聞出し。是は和甚様が幸いの事。と朝食くはずに走り参つて都の入鞆の口を段々語り。今三十貫目さへ持てござれば。家屋敷と當銀百貫目に。眉め形すぐれたる娘とを其ま渡し。殊に鞆入の夜より親禪門は發心の望にて。出て再び俗家へかへらぬ思案たしかなり。然れば當分見せ銀さへ三十貫目調へたまへば此跡職は丸取。かやうなけつこうな事はまた日本に二つなき事。ましてこなさまはお生れだちがよいしゆなれば。御一門方にて當分見せ銀御かりあそばし。親本たしかに申なして。さよめいて鞆入あらば。先様には大分のおよろこび。お身の爲にはお仕合。兩方よしと仲人口に嘘をつきませ。勸むれば。和甚聞とはや心ときめき。是は成程相談すべし。他所を聞くと勘吉が口を固めて。急ぎ北濱の長崎屋といふ身上よき伯父の方へかけゆき。勘吉が話せし通を一々語れば。それは頼母しき身體。相違あるかなきか聞合せ。しかと治定したる上ならば。當分の見せ銀ばかりは何時なりとも貸てつかはすべしと請合たるを悦び。すぐに浮世小路に行て勘吉にあい。さあしてやつたぞ。見せ銀は一萬貫目でも貸べきとの事といへば。扱はめてたし。此方に少しもいつはりのなき事は私の請合ます。急ぎ銀を取寄たまへ。一日も早いがよしと採立。程なく日限さだめ。難波より都への鞆入に極まり。彼三十貫目を持運ばせ。首尾残る所なく。千秋樂うたひて祝言は相濟。親長入は其夜より只今財寶渡すと藏を開き。銀百貫目をたしかに見せて。いづちへか行ぬ。かねてより實子ども不孝にて世に飽果て。此覺悟なるべし。定て諸國の靈佛を拜みにめぐる修行。よき仕舞と羨む人多かりぬ。さて和甚は今こそなれと商ひに取付く。諸方の間屋ども聞つけて。何をかけてもあふなげなし。まづ有銀百三十貫目は目に見た身體。と絹布。糸。綿。と俵物。何なりとも好次第に頼まねども人がきもいり。千貫目が商もなるやうに仕掛たるに。和甚思ひ外の仕合。まづ見せかけ銀は濟すべしと。右の三十貫目をば箱の封もたがへず。北濱の伯父が方へひそかにすまし。いまだゆづりの百貫

目には手もつけず。外より来るあきない物にて利徳大分あがり。末は知らず打見には長者の如く。うれしや爰てこそむかし戀を仕殘したる。都の色里大坂屋の女郎に是見たかと手をうたすべしと。又持病さしおこり。中比の寒い事をわすれ。あつい時分のかさね着。下は黄八丈に紅のかくし裏。少し手ぬるき仕出し。上には何となく黒羽二重に香の圖の大紋。上繪なしに至らせ。魚子織の羽織。菊綴の大脇差。素足に細緒の躡草履。焼印の笠をかたふけ。鸚鵡が跡目孔雀の吉郎兵衛といふ事知の末社。其外同じ類なるくせ物四五人めしつれ。北の門よりさよめかしてなりこみ。以前難波にありし時より定宿にして目をかけし揚屋に入れば。亭主はと口をあいてしばらくふさがす。あんまり肝をつぶし。さてお久しや。難波のあしき噂聞まして。噂とも申て半分死ておりましたか。色里より外人は嘘つかぬものかと存れば。町から来るものにも油断はならぬ世なり。旦那の事は今ほど大きなやつし姿と申せしが。むかしに勝る御來臨。さりとはおなじみとて御失念なく我等方へのお心さし。忝じけないの百も二百も申内に。噂が盃持て出。けいはくのあるほど申て扱太夫様はどなたやらと大臣のお顔をまもり奉れば。吉郎兵衛おつとつて申は。旦那以前高橋様に柏屋方にて御一座なされ。お情とお詞を殘され。それより中絶なされ。今其戀をわかやがしに御出と申す。亭主承つて今日は井筒屋方に御入。何とぞもらふて見ませんと。夫婦智恵を出し。どふやらかうやらまんまともらひが叶ふて先は我々が仕合。是といふも名高い旦那の御威光ゆへと無性に取のぼされ。さん用なしに大氣を出し。庭につかはるゝ男女にも小判の花をさかせ。それ隙な女郎いづれにても七八人つかんで参り。座敷にぎやかに。仕れのよし。今よい客の稀な時。是はと宿屋の上下いさみをなし。お手が一つなれば。あい／＼と五六人も一度に返事を申ぬ。しばらくあつて太夫様御出と申せば。早速これは忝ないと床脇になほし奉れば。まづにつこりと笑ふて。のつしりと座につかれた所。生れついて太夫姿に備はつて。顔に愛嬌。眼の張つよく。物ごし少しにごり。色飽まで白く髪の結ぶりしやんとして。歩行ぶりしとやかに。道中のつしりとして霧波千壽にいきうつし。まだよい所があると。



〇〇〇〇人の語りぬ。扱酒事になつて。引やら唄ふやら笑ふやら。さまぐの大きわざ。これてなければ此里おかしからず。女郎宿屋のうれしがるより上をしてとらしぬ。其より次第に募つて。近々大夫根引にして下屋敷にうつし。手池にして眺めんと亭主夫婦親方へ内證申。高橋借銀ともに高八百五十兩で相済のよし請合申せば。近比心易い事。然らば來廿一日日柄もよければ此日廓を出すべし。それ迄はけふから十日餘もあり。最早他の人に艶顔見する所てなし。けふより身請の日までは爰に揚詰。と萬事大氣に出て高なしの酒機嫌。おつつけ向脛から火性の大。魂入つやしきも人の物になるは知れた世。

第三 一盃喰して乞食にもらふ命

見せかけ大臣はりやひの買論

木綿布子に絹衣裏かけて着たるも人によりてとがめじ。又手織の袖花色に染て肩に縫上して淺黄の首巻したる男など。むかしは女郎一座する事も嫌ひしが。近年には世につれてたとへ革足袋をはき。塵紙の鼻紙入るほどの人にも。内證知れていふた事のちがはぬ客を大事にするは尤の事ぞかし。紅裏見せかけ。あたまつきを仕事に拵へたる男にあふも。大勢のつきあいにはよけれど。必ずさやうの男は買がかり濟まさず。諸道具も賣喰に暮し。次第に幽になつて。何の口説も子細なく。逢はぬやうになりぬ。とかく女郎に風なる仕出して思ひつかれんと思ふも物事むづかし。買てあそぶほど埒のあいたる事はなし。必ず色あそびに。物もつかはず賢くなる時分は銀がないものなり。銀のあるうちに粹になるものならば。舊離切らるゝものはあるまじ。昔より見及びしうちに幾人か粹になるゝと皆になるとか一時。あはれや實にいにしへはと誇つたひより。今少しふるき素紙子を着て深編笠に竹杖。便なき風情して揚屋の門口に立て内を覗くを。下々の男はしたなく手の隙がない。通りやといへば。此男情々と出て行。花車が見て今のお

方呼返せ。物貰いにしてはいかにしてもいやしからぬ所ありと。人までもなく跡を慕ひ。誰様でもあれ。わざ／＼御出まし／＼。我に詞もかけたまはぬは少しはお怨も申上たしと手を取。内へ連まして歸り笠をとれば。藤内様。これは此姿はと涙を流す。藤内恥を捨て、顔をあげ。豫て存るも。此さまになつて此所へ。男なれば參られぬ所なれども。ざりとは此身になれば。心迄つれて昔の藤内ではござらぬ。先は馴染を便にこれ迄參りしは。近頃わりない事を頼みに參つた。皆もきかれつらめ。我事五年以前に勘當請。少時乳母が方に隠れ。それより悪性友達方を二夜三夜つつ廻り番に泊りありき。命さへ恙なくば何卒親仁へ勘氣の訴訟申て。二たび歸宅の願を頼みに。うか／＼今迄人の投害になつて一日暮しにせし所に。今年妹に簪をとつて跡職を譲り。親仁は諸國修行とやら。又は高野へ引籠り。後生一遍に祈らるゝとやら。今は佛の繩も切果てゝ。木から落たる猿ほどにむごい身にはなりぬ。然れば男をたてゝも面白からぬ浮世出家と成て。何地へなりとも死に次第に參る合點に心底を極しが。世にある昔大夫高橋と互にいつはりならぬ深き契約は。請出す事のならぬ首尾ならば。年の明を待て夫婦となり。一生替らず添果つべきとの誓紙を取かはせし事。思ひ廻せば罪深き事。出家になるからは此起請一つは我身の迷。大夫がさかゆく末の障ともなれば。夢の間あはしてたまはれ。互ひの誓紙を取戻し。即座に燒棄。塵も灰も残らぬやうに心中を清め。剃髪いたしたき願と涙玉なして語れば。内儀も共に涙を流し。おいとしぼや。何がさて大夫様に逢せませいで。幸ひけふは奥座敷に御入。先はお仕合にて近々身請あそばすはず。尤主様はおまへと深き契約ゆへ氣の毒さふにはおはすれど。勤の御身なれば力ない御事。先酒一つと手づから燗鍋取持。昔にかはらぬもてなし。近比／＼満足。扱何ものが引ぬく。と思ひ切し心からも少しはせき心にて尋れば。されば外でござんせぬ。今お物語のおまへさまのお妹御のお連合様。大夫様の御借金共に何か八百五十兩にて首尾いたすと申せば。藤内あきれ物をもいはず。しばらく有ていへるは。必ず内儀。酒の上にて何程の贅をいはふと誠にめされな。恥をいはねば理がきこへぬ。外へは沙汰なし。妹が夫に極まれば大きな



嘘とも嘘とも。請出す事はにおいて。揚銭が大分かさならばはやうせがみにやられ。何をかくさふ身どもが身體。此男が五年以前にうつくしう皆にして内證はから大名。ちやんが一文ないを知て。弟の半内もうはばは兄をさしおき。弟の家を繼ぐこと道ならぬ事。と賢人だていふて夜ぬけにせしも。家がもてぬといふ事を知つて。親仁へ譲りて行衛なうなつた事。其家の物領此鼻が言には少しも違いなし。犂めが持て來た三十貫目があるよし。其如く大場にやりをらば。間がなくとも最早五百はいななどはつかひすつべし。我等勘當にあふて立退く時分。家屋敷はいふに及ばず。持佛堂まで直打して三十四五貫目には足らぬ身體なるを。何を目あてに根づよい顔して請出さふとは人聞よいせんじやう。いとしや此間もはや錢にもならぬ客に女夫頭を疊へ摺付け。夕飯夜食冷しものゝむき栗まで。喰れ損になるであらふといへば。今迄勇みし鼻が飲み懸つた酒胸につまり。ぎく／＼して腹を立て。さりとは憎き仕方。然らばおまへさまを見せかけ大臣にいたし。鳥を追ふて今の容めにけふ正銀を出さするやうに張合をかくべし。と素紙子をぬかし申。外の大臣の預り衣裳を打させ。中二階へあげ置。亭主を呼びて耳に口あて、件の次第を吹込めばあるじも我ををり。夫婦心を合して奥座敷へ出れば。いつもの調子に和甚大臣辰巳あがりの聲して。何とて夫婦共に勝手ばいりいたすぞ。小判の蒔時おそくば。何時なりともこりや降らす事じやが。と座敷にはどかるほどに申せば。まづそれも忝なし。と亭主少しむづかし顔して。氣の毒な事がござりますは。高橋様なじみのお客只今中二階迄御出にて。身請の義おき、あそぼし。何とぞ先様へ斷申。千兩にて急におや方に貰ひくれとの御事。尤もおまへ様は先約と申ながら。此方はおなじみと申。殊に金高貳百五六十兩の違ひあり。何とも此段私一分の了簡にては濟しがたし。慮外ながら大臣様におあひなされ。直に詰開きなされ下されかしと眞顔になつて申せば。和甚せき心になつて。扱は身ども千兩迄は得出すまいと思ふか。今でもあれ物の見事にならば。太夫とつりがへにしてかへるさざし。其大臣にあふもむづかし。とかく曲輪に一日も長置するゆへにさまざまの障出來。のむ酒までが心よからず。所詮けふ金子取來り

て太夫と引かへにして飯るべし。とはちげんをはなせば。藤内中二階より飛おり。奥座敷へ案内なしにつゝと入。腕なしのふりずんばいと無い袖がどふふられう。さあ千兩の事はおけ。八百兩でも只今爰へ持つて來て見よ。なんとしなるまいと氣を持せば。和甚いよ／＼つて。汝にはいひぶんあれども今いへば物に似てわろし。とにかく立かへり。金子取て來て見せふが。我も身どもが三分一出すか。お、一萬兩でも我が出すほどは。今なりとも出さふといふ。成程それ聞事なり。とかくの論はやめて小判の山をついて見すべしと。末社共は座敷に残し。おのれ我内蔵に手のつかぬ百貫目を知らずや。取出して物の見事に積重ね。太夫引かき。きやつに鼻をあかせんと御籠にもならず。足の中にして宿へかへり。さて藏を開き。彼百貫目の箱を六箱取出させ。封を切て見るにははいかな事。銀にはあらず石瓦也。和甚工夫におちず。一箱／＼明させけるに四番目の箱のうちに。一通の文あり披き見れば。我先祖より代々身よよろしきものにて。大分金銀此藏に入置來りしを。物領藤内いつの間にか傾城狂ひにつかひすて。かく皆になせしゆへ早速勘當はしたれども。撒散せし金銀はかへらず。弟半内と内談せしに。是もあくみて國遠いたし。たゞ此屋敷ひとつ残り。内證人にしられんも口惜く。さいはひ乙の娘に此銀をいつはりて聲を望みぬ。夫婦は二世の契なればたゞ不便と思はれ。此事人にしらせず持參の敷銀にて跡を立てたまへ。近比はづかしけれども。世は張もの。かへすがへす頼むと書きとめたり。和甚つく／＼思ひかへせば無念やら道理やら。さだめかねて女房に此事をかたれば。私は少しもしらざる事といふて涙をながすに恨て詮なき事ながら。此百貫目をあてに萬大がかりに仕散し。諸方買がかり。當座の預り銀。第一の太夫身請のけふの首尾。手筈違ふては男の一分たゞず。さりとは先の大臣が思ふ所もくちをし。一期の安否爰に極まり。兎角死なねばならぬに極め。覺悟仕済まし宿を立出。六波羅野を志して一筋に蛇の辻子の藪陰に一人の非人。面桶枕に寢せしを揺起して。扱も其方は何として其體にはなられたぞ。古郷にて朝夕噂して。行衛覺束なしといひ暮すに。爰にて逢は偏に六波羅の觀音の御利生。先は姿の見苦きに是着たまへと羽



織を脱いで着。あたりの茶屋にて酒などもとめひたと強ければ。此乞食自分に覺はなけれど。悪からぬ事ゆゑ。是は過分と好い加減に挨拶したるに。たわいのなきほど酔せ。着物帯脇指頭巾までやりての上に。咽笛を突通し。其身は其處を立退ぬ。跡にてこれを見付やれ和甚こそ自害したれと。ばつと世間に沙汰ありて。繪草紙の種となつて過ぎし昔語り。

第四 島原へ御來迎三尊の身替

黄金の膚とは金につりがへの女郎

此家屋敷裏に四間四方の内蔵二ツあり。來る五月三日に入札にて賣申候。和甚一度は手廣見せかけ。大盡顔して住しが。可惜身代を傾城狂ひに皆になし。其身も置所なくて無分別よりの無理死。若い者のよい手本と。負せ仲間の親仁どもが打寄ての評判。いとしゃ内儀は夫に離れ。住馴れし家も近日人の物になれば歎の上の歎。ひそかに僧を供養して心ばかりの弔ひ。家來にも残らず隙を出し。主手代城兵衛とて顔に悪相表はれ。男つき物いひまで三笠城右衛門が兄といふても。叱りての無い程好似て。面に實は飾れど生れついで意地わるく。朋輩もようはいはざりし男なるが。此度の仕誼わたりなみの奉公人同然にお暇申所てなしと。後に残りて内儀への心づかい。常とは格別ちがひ。頼もしかりき。今宵は夫の十七日の待夜とて御明をともし。香花をそなへ。靜に念佛申。悲みの涙袖に餘りておのづから手向の水となり。たゞ夫の事のみ思入たる風情儘しくも憐なる。夜はや更て物淋しき折ふし表をたゞくものあり。誰じやと城兵衛戸をあくれば。色淺黒く高岡村右衛門ともいひさうな。さらに殊勝氣のない出家。御免なされと内に入て。あるじにお目にかゝりたいといへば。城兵衛申は。旦那は近き比果られたり。何にてもおほせらるゝ事あらば。拙者義此家久しき手代なれば承らんといふ。然らば御内儀にお目にかゝりたいと。臺所に腰をかくる。是は聊爾千

萬。つゝに見なれぬ御出家に。何の子細もきかて。うか／＼と内儀には合せ申がたしと申す。成程是は尤なり。愚僧義は播州書寫坂本にすむ法師なるが。此家のあるじ長入今程は同國清水に山深く分入て佛の道をねがひ。出家堅固に勤らるゝといへども。自分の佛なくして愚僧が佛を暫く借し参らせし所に。拙僧上方へ登る由を聞かれ。然らば故郷へ立寄。我俗にてありし時願ひ入し惠心自作の三尊あり。これを舞娘に於いて取歸りくれとの事。則愚僧は長入老とは法券。西心坊といへる者と始終を語れた。内儀は奥より走り出て涙を流し。それはみづからが父御にてまします。祝言の夜我々を見捨立退きたまひてより遂に音信もあらざれば。如何と案じ申せしに。御息才なる便りを聞。嬉しいやら。懐かしいやら悲しいやら。取まての涙片手に。さぞ萬につけ御不自由におはすらん。成程佛を参らせん。幸ひ今夜は我妻の待夜なれば御回向なされ下され。明日お歸り遊ばせと自ら草鞋をぬがせ申。さまざまもてなしたまへば。城兵衛はすまぬ顔して。たとひ親旦那のおほせにても。三尊を進ずる事はならず。まだ奥様には是程世に知れての分散をかくし。詞をつくるはせたまふ愚さ。何か恥なる事ならん。此家には大分借銀有て。負せ中間はや先達て。家財に封をつけ皆入札にいたせしが。諸道具の中に此三尊がねうちありと。中間共目をつけ。三十兩餘の入札。念もなひ唯はくれまじ。くれぬとて我々も衣類迄つきたて。布子一つの身なれば。何を替りにやるものなし。御出家も明日齋を参らば。負せ方に禮をいふてまいれと。にがり切て居るもことわりぞかし。内儀は血の涙を流し。さりとて思ふにまゝならぬうき身。是迄と庭へ走りおりて。井の内へ身を投入れんとしたまふを。法師あわて、取とめ。成程心底ことわりながら。人間の盛衰はあざなへる繩の如く。昨日榮花に暮せし人も。今日は淺猿しき身となり。人につかへて親をはごくむ子もあり。是皆浮世の習ひなれば。如何に女氣なればとて強て悲みたまふは愚痴の至り。とても身を捨てたまはんとならば。同じく親の願ひを叶へ。佛の爲に身をすてたまへ。然らば現世にては孝行の道にかなひ。來世は此三尊今の心ざしを歡喜あつて。上品上生にむかひ取せたまはむ事疑なしと。辨にまかせ諫むれば。城兵衛



又おつとつて申は。是なほならぬ。談合なり。今時何奉公したればとて。五年や十年で小判廿兩とも溜る事てなし。既に我此お家へ坊主の時御奉公に參つて。丸廿五年つとめて。擧句の果に手と身とで立退く仕合。まして奥様は御誕生の日から。つゝに手痛い事を御存じなく。朝暮琴三味線又は十種香歌がら。扱は月見花見芝居見。色作る事を仕事にして。世上の事はかいしき。米が食になるはと笑はせられ。秤は軍の道具かと。萬榮耀に育ちたまふ身として。なんとして御奉公はなるまじ。もしそれも傾城などに身を賣たまは。三十兩といふ耳のそろひし小判にはなるべし。さもなくて外の事では思ひもよらぬ事といふ。内儀は赤面して。いかに佛さまの事なればとて。過し夫の手前もあれば。流の身となり。多くの人に肌觸ん事。喃うるさやと身をふるはして嘆かるれば。法師笑つて。おろかや女中。それ佛果を證せんためには。六波羅密を行じ。鳩のかほりに肉身を施し。又は四句の文を聽て鬼の餌食となりたまふ。さればむかし天竺波羅奈國王の。第一の后扇陀女と申は。一角仙人とて枯木の如くなる身に木の葉衣をまとひ。頭に角生ひ。偏に鬼神の如くなる仙人に契りをこめ。つゝに通力を失はしめたまひ。萬民の愁ひをすくひたまふ。是皆佛の化現にして。今に傳へて有がたし。なんぞ佛の爲親の爲に。流れを立られん事嘆かしき事にあらず。亡夫の爲には供佛施僧の營みをしたまはむよりは遙かにまさるべしと。似あはしく理をならべて申ければ。女心の果敢なく實と聞なし。有がたき御教化。何か假なる此體。佛のため親の爲に惜むべきにあらず。此上はいかなる方へも我身を賣。其價ひにて三尊を取もどし父御に進じ申べしとあれば。城兵衛も表向悲しきふなる顔をして。是非もなき事ながら。親御の御爲とあるからは止め申べき事にあらずと。明日色里に伴い名あるくつわの許に行。内儀を見せて相談すれば。親方艶顔を一目見て。是は仕合がななる瑞相と行末を悦び。何かなして金子百兩城兵衛に渡せば。これ忝しと取て歸り。件の法師にあふて御蔭々々。さりとは甘ふ食はせた。旦那かやうの首尾なれば我此まゝにて爰を出ては。明日から何をせうも資本なし。さるによつて貴方を頼むてかうした修學。なんと智慧であらふがと。百兩の内拾兩西

心坊に。御苦勞賃じやと差出せば。法師悦び。何時でもこんな御用があらば。重てからも遠慮なしに仰られ。よい事は存せぬ法師。ちと草庵へお尋なされ。女房どもにも近付に致さうと立別れぬ。扱も内儀は城兵衛が悪心にてたばかりしとは夢にも知で。親の爲とて思ひよらざる勤姿。名も琴浦とあらため。つき出しとて俄に風俗をつくれり。萬町方の物好とはちがひ。眉そりて置黛こく。小枕なしの大島田。一筋がけのかくしむすび。細疊の平疊。八端がけの八丈島を。二尺五寸袖。當世仕立にして腰に綿を入れず。裾ひろがり。尻つきに味をやり。しんなしの一幅帯に。緋縮緬の二布。二重に給縫にして。昔はなかりし差櫛。匂ひ油も常にかはり。顔に白粉いろどらず。口紅をさゝず。肌ありのまゝ見せかけ。素足道中。腰をすへての繰出し歩みのつしりと。近づきならぬ人にも。好た男のやうに。見ぬやうにして見る事。是情目づかひとて。女郎の傳受事なり。されば古代は身を拵へ。貌を作れるを傾城遊女の風俗とはいひしに。さりとは各別の世に替りける。其比大坂堺筋に中村屋四五平とて。物いひは岩井半四郎に似て。男つきなりふり其まゝ中村四郎五郎に生うつし。親四郎右衛門代々法華宗にして。都の何某所持せられし。日蓮上人眞筆の八枚續きの大曼陀羅。歴々の御上人たちの御添状まぎれなきを。此度金子千兩にもらふべき約束にて。一子四五平に金子を持せ都へ上したまひぬ。元來此男。色の道にあながちにかしこく。難波の半太夫を手に入自慢。男好くして米の來る風。先まんだらの用はさしおき。京の名題末社に案内させて西島の色狩に立出。琴浦を一目見て死ぬるばかりに思入。隙日を幸ひに。すみや方にて始めての御見なりまし。それより譯もなふ取亂して。親の事も曼陀羅の事も。忘れ果てゝ面白がり。萬かさ高に出て曼陀羅金の光つよく。げにくい客はね題目にして。外の男には緋ちりめんの戸張拜ませもせず。逢初し日より揚詰にして。無上にのぼつて急に請出す相談。何がそれしやの密相ども。虚空にそやしたてゝまんまと物になして七百兩にも根引にし。樵木町の借座敷に迎へて我物にして樂む最中に。大坂の親父此首尾を聞きつけ。今日もあすもさまして俄にのぼり。ことわりなしに座敷へ驅入。さて〱おのれは胴より肝の太き



奴かな。傾城買とて此まうけにくい金を持せて上したか。佛の事も親の事もわきまへぬ後先知ずのどうらくめ。刻んでも飽たらず。これからすぐに勘當と。紙入着るもの羽織脇指まで引たくり。下着ひとつで追拂は。力及ばず四五平琴浦が手を引、氣づかひするな女ども。男は裸百貫といへば。十三匁錢にしても。一貫三百目は身の内についてある。さりとて親父様よい年して文盲な。曼陀羅の尊より。女郎の有難事を御存じないの。惣じてつかひ盛の若ものに大分の金を預けらるゝからは。こなたも少しは合點の筈じやに。是はあんまりどうよくじやと。此詞を限にいつくともなく出行けり。

第五 色より思ひを掛奉る曼陀羅

れんぼの闇の暗宿。あかざり足の飯焼

古今女郎買の仕廻に。好い仕舞といふは稀なり。我物ばかりを皆にして。人を大分倒さぬが上々の仕廻ぞかし。あはれや和甚世間へは死だ分に見せかけ。深く其身を隠し。昔の風俗はなくて。おのづから器量もさがり。藤の森といふ所に隠家をもとめて。南に窓ありて。東口に繩簾をかけ。軒は蔦かづらのしげり。袖ずりの長路地。爰ぞ宇津の細路の心地して。夢にも人にはあはず。物の淋しき夕は蚊ふすべの鋸屑賣。あしたに日貸の錢取にまはるなど。せはしき事を聞て。世をわたる業として花庭を織習ひ。かなしきくらし。かけ釜懸て。昔酔醒に好し青榮勝な水雑水を今は不斷すゝり。是もない時は腹をしめてねるより外は。誰をたのみにかゝる不自由なる所へ。中村やの四五平和甚とはさしわたしの従弟。親の機嫌のなほる迄はかゝらふ島もなくて。ひそかに和甚が隠家を聞出し。琴浦を伴ない。やうやう尋來り。表に女を置いて其身ばかり内に入。和甚肝をつぶし我は此世にはない分にして隠るるを何として聞出し。いかなる事て尋來るぞと問ば。されば細かう話せば長ふなる。つまる所がそちと同じ身持にて親に勘當を受け

當分たよるべき方なければ。そちを頼みにして尋來りしが。我獨身にもあらず。勘氣はうけたれども女郎買の本望は遂げてあひなれし琴浦といふ太夫を引ぬき。今は影の添ることく二人身じやと語る。さりとては出来した。其こそ色道嗜むものゝ本意よ。此後はいかなる貧な暮しても其女郎さへあれば。浮世の樂はあるといふもの。まづ女郎にも知己になり。互に情の深き手釣瓶を汲ませ。三人俱縁ぎにして短かき煙を立てば。どふもいへた事であるまい。それ太夫様呼びましやと昔忘れすゝり出せば。四五平悦び。表へ出て琴浦が手をひき。こりや此君ゆへに此體になつた。ひけらかすては無いが何と我等が物好悪うはあるまいが見すれば。和甚ははつと肝をつぶす。琴浦はまさしう死なれしと聞きし夫なれば。是はとしがみつきて消入るばかり歎くを突退け。ほつと溜息をつく。思案して。側にありし大小刀を取て四五平に向ひ。最早死ねばならぬ所。他人でもある事か。親類の身として我に恥辱を興へる仕形。弓矢八幡堪忍ならぬと飛かゝるを。琴浦中へ隔たり。全くあなたは御存知無事。子細はかやうくと。城兵衛法師が様子詳細話し。親の爲身を賣りしと。次第残らず語れば。兩人呆れて是はいかなる因果ぞと。三人一所に暫時泣いて。和甚がいふやう。何とも城兵衛法師が言分合點ゆかず。我舅ながら其方親の長入は内證に機關をこしらへ置。我に一盃くはせ置いたる覺えあれば。二度古郷へ音信もする覺悟にあらず。まして出家の願ひありて佛もいらば。我を聲にとられぬ先に三尊をのけらるべし。是をよく推するに。日比城兵衛色も情も知らぬ。大欲無道の男め。法師と心を合せ其方をたばかり賣て。金をしこためたるに疑ひなし。とかく憎きは城兵衛め。何卒尋出し。八裂にしてと身を悶く。四五平はそれには構はず。まづ此女房どもはどちらのにしたものであらふと。早〇〇〇〇〇〇穿鑿すれば。琴浦申は。其は私了簡ありと。和甚が持ちし小刀追取。自害と見えしを。二人慌てゝをしとめ。死てはいよく恥の上の恥なれば。爰は何とぞ思案あるべし。かまへて聊爾すなとやうく止め。扱四五平よい智恵はないかと問ふ。ハテ智恵を出すにおよばず。昔から添馴し女房なれば。かく知れた上には最早我等は添はれぬ首尾。とかく犬骨折つて高い女



房共を進上いたすまでといふ。近頃過分な了簡ながら。爰は又我等が一通りを聞いてくれ。尤今不測に逢ふたとはいひながら。もと我事は知略にもせよ方便にもせよ。一旦死だ真似をせしからは。最早此世に我はないもの。然れば後家といひ勤女といひ。傍からかまふ人はないはず。既に遠國の知らぬ大臣引ぬいて去だ時は。此詮議はない所とかく其方が物にして好きにせいといへば。いや／＼それでも寢心がさつぱりとせぬと。暫時工夫して。棚にありし古硯箱を下し。鼻紙出して金子七百兩と書付。和甚に向ひ。其方身體零落て嘸不自由にあるべし。よい一門持しは此時の爲なれば。身にかへて僅ながら此金子を合力すると差出せば。是は何とも心得ぬ事。こりやどういふ事じやといへば。ハテ是ほどの事が合點ゆかぬか。親類なれば金銀を貢ぐまいものでなし。又貰ふまじきものでなし。其方此合力金を得て。我好いた女郎を請出し。心のまゝに。添へといふ事じやと。否とはいはれぬ云分に。和甚感涙を流し。成程々々。浅からぬ心ざし。忝なし。然らば此金子申請て。重て仕合をいたしなほした時分御禮申さふと。件の書付を推戴き。扱琴浦に執心なれば早速請出した。其は易い事。勤の身は金次第て自由になる事。突出しより間もなければ借銀も無いげな。高が七百兩で埒の明くこと。是は近頃心やすいせんさく。然らば此金で引ぬきたいと。最前の書付出せば。四五平請取。琴浦を渡し。ざつと是て相済んだ。扱一所にゐるも氣詰りなれば。幸ひ隣の明家借度願ひ。其はともかくも心任せと。家主へいひ込み。月に貳匁五分の宿代。昔の色里へ文の使ひの賃よりやすい事も。今の身にてはすましかね。頼む此宿も屋賃重なれば。荒れたる棟を其儘に。雨もたまらず。漏くるを破傘にて凌ぎぬ。濡より起る貧乏此管とあきらめ。四五平は鈴つぼ／＼の土細工して。稻荷の前へ投賣して身體の尾を見せける。和甚は花庭もあはぬとて。煙草を刻習ば。琴浦は木綿の柳といふものを繰りて。糸より細き世渡りに氣をつくし。琴浦は人置の鼻を頼み。都の棟高き町家へ腰元奉公に出月日を重ねしが。もとより人を使ひし身の果。善惡の分を。飲込の好い才覚ものと。主人の氣を取ること。それは／＼痒き所へ手の届くごとく。下々ともによしなに申て。此お家には

おぎんといふ女なうてはと。諸人に思附かれしは其身の賢きゆへぞかし。傍輩のおりんおさつ。たまなどは。素性賤しく。二十二三の時分から奉公しめて。今迄幾所か經歷り。随分すれた女ども。いかなる強自慢する男ども。腰に引着けて巾着といふ名取ども。表向はまだそんな事知らぬ顔して。久三がてんがうするにも上氣をし。萬にあどなく見せかけ。主人に心をゆるさせ。月に五七度も目にたゞぬやうに隙を貰ひける。其仕掛の凄じさ。初夜過る比に宿の鼻が表を叩き。おりんを呼出しに來れば。表へ出て二つ三つ物語して内に入。奥様のお前へ参り。在所の母親六條参りいたされまして。次手ながらまめな立ちながら逢ふて。明日は早々歸度よし。宿から只今呼びに参られました。切々お隙を貰ひまして。内方の御機嫌も勝れねば。又かかねての京上りに逢ひませうと。返事いたしますれど。宿の姨の申されますは。母も死ねば端かして。人懐しがりて今度も六條参りは假令の事。第一娘とも逢たきばかりに上つたとしみる／＼いはる。思ひなしか此前上られた時よりは。いかう弱られたやうなれば。又逢やる事も不定な浮世。つひ立歸りにお隙貰ふて逢やれと申されます。いはれますれば明日をも知れぬ老の身。一寸あふても参りたうござりませすれど。餘りせつ／＼お隙もらひますさかいてと。涙ぐみて申せば。さすが下々のひすい事。知らせられぬ奥様なれば。ヲ、親の身で子に逢ひたひは道理／＼。然らばつひ行て参れのよし。忝なしと直に二階へ驅上り。下に絹物上に木綿の裕引張り。日野の二布に仕替て足早に立出。小宿の裏口より入れば。相手は丁稚上りの若い者と見へて血氣男。釣御前の下に。長う短うなつて待兼ね。奉公して居る所から爰までは何町程あるぞ。もまた來そうなものじや。今といふてござつたのと。鼻にせはしう問ふ時。茶屋の前へ靜にあがり。待兼ねござんしよと思ふて。いかう氣がせきましたと。まづ茶を汲て彼男へ差出せば。何してござるやら。暮れぬ前から待つて居ましたと。紙入から壹匁八九分もある。小平たい銀を出し。噓州酒取て來て下され。彼方へも進ぜたし。身ども飲みたいといへば。さて／＼是は現銀に堅いお人様じや。酒の取たもござりますと。戸棚から備前焼の大徳利出し。ちろりへうつし。おりんどの爛し







より白き細き腕を。捻上げ、詮議する中ばへ。時分よしと和甚は。表より小腰を屈め。お腰元の吟にあはふと。慮外ながらおつしやつて下されといふ所を。下男ども二三人そりやこそ同類かうせたはと。何がなしに叩伏せ。お吟諸共所の目代殿へ連て行くといひしめければ。和甚申すは人の實を奪ふからは一命を棄て。夫婦ともに覺悟しての仕業。全く命惜さに辨解するにあらず。一通りお聞届けられ。我々夫婦相果てたる後にて。此首尾を御不祥ながら。通じてもらいたき方あり。此度の盜は貧より起つて身の爲に盜せしにもあらず。元來私義は中京に隠なき持丸長入が鞆和甚と申すもの。惡所狂ひに身體を持損。借銀の方へことわりの品なく。世間へは自害せし分にして。藤の森に身を隠せし後にて。主手代城兵衛と申すもの。是なる女をたばかりて。傾城町へ賣て。勤女となせし所に。拙者親類中村屋四五平と申す者。我等婦妻とは存ず。露命も消ゆるばかりに思ひこみ。即ち此方の曼陀羅を申請る代金を。残らず此女に打入。身請をさせし科によつて。親四郎右衛門勘當をいたし。たゞずむ方なく女をつれて。其とは知らず私隠家へ尋ね來り。對顔の上婦妻といふ事を知て。私へ合力分とて。金子七百兩書付を以て與へし事。此金子にて女どもを請替して。永く添との深切なる心ざし。夫婦心底に徹し淺からず存し。もと四五平勘當せられし發りは。親四郎右衛門申付の曼陀羅金此女に打込みしゆへなれば。何卒此恩謝に曼陀羅を盗出し。四五平に與へ親の勘當をゆるさせたく存じ。夫婦内談致し此お家へ腰元奉公に出せしなり。不運にして存立無となつて。相果申す所は前生よりの宿業。更にそれを悔にはあらねど。我なくなりては四五平一生勘當の身となり果ん事殘念の至りなり。よし／＼是も定る業。たゞお慈悲には亡骸を見苦しからぬやうに取おかせられ。此心底を藤の森に残り止まる。四五平に仰聞けられ下されなば。生々の御恩と涙瀧をなして語れば。主横手をうつて。扱は聞及びし和甚殿にておはするか。貴殿の伯父御。難波の長島屋の何某。近き比相果られ。家をつがるべき子なく。和甚今まで存生あらば後目に立て。長島屋の家相續さすべきものと。頃日中村屋の四郎右衛門上京にての噂なり。いまだ歸宅はいたされまじ。存命のよし申遣し。是へ

呼寄せ逢せ申さんと。樵木町の借座敷へ。早速人を遣はしたまへば。四郎右衛門夢の心地して走り來られ。和甚に逢ひて悦び涙。まことに親は泣寄とは。こんな事なるべし。此世にあるこそ幸ひ。父方の叔父の後。汝ならてしものなしと大方ならぬ悦び。和甚も邯鄲の夢見たやうな仕合。此上は千萬兩の金も自由の身なれば。最前の通り千兩にて。曼陀羅申請けたき願ひ。叔父長島屋は淨土宗にて。法華の曼陀羅何にすると。四郎右衛門尋られしに。右の様子を語り。四五平の勘當を訴訟を申せば。近比優しき心底。曼陀羅に及ぶべきか。なるほど勘當免したと。是も藤の森へ人橋懸けて招寄せ。親子の對面これ偏に日蓮大菩薩のお影と。内藏を拜して感涙を流しぬ。かくて和甚はいにしへの負せ方へ人を廻し。あつて過ぎた分散の殘銀盡く濟し。今は世界廣くなりて。夫婦難波に立返り。今を春べと榮ゆる時にあふぞめでたき。

風流三曲味線 京物卷終



風流曲三味線 二之卷

第一 長老様の聳引出物

床前のくち取。おやま茶屋の念佛講

都なれや東山祇園清水の色茶屋。軒をならべて立つゞき。全盛のむかしを聞くに。祇園町はすべて京の歴々。下屋敷にて客など請るも物がたく。馳走にはならずして。米味噌薪諸道具まで運せ。萬事造作にして客もさのみ喜ばぬ事に。氣をつくすもよしなしと。大かたの振舞は猷立こなたよりつかはし。此所にてして仕舞。客立たれても。何をひとつかたづけうともせず。さりとは氣散じなるせんさく。これ重寶と日毎にこゝのはんじやう。生男の給仕よりは赤前垂の女のかよい。物やはらかにして是は飲めるはと。一入酔もおもしろかりき。其外は銀貸中間の寄合。祇園講大黒講萬の講も。しりたら病まずに此所にてしまひぬ。其上の無分別は。金次第で何よばふとも自由なる色遊び。都のうち都ぞと。名高き大臣忍び。慰に来れる所なれば。勤女もおのづからいやしからず。顔もけうとくは色どらず。よい所見て来た至り末社に揉まれて。傾國のいきかたを聞覺へて。盃の廻りを少しはさばけ。氣のつかぬ所ぞかし。長遊する客にふしやう顔も見せず。追出し茶も立かけず。手のよい仕掛を見ならへば。いつとも興つきず。次第によい大臣つどひあつまり。をのづからやすい客は手おぢして。上八軒こつぱり町。扱は八坂塔の前。清水坂にのぼりつめたる大臣。大方は諸職人の弟子ども。節供。正月。御影供。祭。物日の休に。襪臭き布子を着し。至り大臣の仕出しを見ならひ。西陣織の木綿の小倉羽織の胸紐しめたは究屈そふに見へておかし。懷中には半紙一折見せかけ。蕎麥切色の下帯に。濃かうじの皮足袋。拵ともに十匁ばかりの脇指。生なひの雪踏をならし。おなじ心の友を



さそひ。けふ一日に千歳の命をのぶる心地して。夕食過ぎより宿を立出。ゆきつもどりつ五七度もぞめき。今の三河屋に吾を見て笑ひかけた山州。いかにしてもかわゆらしい所あれば。そこにせふと戻るを引止め。いや／＼われらは庚申堂前の。振そがましやく憎からず。どふても爰にと品定め取々にて。塔の前に立つくし。かりそめながら一人前に。貳匁五分の仕事。心に染まぬ所は一生のつひへと此詮議はてぬを。年かさなる男了簡して。とかくは女の多き所にせいと。三人あるよねに客五人。今二人手あひ足らねど。思ふやうに揃ひし方はなくて。どか／＼と奥へ通り。座に着くと早〇〇の鬮取さうがはしく。酒より先に鮓蒲鉾を喰てしまひ。鹽貝の水に。鬢櫛したし髪なでつけて。俄に男つくるも腹がいたし。二瀬は紺の布子にあかまへだれ。胸あけかけて。左の手に臺蓋。右の手に燗鍋もつて出。まづ飲んで。若い男に上ませふと差せば。人多い中にお心ざし。忝ないといたゞけば。車ゑびの大ぶりに切たるをはさむを。口の中へほりこみ。又其盃もとの所へきつともどし。紙入出すを。二瀬は我にはづむかとかたつを飲て悦べば。連は我を折り。是は五郎助見事に打つかといへば。打つとも／＼かまへて此海老くやるな。あんまりうつて胸が悪さに薬のむと。和中散取まはせば。二瀬は聞きかね。南風が吹く時は着が臭いものと笑ひぬ。さて大かた一盃ならし廻る時。此家の太夫と見へて。しづら島着たる山州。しつと／＼と足音なして。床脇になをり。ふところより下着の襟をおし出し。おとがいを隠し。すこし譯らしき顔して雲上にかまへ。白眼がちに客を見なし。折から小溝に鳴蛙の聲に氣をつけ。かわいらしい鳴ぶり。むかしから小唄にもようはいふたぞ。あの聲きけばありし昔の廓住居が。思ひ出さるゝとほのめかす。近比胸のわるいせんさく。よしや以前は太夫にもせよ。此身になりくなるからは。いふ程おのれが恥なるを。せんしやうと心得て。我こそ上馬おろしの顔する女。恥しらずといふものと。此類の悪よねに逢ふた人の笑へり。扱一げんの客に極まつて詞のはじめが。二瀬をあひ手に何と吉。あなたは姉が小路の仁助さまによう似たでないかといへば。されば目元のしほらしい所が其儘と詞をあはす。かの客我になづんだかと心嬉しく。それ







法師ばかり世に氣散じなるものはなし。したい事してあそび。寺それ／＼の宗旨に學びおきたる經を讀みて。諸旦那に衣を着てあふより外勤むる事もなく。身の隙なるにまかせておのづから悪性になる事。もと名僧の種にあらねば道理ぞかし。昔は夢に日輪を飲むと見て。懷妊したる子なればとて。かけ替もなき一子にても出家になせり。または生れつきさかしく。をさなき時より學文に心をよせ。手など拙からず書て。十歳の翁と世の人の稱美するを。末は名僧にもなるべきものと。見たて法師になしぬれば。後には一宗を取立て、普く衆生をすゝめて。一派の開山とあほがれ。末代迄も名を残こしたまへり。今時の出家のなりたて。智慧才覺にもかまはず。武士の家にては弓馬の藝に疎く。又病者にして勤の成りがたきを。勸めて衣をきせ。町人は算用おろかに秤目覺えず。日記附さへならざるを。とても商人には思ひもよらず。世を樂に墨染になれと。親類了簡の上にて髪をおろさせ。嵯峨北野邊或は岡崎黒谷近き處に合力庵をむすび。始めのほどは法師珍らしく。朝水手向。夏花摘など殊勝に。世間の取やりの物前にも。びいどろの徳利の中へ和久を入れるたまかな細工などして。世の憂よりは住みよき今の境界と思ふたばかりにして。またの世の佛の道をも。心の駒のはね次第に知らず。衆生をすゝめる基もなく。喰ては寝て布袋肥に色艶よく。よもや精進物ばかりであれ油はのらぬはずと。内證聞けばさま／＼のをかしさ。とかく聞かぬが佛なり。類を以て同じ心の世間僧打寄りて。暮もふるいとて讀哥留多。扱は色咄しのうまいせんさく。精進も落鮎のしのび料理。大酒の上の詞とがめ。付髮こしらへて芝居奴の物まね。餘念のない所が極樂々々とぞ暮しぬ。爰に清水近き音羽橋の本に峰右衛門とて美男の浪人ありしが。器量のよきに合しては濡に疎く物堅仕出し。生國は備前岡山のものにて。七年以前に親元峰を。藤海武大夫といふものに討たせ。主人にお暇申受け。六ヶ年このかた西國残らずつけねらへども。敵の住所知れ難く。過し春より都にのぼり。借宅して。召しつれし普代の下人に鹽肴賣らせ。其身は毎日人立の所を心がけ見まはりけるが。いづくにも借屋かる身の習ひ。宗旨請狀なくてはならず。代々禪宗なれども西の京に知邊の淨土寺あるを。幸ひ

に頼み旦那となりて。表向は改宗して隙なる日は大かた此寺に行きて語りぬ。けふもまた彼寺に来れば。幸ひ和尚も隙日とて客殿へ招かれ。四方山の咄し半に。和尚の學文所とて。一間隔て、奥ふかき所より。十六七の娘花の盛をいたづらに振袖留めて。ずいぶん目にたゝぬやうにすれど。生れついでの美形。是はと取のぼつて峯右衛門うつゝをぬかし。咄しもそこ／＼になりしが。扱は和尚の大黒ならめと心を鎮め。是に氣の着くふりをするも。和尚に恥辱をあたふる道理。とても凡人なれば。出家とても此道はやめがたきはすと簡して。わざと見ぬふりして道行長ふなんのおもしろからぬ咄しをたゝみかけて。此しゆびをくろめてやれば。和尚はや此心を察し。これ／＼おぎん。内々噂の御牢人。苦しからぬに出てあやれとあれば。すこし恥かしき體にて艶顔をあかめ。ハアあなたとばかりにて。さしうつむいたる粧ひ。此界の大黒とは見へず。吉祥天女に五割もよく。目もと。口もと。詞つき。風俗。とりなり。淺尾重次に似て。其かわゆらしさどうもいへず。もとより物がたき峰右衛門。何とも挨拶なくてはしらせしを。和尚おつとつて申されけるは。此娘は愚僧が姪にて。生れは攝泉の堺。大小路の薬屋の娘なるが。唐物の買置に大分の損をし。是より身上おちぶれ。父は堺にて果。母この娘をつれて去年の夏此所へつれ來り。末頼みある奉公の口を聞しうちに母も相果て。孤となりしを。不憫さにまづ當寺へ引取りしが。世間に不行義な寺多く。其類にいひたてられ。いたうもない腹をさぐるるゝが迷惑さに。急に縁につけんぞ存じ。出入の婆鼻を頼めば。きりやうもひとみななるゆへか。歴々の町人衆嫁にほしきの。婦妻にしたきのと。此比諸方より申來れど。一圓娘がてんいたさず。御縁てかなござらふ。こなたの噂を承り。いにしへはよしあるお侍のよし。貴所さへ御合點ならば。御牢人にていかやうな不自由なる暮しなりとも。参りてお茶の通ひなりとつかふまつるべし。たとひ富貴の家にもよせ。町人の妻女になる事いやなりと。其身も町人の娘ながら。侍と聞いて貧家のこなたを好むも縁なるべし。かねて御内方もなきよしお物語あれば。幸ひに存ずれば。お氣にいらすとも留守人に引取。御不憫の加へられたまはれかし。生付も鈍からず。



母在る時は孝を盡し。心ざしもあしからず。其の身病者にもなく。針手も利くかして新發意等が白小袖もよく仕立。朝も疾起。夜も睡らず。人事いはず。大食せず女房にしてずんど持徳な女でござる。と和尚のはや仲人口もおかし。今すこし譽めさせたら肌もよいとかいはれん。とてもものに〇〇〇か聞たし。峰右衛門しばらく思案せしが。國元にてつゝに見なれぬ美女に心ときめき。遠きおもんばかりもなく。近き憂事は今宵もしれぬ我一命。もしかへり討にうたれなば。よしや後とふらはるゝためにもならんかしと。獨居の寢覺淋しきまゝに。是は忝じけない心底。世に不自由なる瘦牢人に御身をまかさるべきとの事。かへすく祝着に存する然らば和尚様さつそくなから。契約の盃を仕つりたいと申す。成程々々。愚僧とてものがれぬ身。それ銚子よ盃よと。婚禮のことぶき。釋迦以來寺にてはない圖と納所坊主の飛あがり。式法知た顔に。鳴の羽盛が定まつて祝言には入事。蝶花形はいつも盛物する菓子屋に申付よと。臺所は萬日の回向よりは賑ひ。侍女郎には墓守が嚙。出入の男ども門番の花賣るおやちまで。念佛講中間の。無紋の淺黄上下取出し着して。よし足袋はいて。罷出て取持ち顔もおかし。新發意智恵を出して。靈供の膳の上に。蠟燭立の鶴龜をのせ。松の眞に竹をくゝりつけて島臺の心持。錫の水呑茶碗を銀の土器になぞらへ。焼麩。たゞき午房。椎茸のにしめ物。酢味噌に天木蓼。摺蓼蕒の吸物。海老の腰屈むまてと俗家にはふかはりに。豆腐の姥にならしやるまでと取ざかなにて壽き。千秋樂にはあたまをなてまはして。法師まじりの酒盛。獻々の盃納まりき和尚聲引出物に元祖眞筆の名號を峰右衛門にたまはるは不氣味ながら有がたし。すぐに其夜和尚の乗物に打のせ私宅にかへり。夫婦睦しく。わけて女は夫の氣をとり。何事も背かざれば。今の身にして嬉しき限りなく。小升横槌ならべ枕の契。いにしへの錦のしとねに増り。此たのしみ今まで知らず。あたら月日を。やもめにてうかく暮せしくやし。鼻があらば浮世もあらじ。面白の今の貧家や。

第二 中のよい貧家のならべ枕

女夫の敵討たり火打紙子牢人

五月雨ふりつゞく夜はしつぼりとして殊更ぬれ心萌し。外より尋ね来る人もなく。ひとりある小者も晝のかせぎに草臥新高く。鮫油の光かすかなる。前巾着より小錢を取出し。隣に酒屋のあるをさいはひに小半もとめて。夫婦寢酒のみかはして。つまり着に干鰯の頭あるにまかせて。それよと。鉦ふりあげて二ツに打割。扱もきみよう切たり。かく人も切らるゝ時節あれかしとつぶやくを。女さいはひとさし出。こなた様の御器量では人は扱置。鬼でも平らげたまふべし。その武勇見こみてこそ。多くのいひ入を耳にもかけず。一筋におぬしさまを思ひ入れし子細は。私には母の敵あり。京近き所に其者居るを知ら。女の身のかなしさは。無念の月日を送りぬ。此度かく主さまとかたらひをなしけるも。御心底を見定。討てもらはんと思ひ入れし。我目利たがはず。流石は名あるお侍の果ほどありて。不斷のお身持假にも刀をはなしたまはず。馴れ申すほど心の剛なる所あらはれ。頼もしいやら嬉しいやら。本望とげぬ先から。はや敵は手の下におさへし心地して。手の舞足の踏む所を知らず。是程嬉しき事はなし。近比わりなき事ながら。かう夫婦になるからはお前の爲にも姑御。はやく討て母に手向けてたまはるべし。母殺されたまひたる様子は。皆我ゆゑにて侍るなり。御寺へ参る道心者に。西心坊とて悪僧ありしが。城兵衛と申す町人の手代の引籠。我を見染めてほしきよし。かの悪僧を仲立にて度々申入れれども。母人聞入たまはず。其恨とてみづから去方へ奉公の御目見へせし。留守の間に。城兵衛西心つれだち來り。母をしめ殺して歸りぬ。聞けば只今は京を立退き。大津の町はづれに隠れ居るよし。首尾よく討てたまはれと涙を流し語れば。峰右衛門ぎよつとして返答もせざりしが。暫くあつていへるは。誠に他人だに頼むとあらば侍の引くべき所にはあらねど。勝負は時の運にして。利の劔なが



ら又かへり討にあふまじきものにあらず。然れば我事第一命を捨る事が嫌ひなり。何が扱夫婦の事。如在にはあらわど。危い事は曾てならず。命をのけての事ならば何なりとも頼まれんと。日頃とは違ひ臆したる返答。女房けてんして。さりとは比興至極の男。先そなたはいにしへは武士にあらずや。事によりては町人さへ一命をすするに。なんぞ侍の命を惜み。妻に大事を語らせ。一命の外的事ならば何なりとも聞くべきとの一言。見さげ果てたる心底。大腰ぬけとやいはん。かゝる所存なる男と知らず。今迄添寝せし悔しさ。エ、腹立やと疊をたゞき。身をもやしてなげけども。峰右衛門はしりりとして。腰ぬけとなりとも。畜生となりとも御勝手次第に仰られ。我等は命にかけ替持たねばこればかりは。どなたがお頼みなされても。ならぬ談合と。干鱈の頭をせり。手酌にして一盃のむ所を。女房腹にすゑかね。盃取て庭になげつけ。是ふぐりなし。かゝる畜生同前の男に片時も添ふ事けがらはし。向後妻女と思ひたまふな。我はこれより大津に立越。女なりとも母の敵。せめて喰付てなりとも恨をはらさん。そなたはずぶぶん命を大事にかけて。箱になりとも入れおかれ。牢人のくひ物なくば土なりともかぶり。家名をよごし。百年も長生いたさるべしと。手元の刀引つさげ出づるを。這出の小者山出し甚入。おろかなれども武士の家に育ちぬれば。寢耳に入るとひとしく飛て起。まづ内方にすがり。さりと短慮千萬。旦那のあの如く仰せらるには。子細ありての事なれば。心しづめて。私の申す一通りをお聞きなされるべし。元來旦那にもといはんとするを峰右衛門睨みつけ。あはうの癖として。頼まぬ事に指出口をきく奴。我身の上の子細を女にあかすことおのれに教へられんや。もとの女堺の町人の娘と聞て和尙よりもらひぬれども。出所たしかに見ぬ上は。此方年來の心當の所縁やらも知れず。さるによつて武士の畜生といはるれども。此方の眞をあかさず。深慮をする所へ出て。よしない戯言だまりをれと叱れば。愚なる心に徹し御尤と畏りしが。此分にてはお内義さま。今はや家出をなさるれば。とやせんかくやとうろたへしが。爰は一生の大事の所。日比は愚なりとも。今宵ばかりは智慧授けてたまはれ。南無文珠智慧井といそがしき中に祈念せし。

其奇特にや。一代にない思案。先以て旦那はやうすあつて大事の御身。末々では知れる事。拙者が露命も。似合に心當はいたしおきぬれど。どちらもお主のお役に立つ事。智慧こそなければ肝の太い事。むかしの武藏坊にもおそらくはまけぬ氣。其町人の手代づれや芋ほり坊主の。五人や七人せしめる分は。茶碗酒をひつかけけるより心やすいせんさく。鐵の桶をついたと思召て。拙者めをいづくへなりともお供につれらるべし。すみやかに本望とげて參らすべしといさめば。峰右衛門悦び。さすがは我家來ほどあり。成程汝は女が供を仕り。首尾よく仕負せ歸るべしと。豊後國行平の刀一腰とらさるれば。難有しとおしいたゞき。夜の中に大津へ立越。敵の戸あくる所に押入つて討取るべし。はや御用意とすむれば。女房更に合點せず。尤そちが志は満足なれども。峰右衛門殿のおくれたまふ子細を聞かては心にかゝりて出がたし。とてももの事に子細あかし。我にも女塔させたまひ。互ひに盃事して機嫌よく。笑顔見もし見られもしてから門出したしとあれば。この上は深うつゝむもまた武勇の足らぬに似たり。元來我も敵ねらふ身にて。生國岡山を七年以前に出。敵藤海武太夫をねらひめぐれども。今日に迄引きあはず。いたづらに。年月を送る所に。其方に頼まれぬれば。女に目がくれ大事の親の敵を次にして。妻女の母の敵を先に討ちしと。世の人に指をさゝれん事と。今一ツには萬一彼奴に渡りあひ。手疵など蒙り。手足自由ならざる時は。肝心の本懐を達する節の。妨ともならむと思ひ籠しゆへに。最前の通りなり。身に思ひなくば何が夫婦の中の事始終聞届るに及ばず。今夜に行て一ツの首を引抜いて見せんもの。近比残念なる仕合と語れば。これとは知らず。宵よりの悪口。女の鼻の先智慧と思召し御ゆるし下さるべし。扱其武太夫事は。親達堺にて生薬商ひしたまふ時分。天川武入と申。物變の醫者來り。少つつの薬種をとゝのへかへりしが。後には心やすく臺所迄もはいりしを。めしつかひの下女備前岡山のものにて。武入を見しり。むかしの咄しをいたせしが。たしかに藤海武太夫と申せしなり。其時分堺を立ちのき。江州北村にしろべありて引越よし。此方へもいとま乞に參しと詳しくかたれば。峰右衛門躍上つて悦び。神ならぬ身の悲しさは。



かゝる事とも知らず。今迄そなたにつゝみるて。早速有家の知れる道を。知らず暮せし後悔さ。いざ此上はゆきかけの駄賃心の駒をはやめ。大津の敵を討て。すぐに江州へ立越本望を達せんと。主従三人心よく盃して。借宅の氣さんじ其夜に家を明て。まだ横雲の引かぬさきに都の内を忍びいで。大津をさして行く雲の。栗田口の茶店にて三人心しづかにしたゞめして。年来の本懐をとげん事の嬉しやと勇みあへり。されば其比脾の臟のつよき燃抗組とて。柴屋町の近所へ。毎夜さわざい仲間の男風流。關寺の虎内。坂本の印平。松本の雲助。膳所の鬼丸。閻魔の長右衛門。稻妻の光八などいへるは。百千萬の鳴神も取ておさへて。懐中するほどの力自慢。姥が懐へ賭六の夜道。たとへば娘の丸焼。勢田の橋の蛇の汁。三上山の百足の指身。くふた同士の強賊。世におそろしき物は質屋と骨桶より外はなし。是皆病死の覺悟ならねばなり。たゞ遊興は外になして人を打擲し。是を慰となして。所の迷惑度々なれど。人皆恐れて桶つくものなく。世を我儘に暮しぬ。此中間のならひ善人を嫌ひ。ずるぶん悪て身をかため。親類に見限られ。勘氣を得て行所のない野郎ども。又は人をあやめ。身のたゞすみなりがたく。請人なしに此組へ入ぬれば。日々に悪人多く集まり。城兵衛西心も溢者の組下に屬し。無用の武藝をたしなみ。軟取手を稽古の爲。闇の夜のちまたに出て。往來の人をなやましけるが。後は欲心おこり。男伊達を名題にして。衣類を剽とり。それを代なし。すぐに所の色町へ持行。元手いらすの商賣。ばつ／＼とさわぎで。是は近比大事なものとひ出してより。中間一度にうなづき合ひ。今迄このよい事に氣のつかざるこそおそまきなれ。一向手をよく押込して。はかゆきにやるべしと以上三十八人組申合して。近在所々ををし入つて夜毎に寢耳を驚かし。萬人の煩ひ大かたならず。所々浦々まで用心厳しく。家々に番をすれば。今ははや夜盗のかせぎもならずの森の木蔭に。澁紙を敷て。曲物に一から十五までの木札を入れ。右の手に錐を持ち。筒取筒取鼻を高ふして天狗頼母子と名づけ。馬女古着買扱は旅なれぬ少し氣もぬけ参りの前髪だちなど招き相取をこしらへ。後は喧嘩仕舞にして。ちよろりと其場を謙し。跡は塵ものこらぬ胡麻の灰といふ仕出し商

賣。旅人は路銀とられて悲しみの涙。あめのみかどの御廟野を通る時。峰右衛門が下人甚八此頼母子に心うつり。腰錢ぬいて五六の札にはりかゝるを。峰右衛門ふりかへり見て大に怒り。常の旅でもある事か。大事をかゝへし道草。露ほども外へ目をやらず。心がけて供はいたさず。あほうの癖にばくち業。言語同斷曲事なりと持たる杖をふりあくれば。筒取の男。古編笠をあげて。其方の下人をしからるゝは道理ながら。人も聞くに博奕業とは。我等が商賣に疵をつける男。弓矢八幡堪忍ならぬとわちかゝれば。相ずりどもばら／＼と立ちのくと見えしが。峰右衛門を取巻き。ばくちわざといふからは。此場に居合はすものは皆博奕打になる道理。爰は堪忍ならぬ所と反をうてば。峰右衛門騒がず。さりとはかゝりがましきものども。一錢にても取やするからは。博奕業ではないかといふ。何かゝれがましいといは舌長なる侍。やれ踏めたゞけと。何がな事にしてつかみたる盗人ども。白茅の穂の如くぬいてかゝれば。峰右衛門夫婦心得。同じくぬいてわたしあひ。矢庭に四五人きりたほせば。筒取の男編笠ぬぎすて。飛てかゝるを峰右衛門女房一寸見るより。あれこそ母様を殺せし城兵衛。是ぞ天の興へと悦び。見忘れたるか我こそ西の京に裏住居せし吟といふ女。母人をころせしむくひ早くもめぐり来て。今我々が手にかゝる事の嬉しやと。勇みにいさみて打てかゝれば。相どりの中より頼冠りせし男手拭取て。我西心がかはれる姿。此比女に事を缺き。寢覺淋しき折から思ひ入の女招かざるに來る事。縁は朽せず京で見しよりざりと女房仕上げたぞと。いそがしい中にもたはれいふて打てかゝるを。甚八是にありと下人にかひ／＼しく走りかゝつて兩脇をなきたほし。おぎんに止めをさゝすれば此勢ひに同類どもちり／＼に逃げ行を。峰右衛門おつかけ城兵衛を。後より大袈裟に切りさげ。先一方の敵は討たり。かゝるよい勢ひに片時も早く近江に立越え。父の敵武太夫をもこの如く打ちとり。名を後代に残さんと夫婦悦び。其夜は八町のはたごやに一宿して疲勞をはらし。明くれば近江に下りぬ。







りぬ。爰に持丸長入の二男半内は。無分別に家出をし。武士奉公を望。一度武州に下りぬれども。思ふやうなる口もなくて。故郷忘じがたく又都にかへりしが。京の家に入聲ありて。萬事はが支配するよし。今は跡へも先へもゆかれぬ首尾。中にぶらりと天竺軍人になつて。草津の宿に家をしつらひ。奉公相濟まで何共世の暮しなりがたく。筆の軸にて汗はじきの竹細工。扱は耳搔楊枝など。齒にあてるほどのたよりにはならず。今日を送りかねて。はや四五日も煙絶々の折ふし。いづくも鬼はなくて。近所の煙草やの亭主ども見かね。伽羅の油。花の露など。京より下る小間物屋に請合て取りよせ。纔の店を出させ其身は鬻結捻りて。効なき命を繋ぎしに。ある日十五六の若衆下人あまた召連れて通られしが。我門に立寄られ。さりとて花車な商物と。しばらく見入させたまふ風情。小性衆多きお江戸にても。かゝる。美少人つひに見た事もない御生付。風俗の端手なる所。其まゝ小野川宇源次が藝ぶりに似ていさぎよく。御物ごし魂にこたへて一かたならぬ戀の海。深く思ひこみ。うかくといなものになりし時。彼少人の僕。きやらの油を調へに来るを。渡りに舟便を得て。一命を抛つて頼みかくれば。此僕戀知にて。それていの思ひならば肝煎べしといふ嬉しく。お名を問へば野々川小源次殿と申て。御居所は是より北の里離れに。門構なる大屋敷に野々川忠連齋と申て。武州より渡らせ給ふ御隠居あり。其御爲には御孫子にて。此比御見舞ひに上らせたまひての御逗留と。具に語るほどに。命も消ゆるばかりに心底を書綴り送りければ。小源次見て誠に賤しきものとあれば。かへつてしほらしき心根感じ入。返事してそれよりは深き契約となりぬ。小源次故郷へは病氣ゆへ暫く爰にて養生するのよしひやり。半内に別れをば歎くのみなり。かくて月も立ちて小源次例ならず煩ひ。四五日過ぎて疱瘡面に顯はれ。わけて重りしゆへ家來まで氣つかひせしに。乳母子の竹中藤四郎不審をなし。此お子は三歳の秋成程軽く疱瘡遊ばされしに。今又かゝる御惱。人によりて二度疱瘡もするものかと手に足を握り。多賀への祈願。竹生島への代參。上下安き心なく。晝夜息をつめて看病いたしぬ。されども半内は祖父忠連の前を憚りて。見舞ふ事心に任せず。はや廿日に餘れば

疱乾て湯かゝりしに。面を脱ぎたるごとく菊石大かたならず。めのと藤四郎を始めつきくの者まで。元の小源次とおおぼえず。世に又あるまじき器。量忽ち變じて二目とも見られず。自身も心元なきにや。鏡に向へば知らぬ不若衆かと思はれ。この顔して二たび半内殿にあふ事のはづかしく都四條川原へ人をつかはし。我に似たるものあらば尋て。連立ち來るべしといひやられるれば。何が自由なる。水邊。金次第にて取ちかへるほどの美少。山下山三郎とていまだ舞臺はふまさりし前髪立を伴ひ來るを。小源次近くへよびつけて。其方は半内殿に行て何なりとも似合敷用を聞。よく奉公をいたすべしとつかはさるゝに。半内露はども之に心をかけず。たゞ此二ヶ月あまり對面なき。戀しさのみ胸にせまり。幾度山三を見舞はすれ共つき戻し。今一度あふて思ひを晴れたくとばかりいひしに。扱は道立てたる男。我今の容を見たまはゞ年頃の執心もさむべし。されどもそれ程に思ひしづまれなば逢ふべし。今宵四ツの鐘なる時分。裏門まで御越。首尾を見てひそかに對面あるべき旨。嬉しく其日の暮るを待て。四ツの鐘撞く頃うら門に佇めば。我より先に惣髪を引。裏門に何やら張付る體合點ゆかず。月影にすかし見れば。少人の形を畫。面體に處々紅をさして。口の中にてぼち／＼と文をとなゆる。是曲ものと後より取つたといふて引倒し其まゝ上にのつかゝれば。かもの聲をふるはし。私は何も存ぜず。人に頼まれかくの仕合せと申す。然ば様子をまつすぐに白狀いたせ。さなくば只今手にかけると。鐔元をくつろげせめければ。命だにゆるされなば。始終を具さに申べし。まづ爰をゆるめてたべといへば。少しくつろげ。さあ子細をありやうに申せと怒る勢ひに恐れふるひ聲にて申は。某は大海武入と申薬師なるが。このお屋敷の御一家に眞野の長五左衛門殿と申人のひとり姫おらんど申す御方。小源次殿に執心をかけられ。さま／＼文してくどかるれど男色の嗜。深く曾て承引したまはねば。思ひ積りて亂氣せられしを。拙者は療治いたし。二たび本性に仕立てなば。過分の御褒美下さるべきよし。幸ひ我等が家傳に。十年廿年過行きても疱瘡の裏を打つ。咒あり。然ばこの呪にて小源次殿を不器量にいたしなば。おのづから娘子も見さめありて。此戀思ひ



切りたまひ。本性にならるべしと了簡いたし。先月初めころより此まじなひを執行ひし所に。案の如く。小源次殿惱  
 みたまひ。頃日は式の如く菊石面と承り。念願成就とぞんじ。今宵札納の咒に参り。不慮に貴殿に見付けられ  
 此仕合。拙者命を御助け下され。其上此事他言なきに於いては。眞野殿の御褒美を半分わけてまゐらすべしといへ  
 ば。半内聞てさりとほ憎き仕業。刻みてもあきたらず。しかし小源次を右のごとく美質にいたしなば。命をゆるす上  
 に眞野殿より莫大のほうびを取らせん。さなくば唯今胸腹をさぐるがと。刀に手をかけをどせば。それはどうもなら  
 ぬ事。只御ゆるしと男泣する所へ。小源次門をひそかに開き。手燭もつて出られし姿はむかしの姿にて。めんてい別  
 別替り果て。これはと見より半内膽をつぶし。かくも形のはるものかと涙を流し。皆此武入めがなす業と始を語れ  
 ば。小源次も血の涙を流し。男色姿の敵とはおのれが事よとかくは生けて置かれぬ奴。せめてはなぶりごろしに  
 して此恨をはらさんと。門前なる松の木にくゝりつけ。すでに殺さんとせし所へ。音羽峰右衛門。同妻女。下  
 人甚入もろとも。いづくにてか此事を聞出し。もし武入討たれなば。年月の大願。あだになりゆく事のむねん  
 なりと。身拵するまでもなく。刀おつとり走り来り。半内が前に畏まり。禮義正敷詞を述べ。某が爲には親の敵な  
 れば。武入を我に討たせたまはるべしと。手を下げて段々と申せば。半内聞届。我々とも恨み深く。刻みてもあき  
 たらぬ奴ながら。御自分の儀は年來の親御の仇とあれば餘義もなき仕合。いかにも奴を参らすべし。速に名乗かけ  
 て討取りたまへと。いましめを解て。扱々おのれは大果報者なり。我々になぶり殺されては末代迄の恥辱なるに。細  
 目をゆるされ。立合の勝負にて死する事。侍冥加に盡きぬといふもの。未練の働きたさず。尋常に勝負をいたす  
 べしと。さしたる刀をあたふれば。武入三度いたゞき涙を流し。近比難有き御心底。世々生々此高恩は忘まじ。某  
 もむかしは武士のまねをもいたし。人に後指をさゝれし事もなかりしが。牢人の身となりおのづから心賤しく渡世く  
 るしきまゝに。過分の褒美に目くれ。よしなき悪事を工。世間に稀なる美少年の面を損じ。人になげきをかけたる段

今以後悔せり。されば只今の御芳志に小源次殿の御面體をむかしのごとくなほし申妙術を教へ申さん。郭公の羽  
 を以て。孫嫡子裏打袍を。すみやかに洗ひ流さん湯尾峠よと。此神歌を三度となへ。御顔なてたまは立所に瘡の跡  
 消失せ。もとの艶顔となりたまはん。もしさもあらば亡き後にて。一遍の御回向を頼み存る。これ迄なりと身づくろ  
 ひし。汝が親元峰を討し。藤海武太夫なるぞと。撃てかゝるを峰右衛門ひらりとほし。天理をもつて横になく太刀  
 早く車に斬放ち。しづかに鞘にをさめ。半内小源次に一禮のべ。敵の首を下人に持たせ本國備前に歸りぬ。かくて小  
 源次武入が教へにまかせ。時鳥の羽をもつて菊石をなづるに。春日の雪の如く消えてもとの美形となりたまへば。半  
 内喜悅限りなく。我戀初のむかしの心を思ひやりて。眞野の息女の思はく其分にては捨置きがたく。半内取持ち小源  
 次おらんを夫婦にし。其身は後見分に頼れ。今は坂下半太左衛門と名を改め。志賀の花園といふ所へ屋敷を構へ。榮  
 花の暮し。人の鏡を申あへり。

第四 横槌見て楽しむ後家

釋迦の私金沙汰なしの身請

儲けにくい世に小判三千七百兩。銀七十六貫目餘。なるほど心よく蒔捨ける。随分よき種ながら今にはへぬ事を思  
 へば。惜い事と合點してからおそし。或親にかゝりし時は。浮世の持をしらす。數年貯おかれし金銀我物を盗  
 つかひ。持丸長入の物領藤内大臣といはれしも。むかしくになりぬ。されば男氣といふて恥を思ふは世にある時の  
 事なり。我も以前は男山さかゆく春に花をやりし時。つかひすごして見にくうなりし人を見ては。あの體になつて何  
 か浮世に心残り。ようもろつて暮す事よ。一日も長う居るだけ其身の恥辱。近比ふぐりのない奴。死なば今じゃが  
 と。脇から齒痒かりしが。今此の身になりて思ひ知られ。さりとほ惜きは命なり。次第に貧になるほど心劣りて。中











やは其時から推量して。萬の鎰を汝まかせにさせし事。欲とはいひながらおれがやうなものを。ようも〇〇〇〇くれる事じやと思ひ。其替りに金銀自由にさせしなり。せひ隙がほしくば。奉公に來りし年より今日までの惣勘定をいたせ。壹匁でも不足あらば請人へ預け。急度わきためさするぞ。さなくば首を押へてなりとも己が男にせねばおかぬと。眼玉をひつくりかへし。怒り罵る有様いかな瘡もおちぬべし。藤内是にこまり。何とも返事致しかねしを。傍輩の手代ども。常々あねごにお氣に入顔に。新參の體で高ぶりし憎しみに。とかくは今日勘定せられと。旦那もあしざまに申込み。此時京の手代六人申合て。拾兩廿兩乃至二貫匁三貫匁はづして。皆藤内が引込にいひたて。惣勘定不足高廿四貫匁餘にのぼれば主人腹にすへかね。姉御をたらし大分の金銀を引込むこと。不届の至りと。請人へ預けられ。この不足銀たてぬに於ては。請人ともに命も取るべきほどの腹立。町衆に不祥な袴させまして。色々詫でもらへど。いかなく耳にも聞入らず。とかく金銀づくばかりにあらず。主人をなぶる横道ものと。姉御の祟り第一にて。請人四郎三難義のあまりに女房を打擲し。あのやうなならずものを。むかし私が奉公せし御主様じや。今おちめなればこそ。わしらがやうなものを人がましう思召てお頼みなさるゝ。おいとしい事じやのお笑止なことじやのと。人請はいやじやといふおれをたらし。今此迷惑かける事。夫に見かへてあの横道ものがまだ不慙な。一日手がとまれば。それだけ足らぬ身體じやに。此中に詫言にいたりきたりにかゝつて。半日も細工はせずして。野等を一人たゞ養ひにする上。あたり隣合借屋まで。此四郎三が合點づくで取込させ。半分しこためたやうに評判せられ。お年寄までにいたうもない腹をさぐられ。恥といはうか損といはうか。此お町に十五年居れど。つひ聲高に物いふた事もなふ。ざりとは律氣千萬な男と。二日寄合に不參しても。四郎三が事ならよいはと。十二月に一年中の判を一度に捺して下さるゝやうに。人さまに思入られた男がさて。おのれが古主といふによつて。ふと請に立て今の難義。いかに賤しい我なればとて。人に頼まれ一命終るを歎くにあらず。只あの藤内にかゝつて同じ相取のやうに。悪名つけらるゝ。所が死

だ後まではげぬと。女房をたゝいて叱る内にも。涙を流し腹を立つるも道理ぞかし。藤内これを聞かたに。魂にこたへて悲しく。またことに亭主がいふ如く。我ゆへ人に心をさぐられ。剩へかゝる貧家に難義をかけ。うかく暮す所にあらずと。細工小刀取りまはし。すでに自害と思詰しが。せめて最期に今一度太夫が顔を見て。文認めて。主へは親類ども方へ詫言の内談に遣はすと申しなして。相借屋の息子をたのみ。高橋方へつかはし。其身は死覺悟更に二念はなかりき。人毎に無理死は狂氣のわざのやうに申なせど。いづれ其身にあらば死もしさうなものなり。兎角色の道もよいかげんがよしと。物に懲りたる人の金言さもあるべし。

第五 心中に浮名のながれ川

きのふは大臣けふは請人やつかい男

常に聞馴れし鳥啼の分て氣にかゝるは。藤内方に何事か出来しぞ。さりとて心もとなやと思ふ折ふし。此文見ると其儘あるにもあられず。高橋は母には近所へと申して走り來り。内に入て何かなしに藤内に抱きつきて歎きしが。あるじを憚り。流石それとは云ひがたくて。藤内殿の姪と偽り四郎三にも一禮申せば。ていしゆ眉間に皺をよせ。そなた姪子なら我いふ一通りを聞いて下され。さいせんからあの和郎の様子を見れば双物とりまはさるゝ體。自害でもする氣と見えたり。さりとてあの人畜生にも劣りし心底。むかしは京に名を知られし人と。女共がいへどさうではあるまじ。我々夫婦が欲ても立事か。女房どもがいにしへの御主といふよしみにひかれ。頼母子づくで立つた請で。今難義するとも義理を知られば。あの仁の心一つで此金の濟方知れてあり。今でも旦那殿姉御のいはるゝ通にしたがひたまへば。金の段ではござらぬ。其身まで浮かみ上らるゝ事を。むかし浮氣でいひかはせし傾城に義理を立てゝ。義理で立た他人に。こんな難義をかけて。揚句の果に爰て死なふとは。まだ夫婦のものに難義がかけ足らぬか。其方も知て



か知らぬが。其傾城が。たとひ天人の影向さつしやつたやうな顔でも。根が賣ものではござらぬか。流れをたつる女は。命も其男にやるやうにいふは焼とやら申て。あいつらが商賣で皆偽りてござる。さらばそれほど深ふいひかはされた傾城が。今藤内殿や身どもらが難義の助に成りますか。其やうな遊女への義理が大事で。我々夫婦が一命の終るは苦しからぬにや。犬多のころもあの人よりまそつと物は辨てゐるぞ。ありさまの伯父御ながら。さりとて見さげ果てたる男なり。何と我等が申事がひがごとてござるか。段々道理をせめて申せば。藤内も高橋も至極の理に返すべき詞なくて。しばらく涙を流し居たりしが。高橋申は。誠に義理ゆへの御難義。何と申べきやうもなく。身にかゝりし我々が身にしての迷惑。中々詞に述べがたし。擬主人へ不足金半分ばかりも調ひ申さば。あの人のは免も角も。おのゝ御夫婦の御難はゆるり申べきやと尋ねれば。中々半分銀がござれば。藤内殿にみぢんも疵をつけず。われら一人して扱ひおほせて見せませうけれど。何を申しても藤内殿に。ちやんが一文ござらぬと云へば。それ程はわがどふぞ才覺いたしませふとあれば。それさへ調へばざつとすんだ事と悦ぶ。藤内はふしんはれず。何として女の身の半金才覺なるべし。我思案ありといへば。高橋涙をながし。こなたの思案といふは死なうといふ事であるべし。御一分はそれにもすむべけれど。さありては御夫婦の御難義いと／＼堪なれば。とかく短氣な心をしづめたまひ。御事も我次第に遊ばせと。夫婦にいとまごひて我宿に歸り。母に向ふて。はづかしき事ながら。我幼少より色里にすみなれ榮耀に育ちぬれば。此佗すまゐる物事不自由に。氣のつきる暮し。おなじくは今五六年むかしのやう勤めして。何方へもすぐに請られたき思入なり。然ればいづくなりとも今一度身を賣り。勤女となりたしと願へば。いか様太夫とも人に用ゐられし身の。今朝夕の烟さへ絶え／＼なる貧家の住居。さぞ苦勞なるべし。其上いひかはせし人も金銀のため難にあひたまふよしなれば。これとても未頼みなし。唯そなたが望次第にせられよと。最前頼みし物にかりの徳助を招き。次第を語れば。幸ひの入口あり。伊勢古市中の地藏といふ所の遊山宿に。世間は娘分といはし。

内證は地の客をつとめさする女。是を所の詞にて。あんにやといへり。此つとめ奉公に五年切ば金子百兩がらりに渡すといへば。太夫のぞみは十年切て二百兩はしきよし申す。成程そなたは西で名取の太夫職。器量風俗座配まで打揃ひぬれば。十年切ては二百兩は體にとれると申せば。然らば急にやつて下されと頼む。さもあらば今四五日待ちたまへ。中の地藏に申つかはし。抱への親方を呼びのぼし。早速埒明參らすべしと。委狀に認め。夜通しに申やれば。親方二見やの文右衛門罷上り。太夫を見て成程あの女ならば二百兩出すべし。と十年切の手形を書かせ。名を改めておしゆんとかへ。母にも判をつかせ二百兩渡し。明後日つれて下ると。手形取てかへりぬ。おしゆん嬉しく件の二百兩の内廿兩肝煎徳助に渡し。残る百八十兩の小判を取持四郎三方へ行かむとするを。母親咎めて其金何方へ持ち行かると問はれて。是は私西に居りし時の借金の方へ。濟ましに參るといへば。いや／＼さうではあるまじ。藤内殿金銀の出入事にて。嚴敷請人方へ預けられておはするよし。それへの合力と見へたり。ひとりある母に此不自由なる住居をさせ。それを安樂に過さんとは思はずして。浮氣男に合力とは。近頃きこえぬ仕方。明日をも知らぬ老の身と。やきたいなしの男と見かへらるゝからは。浮世に居てもおもしろからず。つれあひに離れてより。そなた一人を杖にも柱にも頼み。今こそかゝる佗住居するとも。末は娘が影て世を樂に暮し。寺道場へもたやすく參らんと思ひしに。今其金の緒を取りはづして。いつの世に樂をやせん。そなたが又十年といふ年の明くまでの壽命を知らず。とかくはこれ迄と手元に在りし菜刀もつて。自害と見えしに。驚きあわてゝ縊り。先暫くと止めまゐらせ。さるにても此金四郎三殿に渡さねば。二世と契りし夫の命危なし。又渡しては目前母を殺すといふもの。是は何たる因果ぞやと。五體を地になげしばらく嘆きしが。よく／＼思ひめぐらせば。我浮世にさへあらねば母の恨もなし。とは思へども我今死しては藤内殿難義の上の物思ひ。所詮この様子を語りも共死に死て長き來世で添ふより外の思案はあらじと思ひきはめ金子を残らず母に渡し。其身は伊勢へ下る暇乞のためにとて立出。藤内方へ行ば。四郎三は待ちかね。何と金の才覺は成りまし



たかと。問ふにつらさのまさり草。露ともなりてこゝで消えたいほどなりしが。胸をおさめて。成程大方調ひ寄まして。其談合に只今参りしと誠らしう挨拶し。扱藤内にあふとひとしく涙にむせび。うき身を賣りし噂。母の述懐残らず語り。此上はおぬしとても世に長らへたまひてから。何のせんなき御身なれば。我諸共に死を同じうしたまひ。未來でゆるりと添はふと思ひたまはずやと。口説き敷けば。それこそ願ふ所なり。然らばおふくろにも餘所ながら暇乞して來りたまへといへば。宿を出るよりもはや歸らぬ覺悟なれば。片時も早く死を急ぎたしと思ひ切つて申せば。藤内聞て。近比嬉しき心底ながら。今といへるはあまりに短し。今一兩日またたまへといへば。おしゆんむつとし。扱は命の惜さに日をのべて。其内にはづさんとの心底か。それは年比死ば一所と契り申せしとは違ひ。比興なる御心入。今この時に至り何に心が残りて。暫く待てとはたまふと悲み敷けば。さら／＼左様な未練なる所存にていふにあらず。我このまゝにて相果ては。つゞまる所が四郎三夫婦が難義なれば。此一埒をあけての上。心よく死べき爲なりと。やうやうすかして其日はおしゆんを宿に歸し。すぐに主人方へ参り。段々私あやまり申せば。此上はおかねさまの御意次第にいたすべしと。奥へ申入れければ。あねごはことない御機嫌にて。夫にさへなるうへは何の申分なしと側近く招かれ。聞ばなじみの女あるよし。向後其女の事思ひ切て。我と來々世々まで永くそふべきとの。誓紙をかけたの好み。かう罷歸る上はそれをいたすに及ばずといへど。中々それなくては打とげられず。さもなれば又勘定じやかと。怒り出されるれば。せひに及ばず好みの通り。誓紙を書いて参らせ。此上からは奉公人と申すにあらず。然れば此誓紙と奉公人請狀とを取替られ。請狀を四郎三へ御戻し下さるべしといへば。いかにもそれは尤とて。四郎三夫婦を呼寄せられ。請狀を渡さるれば。とてもこの事に此中の難義料をもつかはされと申す。何が扱こちの人のいはるゝ事もどきませうやと。早手に入れてしこなし。四郎三夫婦には金子十兩下さるれば。もとより律義な男なれば。是もらひまして。又後に難義いたすやうな小判ではござりませぬかと。こは／＼頂き宿へ歸りぬ。藤内もはや世に思ひのこす事

もなく。いよく心底を極め。卯月四日の夜に入て。今宵かぎり男作り。袖島の着物に黒き羽織を着し。鯨鞘の大脇指素足に藁草履はきて。ひそかに内をしのび出。荒神川原で出あふべしと。おしゆんとも手はずを取。板橋を越て。富士小屋の火の光にすかして向を見れば。黒きもの着たる女。すつくりと立つたるは。おしゆんかと詞かくれば。あゝ私とござんす。さあ爰とあふのけば。さりとは心底のすわりし所武士の心根よりは強しといへば。ずるぶ強い生れつき。こなさまの○○○○○○○○。○○○○として下されといふ。それは今の間の事。先今生の見納めに互ひの顔を見るべしと。引越して顔を見れば。おしゆんにはあらで。五十にちかき女の土白粉をへげるほどぬりくり。何とやらわろき香のするまぎれもの。藤内肝をつぶし。何者じやと突きのくれれば。ハテ手のわるい。仕掛ておいておかふとは。やりやしませぬぞざりとは。錢廿おいて行んせな。はなちはやらじとすがりつくと。鼻にかゝる聲して。哥うたひながら引きとむるは。扱は惣嫁と合點して。悲しき中にもをかしく。そんな榮耀な男じやないと。苦々しくいひはなす所へ。おしゆんは黒小袖に裾もやうの着物。かいどりして走り來り。藤内様といふ聲嬉しく。扱行久しやと互ひに顔を見合。涙の外はなくて前後ふかくに取亂せしが。藤内涙をおさへ。死ぬると思はるゝゆへ。物悲しく涙もつきねば。只今息引取と其儘佛國へ二人ながら生れ行き。永く語ひをなす事。更に悲しき事にあらず。此世にゐるもしばらくの間なれば。せめては夜の中に此川べりを手に手を取て歩行納めにゆくべしと。手を取りかはし川原をめぐり。あれ／＼むかふに高くそびへし山こそ。都の富士とおしゆんに見すれば。廿歳にも足らで今消ゆべしと袖に泪の露ふかく。糺の森も程近しと眺めやりて。おどろ／＼と鳴神も思ふ中をばさくる世の中に。ながらへる程つれなき事こそ。まされ。只一刻も最期急ぎたしと。石なき所におしゆん座すれば。げにそれもさうなりと羽織を敷て。懷中せし盃を取出し。互ひに心よく水盃を呑かはし。今ぞ最後といふ時。おしゆんいへるは誠や難波の三勝は。心中の時徒と棲とをくゝり合して死たるよし。なき後迄も思ひ入ふかく。小歌で聞きても淺からぬ心中。我々も死て屍はさらすとも



浅からぬ名を世に留めたし。近頃愚癡なる事ながら。こればかりは我物ずきにしてたべと。ふくさを出し褌と褌とをくくり合せ。今ぞ浮世に思ひおく事露程もなし。いざさらばとて脇指をぬき。すでに死なんとせし所を。最前より側に臥したる菰かぶり。むく／＼と起。こりや聊爾はさせぬぞと。先刃物をもぎとれば。これは互ひに合點づくで死ぬるものどもなれば。見のがしにして死なしてくれと歎くを。いかなく思ひともよらぬ事。我まことは非人にあらす。おかね女郎より目代として。宵よりそち達に見えがくれにつきて来れりと。いふ詞の下より手に持し拍子木うてば。川端に狐火のごとくあなたこなたに手松明ともしつれて。追々にかけてけるを見れば。いかずの姉御手代どもを引連れ来りたまひ。二人が心底ふびんなれば。おしゆん親には金銀をとらし。身を自由にして藤内に添はすべし。又藤内は其替りに折々我心に随がへとおほせ。何がさて此女に少しの内なりとも添はせたまはゞ。いかやうとも御意には漏れまじといへば。然らば上十五日は我方へ参るべし。下十五日はおしゆん方へ参れと。古市の親方へは一倍にして金子をかへしつかはされ。都の内は物やかましと。市原野の奥に屋敷をしつらひ。藤内夫婦その身も共に樂隠居して。世のせはしき事を知らぬ身と成。大晦日にも琴三味線をしらべて。誠に長者の暮し。是も前生にてよい種を蒔置て。今榮える花の時を得けるぞ目出度。

風流曲三味線 二之巻終

風流曲三味線 三之巻

第一 仕過しの天狗仲間

新町と道頓堀をかけ持のかくや道心

難波の春は都に増りて。陽氣盛に立のぼつて鼻に汗かく若者共。相場物に利を得て其徳用を少しも身にはつけず。皆色事に打入て。明日の事を思へば鬼が笑ふとやら申て。今日切に使ひ果たし。去りとは氣散じなる所なるに。爰にも癆咳病のあるは不思議と申せば。關東の奥に米壹石十三匁する所にも。乞食の絶えぬと同じと笑ひぬ。かゝる大氣成る所に生れ合ても。金銀なくては可笑からぬ浮世を恨み。捨ててもすてられぬは色の道。朝は道頓堀に行く野郎の樂屋入を拜み。暮は新町に浮かれ女郎の門立難有。此二道をかけて毎日怠らず。かくや道心の二樂といふ法師あり。抑々此發心は過去未來を思ふにあらず。當代の色遊び心の儘ならぬ。身の程を。味氣なく思ひ斯はなりぬ。今日も道頓堀を眺め盡してすぐに新町へと心ざす所に。俄に空かきくもり風烈しく雨頻りに降りて。行先見へず。とある杉の木陰に立寄て晴間を待時。虚空より御駕籠立つゞき。黒雲と共に舞ひ下り杉の梢に止りしが。風颯と吹て駕籠の簾打あがり。内より出る人々を見れば。姿は當流の大臣めきて鼻高く眼大きにして。上繪なしの紋所付たる黒羽織の兩脇に翼あつて。足は鳥の如くなる人々駕籠より出て。一列に並居し中に。少し勿體めきたる人は。天和年中の女護の島へ渡りしと聞へし。一代男世之助と見えたり。右は此津に名を残せし椀久。昔の姿其儘に。むしろやくしや天窓に立島の布子。丸くけの單帶。革巾着のあきながら。懷中に伊勢天目。吸口なしの煙管。とろめんの鞆足袋細緒の奈良草履變らぬものは扇。車の紋所。今とても智慧はなささうな顔して座せり。左は昔御町の由緒残りて花橋の紋つけし女郎。



驚 長く意のごとくなれど。風俗は慥に太夫職と見へたり。二樂見るより。こは恐ろしや。我生ながら天狗道へ落ぬ  
 るかと。肝心も身にそはて。目もはなたず守り居たる程に。又さままの異人共來り集り。すてに酒事はじまり。太鼓  
 めきたる天狗の水かきのある手をひろけて。嘴尖らしてもんさくいふも可笑かりき。盃納まつて後世之助いへる  
 は。扱も我七歳の夕より耳順の年の且迄。色道に身をゆだね。凡日の本の色所見ぬ方もなし。至らぬ揚屋もなしと好色  
 一道我如顔に高慢せしより。かゝる魔道に落りぬ。されば此津は人の心大きにして内證よりは面をかざり。子に鼓  
 を打習はせ。娘に惣鹿子をさせ。鞠楊弓に目をくらし。萬大やうに見せかけばかりに同じ丁銀を天秤響き渡るほど。  
 日には百度もかけ。廣庭には延米をかりて積かさね。まだ堪忍のなる表向の屋根を葺替。寺の四十八夜を申て名に  
 觸。神前には人の目に立つ石燈籠を寄進して。所家名を高ふなして慥に思はせ。手形借りの金銀を取込。我物顔に色  
 事に時捨。はきゝの太夫共に人中で灸の蓋を仕替させ。しこなしの自慢をする男。又は些少の身代にて名題分限の人  
 と張合。人より上をせんと我慢増上慢山よりも高く。海よりも深い事もしらず。纒の磯せゝりを沖漕いだ騒ぎのやう  
 にいひなし。やうく新地色茶屋より外を見ぬ奴が。揚屋の坐敷も野良宿も。呑んだやうに申て粹だてをする族。皆  
 我道に誘引せずといふ事なし。又女郎は仕合せの吹付る風に乗つて來る體な客多き時は。自から張強く。我こそ恐  
 らく流行太夫と。中低なる顔を鼻高ふ見せて。俄に肩て風を切。生れもつかぬ勿體つけて。淋しき時を忘れ。内證の  
 御無心に手をあはせ詫言したる男を。流行るにしたがひ見ぬ貌する酷い心から。萬更分の高い借銀して遣ふとはしれ  
 てある客を。根がとげんとてそこく〜に待遇ひ。お情に預りたがつて。床で女郎の肩から足迄ひねつてやつて。人目  
 がなくば煙草の火もとつて來て進ぜる程に。廻る客を取てとばし。此里に我身に續く色はあらじと。器量自慢する女  
 などは。我等強ちに便りを求めて心を奪ふにおよばす。獨と我中間へ落入るなり。然れ共近年人よう賢ふなりて。分  
 限よりは遊びも内端にして。色事に我を出すは身代潰れの基と合點して。人に増らんといふ心もなし。女郎も又今時

はばつとしたる客も出ねば際日多くて。内儀の當言いふもねぶり目して聞かぬ貌付。呑みたき煎じ茶も遠慮して。聲  
 低に肩身すぼつて。田舎の土氣の離れぬ。然も片鬢はげたる男も客といふ名の嬉しく。初對面から〇〇〇〇。〇〇に  
 なり共東向に成共。又は〇〇〇〇。望み次第に。女郎の方からきげんとるやうになりて。微塵慢する心なければ。此  
 時に至つて便を求めて伺ふといへ共。更に眷屬となすべき高慢の人なし。然れば今よりして何なるものをか我道に引  
 くれんといへば。腕久開て仰のごとく最早色遊も末になつて。本大臣のいからおこつて我等が網にかゝるたはけも  
 稀なり。殊に此比は人の心ちいさうなつて。少しの仕過しに當惑して。前後の思案もなく。或は水に入。首を縊。又  
 は自害に及ぶものあり。さりとて惜き命。妻子親類に看病せられ。疊の上にて心よく病死する身を。無分別なる無理  
 死と思へど。是も過去からの約束にて。生れ出るから究つてきうせん筋といふものあるよし。迪も病死せぬもの共に。  
 責ては前生より縁ある女とひとつに死なし。繪草紙に名を残させ。狂言に取組ませ太夫元に錢儲させて喜ばし。見物  
 には回向いたさせ。其身は一人より二人ゆく死の旅。話伽ありて三途の川の深い心中といはるゝが。同じ死なうな  
 ら。一人よりは死徳なるべし。殊に此分は皆愛着煩惱より事おこれば。分て我方に引入るゝに便りあり。なんと此心中  
 の腰おしはと申出せば。大臣天狗をはじめ。我慢邪慢の遺手天狗。花車天狗。太鼓天狗に至る迄。是替つて可笑から  
 んと。一座入興して此道を鍛練せし人やあると申せば。夫こそ心中の先生赤根半七三勝。其外此津の無分別に無理死  
 せし者共。招き集めて此旨をいひ含め。さあ又酒よといふ聲の下より。いづれも此世にありし時遣ひ果して身代はた  
 ため提灯。向歸から火が出て。一座の人々惣身燃上り。生が變れど今も焼手にあふて。烟を雲に包まれ。丹波越と見  
 へて。空は程なく暗渡り。日はまだ午の上刻二樂は夢の醒めたる心地して。朦々として立たりしが。四方を見廻し南  
 無三寶化されたと。それより新町へは行かずして。我住む小谷の借り庵へ歸りぬ。



第二 心中時花醫者

初恋を取結ぶ糸屋の少女

世に流行ればとて二ツなき命を然も女のために縮め。心中死を自慢らしく。骸を野徑に晒し。親類の顔をよごし。繪草子に悪名を誣はれ。永く恥を顯はす事無分別の中の無分別ぞかし。今時の心中は義にもあらず。情にもあらず。只不自由より其身儘ならぬ心からの無理死。近比愚なる穿鑿と。智恵あり顔に申せど。今好色の世の中に刃物三昧こそせね。一生添ふ女房の爲に腎虚して死ぬるも。品こそかはれ心意氣は更に替る事なし。いか様人間と生れ渡世のために氣を盡して氣病して死し。或は食傷して命を失ふなど。聞くも嫌らし。同じくは女の道にて相果んは順道とやいふべし。一切の人間皆その穴門より出生して。又其爲に死するは。是花は根にかへるの道理と。此世も彼の世も疊み込んだ顔して。無分別に仕過し。昨日は曾根崎の宮地を汚し。今日はありする山の傍に菰をかけられ。二親に悲しみをかけ。主人に損をさせ。殘金ある茶屋揚屋に腹を立てさすのみにして。無益の最期よみうりの外に悦ぶものはあらねど。毎日の心中絶えず。殊に此比は都鄙共にめづらかならず。爰に死彼所に身を投げ。三世因果の種を蒔き。不孝不智の罪。何時の世にかは免れん。爰に難波の京仁徳天皇の御代より今に傳へて。堅いしだしの時代親仁。一生女の肌をしらず。朝暮小判を溜る事をのみ面白き業に思ひ。秤目をせよつて何の樂しみもなふ。うか／＼と升かけ切る年迄。大分の金銀を世の慰事に使はざるこそどかしけれ。妻女なければ固より一子もなくて。近き比兄の子を養ひ。萬事我習慣を教へける中。此比諸方に心中流行て歴々の男。遊君の爲に刺ちがへては。其名を堀江の水に流し。世の笑ひ草と成る事更に合點ゆかず。後の世の事見極めて。來世で添はふといふ心にて一所に死ぬる合點ならば。是計は當に成るまじ。今生に有程だにやすき暇なき身の。空しき後はいふならく奈落の炎に心を焦し。劍の枝にこのみを繋かれ。

修羅の陌に鬪争して。更に浮む期有べからず。若又最期の一念によつて。ふと浄土に生るゝ事あり共。變生男子ときけば。女其儘女にあらず。然る時は折角思ひあひて死て佛に成てからが。思ふ女。男に成つては極樂へ行てからが當の槌が違ふべし。人々此道理を知らぬにはあらねど。女といふ曲者に本心を奪はれ。うつけになるから起るなれば。第一女色を斑猫の如く思ふて。一生女に近づくまじ。汝若き心から女の繕へる形をよしと思ふべけれど。元來汚なきものなり。男女の淫樂。互ひに臭骸をいだと。東坡唐人も囀りおかれし通。よく合點すれば汚なき根元なり。我死せし後迄も必ず此一言を忘れず。妻女にても持つことなかれと。常に誡め。昔より男世帯にして髪有ながら出家の行義成しが。物には時節ありて。此親仁寺參りの歸るさに見せかけの輪珠數を落されしを。向ひなる組糸屋の弟子小まんといふ。今年十四になる小女童みせより詞をかけて。親仁様それ珠數が落ましたといひしより。何となく親仁思ひ付て。それより心を盡されしに。小まんも九十に近き親仁を面白がりて。忍び忍びに出あひしが。固より親仁若き時より此道を嗜み。たがい置れし〇〇今此時の役に立て。血氣の若い者よりは〇〇〇〇〇〇〇〇にて。晝夜わかちもなく首尾さへあれば出逢はれしが。ある時親仁小まんにいはれしは。我昔からこんなよい事を知らずして女を卑しめ。養子始め手代迄に日比此道を誡しめ。常に過言を吐きて今其方とかふした事をして。若し内杯へ漏れ聞へては悴又は手代共が。思はん手前如何にしても面目なし。さあればとて馴染たるそちが事を。思ひきらんと思へ共。いかないかな露忘るゝ際なし。其方さへ合點ならば。諸共に相果永き來世でゆるりと添ひたしと。涙ぐみていはるれば。小まんも涙ながら。私とても主人を始め。朋輩の女衆に。男こそあらうに。九十に及ぶ老翁と狂ふてと。悪口いはれては生てゐて面白ふござんせぬ。幸ひ其心底ならば。片時も早く死を急ぎたしと。思ひ詰めたる風情。親仁悦び然らば今宵生玉の馬場先にて。見事に相果べしと約束かため我宿にかへり。あひくちの錆をおとし。俄に白小袖の用意。息子を始め手代共不審をなして。油断なく氣を付しに。日もくれ初夜の比に。表に女の聲にて咳ばらいすると。親仁身拵



へして。あひくち手に持ち走り出られしを。後より見え隠れについて行けば。十四五成る女と手を引きあふて。此世の縁こそ薄く共。未來では永ふ添はふぞやと。互に泣き／＼死に行。名にも似ず生玉の馬場先にて。おやち上にうつはりし木綿袴を脱いで下に敷き。小まんを寝させあひくち抜いて。既に危いことをせんとしられし所を。見へ隠れに來りし手代共驚き走り寄つて。先双物をもぎ取。色々宥めて連れ歸り。お氣にさへ入たらば彼の小女童程の事。如何様とも我々自由に致し進ずべしと。息子手代さま／＼異見すれ共。そう云てくれる程猶ほ生て居られぬ首尾。是非共死なしてくれとの望み。是たゞ事にあらず。女に惚られたてはなくて。老に惚られたか。但しは何ぞついて狂はすか。兎角本氣の沙汰ではなしと。小女童も向ひの主人に此品をいひやりて一間に押込め。親仁も坐敷籠に入置。諸寺諸社へ祈禱を頼み。さま／＼と祈りしに更に印なくて。唯心中して死にたい／＼と。隣家の聞へも恥ずわめかれしかば。親類打より様々評定して。若い時から渡世の事に氣を盡して。今心虚してあのごとくなられしものならんと。大坂中の名醫を招ぎ。様々療治すれ共更に驗なくて。たゞ心中せう／＼と云事をいひ止まず。或人知らして谷町の藤の棚近き裏屋に眞那田徳安とて。斯様の靈病を癒す醫ありと。聞より人を遣し家に迎へて。病氣の次第を語れば徳安暫く工夫をして。此病氣を中々常體の了簡にては治しがたし。是は此比の流行煩ひにて。心中傳尸病といへり。我考へて藥を越べしと。宿に歸りて今諸方に怪しからず心中の流行も。傳尸蟲の類成物ひたと移り渡りて。かく人の亡ぶと思へば。此心を以て考へなば。的中の藥を工夫仕出すまじき物にてなし。井戸蓋に吸膏藥をはりし竹齋が機轉思へば。茶笥の尻て水呑む尖ぬき。ほの／＼の歌で油が落。覆へ瘰癧を移し。上桂の古いが瘰癧の藥となり。叶といふ字て蠟の流が留るなど。誰が仕出して今人の助となれり。松雲子がお伽婢子に虱瘤に古き梳櫛の黒煙。嘘にして面白し。人面瘡に貝母の事。此外難經などを見るに。いろ／＼無偶の療治。伏儀神農の言葉の外に。人々の作意歟にぼんのくぼの毛をぬき。痲病に頼先の赤い女を用ひ。格氣強き女に龍田山夜半にや君がの歌を御符にして戴かせ。油蟲の

多くわく所に。割付／＼と書て札を張れば一疋もなく。間夫狂ひする女郎。業平を信心して名を出さず。痔の有野郎弘法大師へ願をかけてさゞいを斷ち。傾城遊女の損じたを。孝謙天皇へ嘆くなど。皆それ／＼の氣轉なればと思案出し。出所も知れず尋手もなき心中死の。土に埋りし。死骸を尋出し。男女の頭の骨を取て黒煙とし件の病人に用れば。彼煩腦魔の眷屬あかね半七三勝が亡魂藥力に足を止め兼ね。此家を逃去れば。親仁夢のさめたるごとく正氣になりて悦ぶ事大方ならず。擬驗有し藥の名を問へば淳氣靈天蓋とて。必そなたのやうな心中傳尸病に功ありといはれしかば。若き盛りの子を持し親達。浮氣な遊女抱へし茶屋の亭主兼ての養生に用ひて置たと聞傳へに諸方より藥とり繁く。次第によい身と成て。松屋町に玄關構への家を求め。今は輿物に乗走らかして。心中醫者として。難波に名を高く榮へぬ。

第三 床の軍法 女楠

兩大臣金の力くらべ松を引ぬく堺の兵者

浮世小路の悪所駕籠四人揃の單物に。染込の水車の定紋。まはれや／＼末社共。前後を守護し大道を我ものにして。幅廣くぞめき行人を見れば。此津に匿れなき數代續いて有徳の名取。佐渡屋の竹右門といへる男。瀧岡彦右に似て風は又寛瀾に。しま縮緬の淺黄に白襦子の長羽織に。狩野の何某が墨繪のげんじ。人の目立程なれ共。其比未だ世に衣裳の御法度もなき時成哉。ばつとした大騒ぎに。里中に名を揚巻といふ女郎に深く。年比通ひ馴て。萬事一人として引受ての騒ぎ。太夫威勢日に増。中々幅なき男など。艶顔ちらと見ること叶はず。名のみ高くしてお姿を拜し參らす者もなきに。攝泉の堺成る玉屋の重藏といふ取出の大臣。此君に思ひを運び。竹右門より萬の事を上かさにかゝつて。急に思はれたがる仕かけ。後には兩大臣威勢争ひと成て。此方に百兩入事を目論めば。彼方に貳百兩入事を思ひ



付。遊びはわきになりて張合づくに氣をもむ事。兎角は親方第一は太夫が仕合せかし。此比竹右門少し風氣の由にて里通ひ延引の内。玉屋軍藏急に引ぬく相談有よし。渡竹方の末社手合の米達揚屋夫婦手を握り。齒を喰しめて無念がり。竹さま方へ櫛の齒を挽く如く文して申參らすれば。やうく大臣只今御來臨何れも待かね表迄御迎ひに罷出。手車に乗せて奥座敷になをし申。おのく詞を揃へて申すは。凡そ旦那と太夫様と深き御中の事。難波中に匿れなく勤めの御身ながら。佐渡屋の奥さまのやうに思ひなし揚卷さまとは申さず。佐渡の金山御前さまともて囃す女郎を。然も他のお客でも有事か。日比買論の意地有。堺の玉重どのへ引ぬかれ給ひては。旦那の外聞附々の我々迄。高き鼻が低う成る様に思はれ。爰は御一分あゝ慮外ながら立にくき所。太夫様も堺へござる事は。昭君が胡國へ身請せらるる如く。思召此ころは食もあがらず。御事のみおぼし出られ。其様痛はしさか。中々我等如きが詞に顯すやうな事ではござりませぬ。さるによつて亭主が働きて。親方へ内證を根を押して聞ますれば。八百兩にて事すむよし。其邊を丁度十兩につばめ横合から無理所望につかむはづ。最早今晩夜に入ては其相談も成がたき由。我々心の遣る瀬なさは。是旦那どうでござりますと。一座の者共眼をすへて申せば。大臣更に急かせらるゝ氣色なく。我を思ふてもがいて呉れる心底過分。我千兩萬兩の金を厭ふて此の張合に後れを取るにはあらず。年月爰に暮して現のごとく成し内に。手代共言合はせ大分の金銀を掠め。立退く思案をせし所を。一家共より心をつけて。家内を吟味して。残らず古き手代を追ひ出し。此比新規の手代共を召抱へしが。此騒動皆我等身の行ひ宜しからざるゆへなれば。新し代居馴染む内は。萬事の遊興をやめて暫く大人しい顔せよと。親分の人の異見至極に思ひ。此間は虚病を構へ家内の外一寸も出ず。身を堅むる最中なれば。身請などの所へゆく事にあらず。當年中謹めば。來春よりは昔に十倍の遊びをしても苦しからず。どうぞ其玉重が身請の相談。汝等が智謀にて來る春迄待たされまいかとあれば。何れも力を落し。西瓜の中火をともしせしごとく。顔色青光りになつて。はつといふより詞なし。亭主申すは來春の事はおけ。今宵を待

たぬ穿鑿太夫様も今迄はさりともと思召。御出をかうばしく。今日一日は玉重様へお断わり仰せられ。身仕舞といふ言立にて。今朝より手前に御來臨先づ御知らせといふ露の。奥へ告れば走り出。詞なくてまづ總みついでの駈り泣き。何れも道理く目と目を明くものは一人もなし。暫く有て太夫涙を抑へ。此幾歳か御威勢にて。結構に遊ばし下され。誠は流の身の外のやうに逢ひ馴れ參らせ。互ひに千代もと誓を立て申かはせし事。今は成心の移らぬ方へ引抜かれ參る事。責ては今迄お馴染申せし甲斐には少しはお腹を立られさうな所を。その御氣色も見侍らぬは。御心も變りし物と推し申せば。くどうお恨み申上人も至らぬからと。此上ながく御見限り遊ばされん所も恥かし。兎角は今日迄の御縁と思ひ明らめ申より外はないと。さつぱりとはいへど跡は涙でわけもなふ取亂しけるを。大臣宥めて逢ひ染し比より今に。我心底に變る事はあらねど。此里通ひに心浮れて我家のたゝぬ事をしらぬかと。一家一門打寄ての異見黙止し難く。親類の詞をたて。暫く此里通ひを止めぶんのうちなれば無念ながらも。日比其方に追従深き玉重に先をこされ引拔るゝ事。我生爪を離さるゝよりは苦しき心のうち。いはぬとても推し給へ。假令ば玉重が奥様とよばれ給ひ。千年萬年逢はぬとても。申替はせし我心底に變らぬ印には。今日より他の色に心を寄せず。一生女の道を絶つべし。是にて知在なき我心の中を察し給へと。餘義なき言ふん。太夫も少しは嬉しなから。人の花と眺めらるゝ上は。一生逢ひます事も成るまじ。併し御心底に替りなきとの御事。とても事の御誓言にて聞ましたいといへば。日本尊神かけて今飲む酒が毒となつて。立處に呻き死をする法もあれ。身終る迄心に替る事はなし。そなたは又我事をさらりと止め。随分玉重が心をとりに一生裏なく仕へ給へ。是今生の暇乞の盃と。一ツ飲みてさし給へば。太夫涙ながらに押戴き。一念岩を徹すといへば。一生の中に又逢はれまい物でなし。たゞお心の變らぬを樂みに。爰はひとつ飲べまして。手へかゝる程受持ち。心よく飲みて大臣へ戻し。随分御酒もお控へなされまして。たゞお煩ひなきやうに呉々頼み上ますと。互に涙の長座敷。末社ももんさくを止めて。亭主も可笑き手つきをせず。一座濕りて異な











堺の玉重どのが呉られし。日本名譽の〇〇〇。女に一粒あたふればたちまち野干の姿を顯はし。狂ひ出て無量のもてなし。金銀づくでならぬもの。今一つは竹様と太夫様別の時にお床でたかせられた。はつねといふ一焼のあまり。揚巻様の手づから下され。形見と思ふて身を離さず。何時ぞは旦那に焼てきけまし。さりとは持溜のよい奴。太夫が事を汝迄がそれ程に忍ぶかと御機嫌のあまりに。捨てても一はい下さるゝと。心當にせし伽羅が惜いと云ふを聞て。件の女乞食聲をかけ。そのはづ手の伽羅は竹さまのお目かけられし。長町の忠六殿に進めたが。其方誰ぞと詞をかけられ。三人驚き立寄て。よくく見れば是はさて。太夫様が此お形はと。大方ならず肝を潰せば。揚巻様を取て捨て。黄八丈の大格子に。紫のひつしごき帯前に結び。昔の姿其まゝ立出られし。風俗のしやんとした所。よし澤が傾城風にうつりて。何れ菖蒲と見紛ふごとく心の寛濶成る所。詞の引すて迄其儘。次第を語らるゝを聞けば。扱わし事は竹さまに申交せし事あれば。身を刻まれても添ひ通さねばおかぬ氣にて。過し九月十三夜に。住吉浦の海月眺めに。玉重様に誘はれ参りしを。幸ひに松原に艶敷かせ。何時よりは玉様に酒を進め参らせ。醉募りて我膝を枕に遊ばし。心よく寢入給ふを。腰元の菊が膝を取替へ。松の葉越の月見る振にてにげ出。其夜此地へ來れ共。竹さま方へ行かふも所は知らず。其上内方のお首尾の程も心元なく。何とかと思ふうちに夜は明けかゝる。此姿では玉さま方の追手に見つけられ。捕へられんは必定と。此所に此菰の有しを幸ひに身に纏いて。晝は爰に屈み。夜は終夜皆様の方を心ざし。何卒此首尾を竹様方へ知らしませて。千々に心を碎けど。稚なき時より廊の中より外を知らねば。夜は其處共知らず。うとくあるき明かし侍りしが。不思議に今宵各に御目に掛かる事の嬉し。早く竹様方へ知らしませて下されと頼めば。三人手を打ち天晴今の世の稀者。こがね心中是を知らせませいでおきましょか。まづく今宵は私方へ御出り。明けなば早々竹さま方へ注進申上。お悦びに先づいびつなりな物は申請た物と。面々心に笑みを含み。忠六方に其夜は明かして。東が白らむと忠六は佐渡屋方へ走り行き。旦那に急に御目にかゝりたいと申上れば。まだ御休みな

なされてじや。用があらば後にござれと。小者上りの若い者が伺ひもせず返事いふを。常の用とは替り。旦那御満足注進。苦しからずばお寢間へ参るべしといふを。然らばとて旦那へ斯と申上る。大臣寝ながら。忠六計ならば直に是へ通せとの御意。畏つて奥に通る。先づ何かなしに。揚巻様私方迄御來臨。日本廣しと申せ共。こんな心中又ない事。旦那に逢はしやりましたいと。一度は乞食に迄御なり遊ばし。菰を召しても昔を忘れ給はず。八文字で五器持つての道中。神代此方かい圖と申せば。大臣さのみ驚き給ふ風情もなくて。玉重方は九月十三夜に。住吉浦からぬけ出たと兼て聞しが。夕部迄三十日が間は何方に匿れ居たぞ。様子を詳しく尋ねたかとあれば。扱は旦那には先達て御聞なされましたか。九月十四日より今十月十六日迄。太左衛門橋の下に。見事成る御乞食とならせられた事。夜前私玄悦吉左衛門三人共に見届けましたと申上る。然らば此方より追付迎ひに乗物遣はすべし。三人共に付いて参れの御意。畏つて立歸り。大臣の仰られし事二ツ三ツ申上る。御迎ひの乗物参り。お姿入て連れまして歸れば。三人一所にお供。仕り竹さま方へ参り。奥座敷へ乗物かき入太夫様を出し申せば。其儘旦那に取つき。是正眞の説び泣き。大臣もかすく珍重がらるゝ所へ。玉重方の手代のよしにて。五十四五の随分むつかしく作りし男。鮫鞘の大脇差を横たへ玄關へしかけ。旦那重藏八百兩の金子を出し請出せし女を。此方の御主人入性根をなされ。おびき出し匿しおかるゝよし只今知らず人有て罷越てござる。八百兩で買切旦那婦妻に致す上は。竹右門殿には間男に相極まりました。然とお届け申上ば。下にては堪忍ならぬ所。表向に仕ると。額に皺を寄せてねりつくれば。手代共揉手をし。御尤もくゝとより外詞なくて。奥へ斯くと通ずれば。大臣聞し召して。心中をたて、駈込し女を。今表向になるが悲しいとて。無氣に却さるゝ場てなし。よしや密夫の咎に落て。此身をつたゝに切刻まるゝとてもかへさぬか。太夫は我と共に如何成る憂目に逢ふて死ぬるとも。添ふ氣かとあれば。抜け出て一度はさもしき非人の身と成りしも。君が情を慕ひましての事ながら。敷ならぬわしゆゑに大事の御身に悪名をつくるのみか。御命づくに及ぶこと。



如何に添ひましたきとて。此身無事にて爰にありては御爲にならず。さあればとてお主様に離れて外の人様に添ふ事。身に絶て嫌なれば。玉重様から使に参られし人に逢ひまして。直に斷りを申て見度と願へば。兎も角もと件の使を興へ呼びいれ。太夫に引逢はすれば。揚巻使に對しいはるゝに。我身此所へ参りし事。竹さまのつけ智恵にはあらうな。御縁かしてたゞ忘れ難く。懐かしさに御目にかゝりに。今朝是迄参りしが。私ゆゑに竹さまの御名を立てるやうな。召しましたなれば玉重様の物にして我物ならねば。何處の浦迄成共連れて歸らるべし。魂は竹さまに申交せし事あれば。爰に止めておきます。金子の替りに亡骸を進します上は玉重さまにも此方にも。竹さまに言分はない筈。皆様さらばと使の者がさした。脇差の柄に手を掛け既に自害と見へしを。使の男慌てゝとりとめ。なんと旦那太夫様の御心中も見えましたが。此上は有様に明して。安堵させまして進せられませぬかといへば。いふ迄もない事。さりと我ゆへ今迄の憂苦勞過分。そふした心底とは知らず疑ひ強くさま。心を引見しが。是も憎からぬ心からなれば叱つてたもるな。元來其方に逢初めしより。幸ひ氣にいりし妻もなければ。根引にして。我宿の奥様と眺める心で居たれ共。一生添ふからは心中の底を見抜かいてはと。いろ／＼思案せしが箔置の木刀で心中しかけてみるも。江戸の半留が若山とせし事。何卒太夫が智恵に及ばぬ智謀を以て心中を見んと。あの玉重と身共はさした従弟。芝居の子供を好いて。傾城を面白からず。終に傾國に行かぬ者ながら。隨分の粹なれば。是を頼み。何時ぞやから我等方より遣はし。玉方へ引取らせの上の其方の心中を見んために。今迄せし事皆方便にして。誠は我疑ひ深きゆゑと。今といふ今そなたの所思面目なし。今日よりして此家の奥様になれば過去し今迄の憂き難儀を慰み給へとあれば。揚巻竹に縫みつき。さりと心強きなされかた。我玉重様を抜出でから今日迄は三十日になりぬ。其間何處へ行しかと尋ても下されず。其上浅猿しき非人と成て。太左衛門橋の下に寝し内。若水に溺れるか。又は飢て死するなら心中見んとて巧み過。殺してのけたと御笑草になして果し給はんや。近比それは心強き御仕形と恨み嘆けば。愚成る事をいふ人かな。住吉の月見の夜抜け出られし其時より。昨夜迄見え匿れに人をつけ。晝夜心を運ばせ。朝夕に濱がはの料理茶屋よりはこくむよしにて。手を廻して食事と興へ。雨の降る夜嵐のつよき夜は。往來の者の痛はる振にて。庭屏風笠杯をあてがひ。人知れず夜は寝ずの番をつけ置守らせし事今思ひ合し給はゞ。ひとつ／＼心當り有べしとあれば。然らばそれ程に人をつけて心底を試し御覽あらば方便にも致せ大分の金銀を出し身請をして下され。御恩深き玉さま方を抜け出るからが。おまへの心中は見へました事成に。昨夜三人の衆中不慮の事にて名乗り逢ひます迄。捨置かれしは胸慾成なされ方。若し三人の衆に逢いませずば。其儘非人にて何時迄もおかせるゝ御思案かと。押返して不審をうてば。さりと厳しき尋ねやう。玉重方を抜け出でられし時。我方へ來るとの一言をだに聞かば。其夜に爰へ呼入れ。今迄の憂苦勞をさせねど。我より外に深き間夫にてもありて其方への心ざしにてや。詞に出ねば心中の程落着せず。猶ほ疑ひ深くて今迄の延引兎角は一生添ふ者なれば。なみ／＼に心中を見定めねばならぬ事と。後には大笑ひに成つて玉重方の似せ使も。誠は新地屋敷の屋守の作衛門と名を顯はし。たゞ思召合たる御夫婦の御中。萬年も相變らず。相生の松で芽出度きと。其の夜直に御一家迄へも奥様弘めあつて。ざんざんの酒盛納まり。互の心中堅まり程なく懷妊ありて。翌年の九月に玉の男の子を御喜び給ひ。名を竹松と付られ夫婦の寵愛限りなく。御家の根柢と出入り人々喜びの袖をかゝへぬ。

第五 淀鯉水の働

難波の銀右門は今都て宗徳といへるむかしを聞けば。小傳次とて花をやりし藝子。其比は櫻山林之介未だ幼稚し

時々の移り氣女より色ぶかい紫帽子



て。戸川庄太夫といへり。重様が方にありし時よりたゞものならず。未は名人になるべき器量ありと。此道の粹褒め  
 おかれし目利違はず。三ヶ津に名をあげ今立役となつて。若手の上手と難波人の稱美。殊更色男にて女の好ける事先  
 はあやかり物ぞかし。其比は物事心安く。客も氣が張らず。勤子も誠の子供心にて。欲を知らぬゆゑに大臣の氣を取  
 るすべを知らず。萬に誠計りにして偽りあらず。酒も過れば嫌と申て何の張合もなく。人形繪草子枕がへし糸どりな  
 どに心をうつして。意氣も張もあらず。何が慰みに成しぞ。遊ば、今なり。酒に興ありて。偽いふ内に誠あり。氣の  
 張る遊びを嫌ひ。物の入らぬやうに立廻る客こそ可笑。其氣ならば壹匁でも遣ふが損なり。遊ぶからは大名氣になつ  
 て。萬更是れは粹ごかしと知りながら。ざりと上物め。味な嘘の付廻し。初心な子供はなんとしてと偽りと知て  
 感ずる事。双方共に粹の寄合。一入遊びも身につくやうにして。今程面白き事はあるまじ。中比はこんごうにはづむ  
 事もなくて。大臣心をつけられ此子が供の者が来らば勝手て酒でも吞まして呉れと。亭主に詞をかけるは精一杯  
 こんごうも臺所にて。烏賊の足車海老の切はづしの取集め看に。茶碗で冷酒二三盃引かけ。旦那お庇陰て忝けないと  
 おくそこもなふ満足がりしに。今時の若い者に一角二角取らしても。さのみ嬉しがる顔付もせず。少し露打間が遅け  
 れば。秋の夜の長きを四ツ前から呼たて。まう迎ひかと大臣けうとい顔して。今少し名残を惜む所を愈々せりたて。  
 約束もない秋田や方から度々人が参りますと。忙しく申かけて戀の最中に氣の毒聞事ぞかし。堺の玉重は數年の子供  
 好程あつて、芝居過から夜へかけ。何時とても極まつて三ツめにして。我あそび草臥て嫌と思ふ時。此方から歸すは  
 ど心よい者はないといはれしは。尤かなや松山勘左未熟な時あり様程な遊び手も。廣ひ此津に御座りませぬといひ  
 しは追従にあらず。有時玉重不斷目掛の濱側の色宿に晝過より入らせられ。牢人役者近所の料理屋の亭主など。五七  
 人招き寄せられ。皆も知る如く我等親類の佐渡屋の竹事。以前から女郎を好いて傾國計に行て。此堀の藝子の面白き  
 といふ遊びをしらぬが不便さに。此比すゝめてみれ共。年穿鑿をして悪口計いふて此道に趣きのないを。やうくい

ひ負せて今日芝居過から来る筈なり。何卒上手者をかけて引止め。此遊びに跡ひかせ我若衆狂ひの友とせんと思へ  
 り。何れか彼の男が心をとめて。道頓堀へはめ負せる器量の子供は誰にてが有べし。汝等指圖して見よ。渡竹方には  
 誰といふ名指もなければ。此方等任せなり。主膳か梅之介か。扱は鹽屋九郎右門抱の岩井半太夫などでは有まいかと  
 あれば。何れも頭を俯向け額に皺を寄せて。誰にかと案する中に。和惣が申は。竹様の心を蕩少人は。藤田平次郎  
 殿ならては恐くは有まいと申せば。座中一度に是は汝一代の見立よくぞ申た。此君ならではない共。先は不斷  
 の身持外の子共と變り。心に若衆といふ事を忘れず。手前に使ふ下女が手からは物もとらず。寢道具の上下しも小奴  
 子にさせて。女を近寄せず身を堅めて。勤の外夜の道露を踏まず。朝に寢顔を同じ内成る末々に假にも見せたる事な  
 く。寢所にて懐中鏡を出して。よく繕ふて起出。客なき時も湯行水の外常に帽子外さず。暑氣の時分身は汗すれと肌  
 を脱しことなく。秋は月をも宵から見捨ずして。歌書に心をうつし。手拙なからず。ひとつく能事を見習ひ。萬に  
 つけていやしからず。殊には其身生れついて情深く。竝枕に打解て人の命をとる程の事ありて。稀に逢ひぬる客も忘  
 れ難くて。後引て。明暮戀に責られ。借錢の堀にはまりし人限り知られず。一座のこなし盃の捌きの面白さ。客を手  
 に入。此比も河内の禪寺の和尚に袴させて。日本橋を行戻り四度迄歩行かせ。丹波の物堅き侍に。尻褰げさせ大小  
 取て秤を差させ。算盤持せて座敷中を廻らせ。現を抜かして其身もつかふて慰み。其人々の心を汲んで其敵の好事の  
 み申盡し。じちめな客も唯一言で命も算用も構はぬ程のしこなし。神武以來ない若衆と詞を揃へて申せば。成程此子  
 に極めよと約束有を。主人働きて無理に貰ひ。芝居果て暫時して御出嬉しく。同じ樂屋の覆竝の心安き朋輩の子  
 共四五人申遣はし。早速御入賑かな座敷。酒も興ある所へ渡竹参られ。君達へそれく詞をかけて膳過てから酒事慕  
 りしに。渡竹は固より不好物の遊び。玉重前計に不承ながらの座敷つき平次見てとり。大抵の子共ならば其儘傍に近  
 寄。機嫌とるべしとてたはれ掛かるべき所を。態とその方へは目も掛けず。たゞ玉重にまはる事風下の紙車の如し。



玉重は此を氣の毒がり。元來今日の趣向は平次を渡竹に思ひ付かせん巧みなれば。我にまはるを珍重がらす。平次さす盃を何と大夫殿お盃を嫌ふてはござらぬが。竹が最前から淋しさうに見へます程に。ちとあれ遣はされまいか。お合ならば致さうとあれば。先程から幾度か手前へ盃参りますれど。彼方へは何うした事か献します事が嫌で終に進ませぬ。明日は知らず。今夜中は嫌でござります。お献しなされますれば是非に及ばず戴きますれど。是も同じくは外へお献し遊ばせかしと存じますと。遠慮なく申放せば。渡竹ちとむつと氣で平次殿とやらには始てのお挨拶には珍らしい。それが若衆様の御作法か。衆道不案内なれば存せぬながら。お氣にいらぬ方から。お献しなざるゝ盃は戴かいてからが嬉しからねば。望む心ではござらぬが。我等に限り献す事嫌との曰が承りたいと。少し氣色をして詞を掛るゝを。扱こそして遣つた物と平次ぼじやりと笑ひ。其お尤めをあはれかし。實にして聞きましたといへば。身共も男の切でござれば嫌はるゝを満足には存せぬゆへ。其心入が聞きたいと申に。誠か虚言かのおあらため。猶々合點参らぬとあれば。いやゝ偽々芥子ほども御心に掛かる人にこそ嫌はるゝは腹の立つもの。若衆嫌ひのお前が。私の盃進じます事嫌と申さば。却て御満足の筈じやに。年は幾歳にもなれ。若衆を言立てに勤を致す身なれば私を立て。御腹立なされた振を遊ばして下されます意氣方。憚りながら聞しに勝るお上手。女郎のゆくが斷と思はれます。そのお詞に顯はるゝ半分程。御心で腹が立まして貰ひたい迄と。莞爾と笑ふて差俯向いたる化粧。たゞ海棠の眠るが如く。一座の者共〇〇にこたへて感心す。渡竹此詞に生肝をとられ。私が腹の立つたに偽言はござらなんだが。此方の今のお詞を偽言にして貰ひとむない。急にむずをれ。はや思はれたがる氣色見へける時。然らばお客ぶりになしに眞實稗いて下されませぬなら。許言して成共あげましたといへば。すは氏神も照覽あれ。戴きたいに虚言なしと。あらゆる誓文立てさせて。爰は改めてあげませふと。少し呑みて盃洗に遣し。漱ぎし盃に波越す計り引受け。つゝと干してもつてたち。竹が側近くより。さあ上ますと献し置けば。忝じけないと挿戴き。此酒

の甘味き事。その味甘露の如しと舌打して吞まし濟し。宵からすました顔して人にもたつかす男奴と。〇の圖の邊りとんと叩けば渡竹は骨なしの如く柔かに成て靱猿の大名に均しく。取てゆけゝに成て現の如し。扱〇〇入て何かいひけん無性に可愛ふ成て。平次なくては酒も呑まれぬと。是からなづみだし。晝夜堀にはまつて。是程藝子の面白きといふ事。今迄知らず暮せし事の悔しやと。通ふ程にける程に。右より馴染の大臣共を淋しがらせ。毎日樂屋へ林齋といふ手前の小坊主を付置き。棧敷から借りに來ても。中々せて貸させず。其年は芝居の役目勤めさして。來年の賈ひ切。其身自由にさせて。暫時野郎姿で長町の裏座敷に匿し置き。何處へ遊びに出るとても。我身に添ふ影の如く召連れ行しに。歌連俳茶の會鞠楊弓能離子。何にても諸藝の一通り仕殘す事なく。彌御機嫌に入つて藤七と名を替厚髪あつちかの男と形は變へさせながら。随分顔を磨かせ。紅裏の着物小幅の廣き帯をさせ。不斷の行義風俗は其儘若衆仕立にして。夜も一ツ夜着の中に夢を見て。現にも此男が事忘れぬやうにまんまと衆道好とはならぬ。兎角人は何が嫌ひと極めていふまじき事なり。渡竹も若衆嫌ひとはあんまり言過しと。其時の人申しあへり。惣じて人の物好折にふり事によりて替るならひながら。若道計は壯年の血氣盛の物ぞかし。老ては心計にして衆道の床首尾調ひ難し。去によりて自ら女道を模様仕替て。六十の筵破りもなる事なるに。渡竹物好昔は女を好み。年の重なるに従ひ若道好み出さるゝ事。世間の人とは裏腹といへば。然らば出家は老て女を小性にするや。それも今時は知れずと笑ふて果しぬ。



風流曲三味線四之卷

第一 元服しても子共心

取付世帯合ふも不思議見通の占

年々花は替らず。歳々人同じ姿にあらずといへり。殊更若道の盛。脇塞げば春雨の強く降て。花の痛むが如く。角入れば嵐烈しく吹付るに等しく。元服すれば落花よりは強顔し。是を思へば女色と替りて。男色の盛なる程間の無きものはあらじ。假令唐人の若衆にしてからが。鏝の知れた事ぞかし。昨日迄は太夫様と持離されて。若衆盛の花も散て。残る木男となれる藝子の身の果。役者に成は格別。芝居事離れて商人などに成ては。些少の元手有てからが。春の日の氷の如く。じみくとして皆に成事迅し。其身悪所に銀遣ふて減るにはあらず。幼少より公家の落し子の如く育て上られ。男に成て世帯持氣はあれど。身に木綿物を當ればそくくして風を引出し。病らはふよりは着付し物なればと。肌には絹氣の物を離さず。手代を抱ても廻す術を知らず。五斗味噌汁といふ物。さゝじんの外知らず。口榮耀にして朝夕美味ひもの好をし。そろばんの事はおけ九々さへ知らず。秤目に疎く。百の錢も繋ぎ乍らよむ事適はず。五文宛上下揃へて美しく比べ。半日も掛つて讀仕舞。一里と道を歩行く事ならず。むつかしき座敷へ出て折詰た挨拶ならず。常いふ詞女の如く舌を痿し。尻つまげも人の見る目を恥らひ。裾の長き物を着てぞべつき。其癖毎日酒を好み。並酒は重くして何處やら凭れて悪しと。鴻の池の生諸白を砂越にして飲むなど。假令百貫目有てからが商人と成つて。此身持て世渡の成さうな物ではなし。立役に成る器量なくば。娼妓茶屋の後家の方へ。例へ年は七つ八つ老女房でもあれ。些少の金を持って入聲するが上分別なるべし。小商人荷擔賣する目からは。役者の渡世羨敷く。

其身樂て毎日面白い小歌三味線聞て。然も男女に慕ひ忍ばるゝ事身過の極上と。骨折る身からは思ふも理り乍ら。何事も夫に成らねば知れず。打見には樂さふて。太夫様く一行先て待遇され。一町ある所も駕籠に乗散らして。買人は金出し乍ら氣に入たがつて。手を當る程に可愛がられ。殊更浮氣な女共には。彼方から逢ましたいと。手を廻して頼入れ。禮金取て甘い事して遣るなど。町方にては思ひ掛し女に戀を仕懸れば。此方から持運ぶによい物食はせに。色粧つて来て。賃をかく事。此様な事計あれば藝子の年は寄らず。親仁方に成る役者も有るまじけれど。憂の段を聞ひては。夫はく身も堪る物にはあらず。昨日は田舎侍の片軀なる人にも。氣に入相比より夜更る迄無理酒に痛み。ちと嘔吐の來るを。鹽湯などで鎮むる所を。太夫名残の盃。じや。國元へ歸ては又上る程も知れず。暇乞にちと覺える様に茶碗でお厭しなされといふに。厭ともいはれず。半分請れば何か御意に參らぬかして。亭主太夫の暇乞の御酒を。あがらぬは何様じやといはるれば。主人は此子が酒に痛むと見乍ら。客への馳走なれば。宵から見事に飲りましたが。お暇乞とあれば爰は一つかえと。爛鍋取て八分目斟げば。是非に及ばず目を塞ひてぐつと飲み。彌々胸悪く。むかむかとして吐心になれど。其品を見て愛想盡すのみならず。好悪の評判にあふが悲しく。擦り下して下女に耳語き。○急がせば。○の中にて○を持し掛て。身共等が様な田舎者でも。馴染めば可愛ひと仰しやるが。眞實可愛ふ思ふて下さるゝかと。同じ事計管を捲いて。頬がひへ舐り付時は。其儘消たい程に思ひ。阿房ぬかさうより。爲る事して歸して呉れ居れかしと。心には思へど。口には町方のお衆と違ひ。お侍様は屹とした様で。然も御心が綿で馴染ます程心が打解け。何時迎も迎の參る時分は。名残惜うて歸り兼て居りますといふ舌も引入ぬ中に。太夫様お迎がといふ聲嬉しく。明日は太夫本に朝仕組が御座りますれば。今夜歸りてから臺詞忘れぬ様に。繰ませねばなりませぬ。日こそ多きに仕組が明日でなくば何じやいと。忙がし氣に帯紐しめて立別るゝ。侍は一義心當にて。○○○○○○○○○  
○鬼鹿毛○○○○○○○○○。猿が○○○○○○○ゆるる如くして居乍ら。流石是非共いひ難く。最早お歸かと本意



ない顔付。そこ／＼に待遇ひ宿に歸れば。伏見屋より呼びましに先程から人橋がかゝつてといふ聲。肝にこたえ咽へ指など差込み。酒氣を拂ひて薄味噌の汗など吸ふて。又色粧りて行けば。大和の御出家達二三入。外に子共衆も一兩人有つて。精進肴引散らし。されど強い酒事はないかして。我より先から来て居る子共皆素面なれば。先嬉しやと座に着けば。若衆珍しさうに。願の下へ首を入れて。顔に穴の明く程眺められて。可笑からぬ奈良の大佛咄。お釋迦の鼻の穴へ日傘さして入らふとまゝよと。よい加減に跡うてば。座敷濡りて酒の上へ夜は更る。そろ／＼お迎が来て。ぶら／＼とふらつき半分は夢見て聞けば。それから薪の能の話に成て。坊主客は若衆馳走の爲に。初日から段々番組迄長々と話さるゝに。折節はとでもない返答すれば。中間とて外の子共。餘の事いひ出して笑ひてくるめ。何の面白からぬ座敷を。べん／＼だらりとして。是は主人が目かりがないと。我草臥しまゝに科なき亭主を叱り。○に氣を付さしてお休みなされませといはせ。屏風の中へいれば。若衆を二つとは殘酷ひ事乍ら。銀が敵と是非なく自由させ乍ら。○○○○○○○以て参り。夜更け泣別るゝ迄に。如何計年を寄らしぬ。其より歸れば早明方の烏啼渡りて。とるところと寝ると。三番つゞきの序前で。平二が只今済ますと樂屋から告來れば。朝飯樂屋へ差越せと。いひ捨にして早身拵へ。序開きの役目に。遅ふ來る過代に。今日は一むし蒸ぞと石中間に喚かれ。舞臺勤て樂屋に入れば。棧敷から借に來る。一軒へ行けば爰へも一寸と止られ。沸し冷しの惡酒を強くしめられ。胸に應えて厭乍ら。色粧る身の顔にしかみも付られず。何ともない顔して飲で。其々に勤て歸る憂苦勞。孰れの道にも色こそ變れ。身過にあだなる事はなし。藤田平次郎は。渡竹引廻しにて藤七といふ男になりて。鹽町の藥師の近邊に。西川屋といふ暖簾を掛け。錢店出し紙蠟燭など取混ての商ひ。其頃北濱の惡口中間評判して。藥師の近所に野郎の宿入りは不遠慮と存る。其上商賣兩替をせらるゝ由。末々は秤に掛てちんぶらりと成べしと。立身を猜みいひ立けれ共。藤七元よりたまかなる生れ付。萬事器用にして算用を習ひおし。小かい劑物でも。おいぬきの兩替手代共も。及ばぬ程の暇餘し。金儲見る事も。

渡屋にて多く數を見盡し。能見覺へて目かど強く。然も利發にして商ひの道に疎からず。掛引よき上に渡竹といふ後立あれば。次第に儲け溜て。年々の勘定に銀を延し。是皆竹様の御影と佐渡屋方へは足も向けず。朝暮御高恩を忘れざる。志し自然と通じ。藝子の果には稀なる生れ付。我方へ呼入れ。家内の支配をさせて見んと。其より内へ入れ給ひ。萬事を藤七に任せしに。假にも私なくして然も忠功を勵み。御家の白鼠と出入人迄用ひしは。其身の譽れ。殊更一子竹松幼稚なれば。乳母分に仰付られ。後見を致しぬれば重き人にして。同じ傍輩も自から尊めて。古參の手代も從へり。偕も竹右衛門今年四十二の厄も無事なるを悦び。是より男を止て法體し。俗名竹右衛門に準へ。虎安と付て。其名千里が外迄も隠なく別家に隱居を造作ひ。世間を止て樂を極め。木津の里に虎安妹縁付しておはせしが。其娘子におかんとて。玉の様な生れ付。今年五つに成られしを。末々竹松と妻合すべしとて。我方へ取迎へ。慈愛深く養育せられしが。竹松九つの年書院へ出て雀小弓を射て餘念なく遊ばれし所へ。おかん何心なく走り來て。小弓の妨をせられしを。竹松腹立ありて嚴しく叱り給ふを。幼稚けれ共女の性は僻る慣ひ。叱られし返せんと。的を取て抛られしを。竹松堪りかね。引設けたる小弓をはなし給へば。過たずおかんの類にひしと申り。其處ら破れて血奔ければ。あつとむつかる聲に。姥おさしなど愕き擾ぎ。やう／＼賺して懷き抱へ。次の間へ連まして入りぬ。其より竹松おかん申好からずして。一所へ寄合給へば。争ひ止まず。後には虎安夫婦の耳へ入て。我此姪を養ひ置も。末々竹松と夫婦にせんと思ふが故なり。然るに今此の如く申悪くては。自然相性にて悪きや。占ひの名人あらば招き寄せて。考へさせとの仰せ承はつて。其道の上手を訊ね問ふに。難波に蘆屋の道鑑とて。法道仙人より傳はりし一流。陰陽五行天文地理の事易曆に至りて。又此津に肩を比る者もなき上手のよし。傳手を以て招請し。竹松おかん相性を考へて給はれとあれば。道鑑暫く考へていはく。男子は土性にて生れ付陰氣にして洗むが如く。女子は木性にて天性強氣にして盛なり。然れば木盛なる時は土衰ふ道理。婚姻あつて夫婦の交りあらば。男子の陰氣女子の陽氣に奪はれ。終



に家断滅して永く絶なん。但成長あらば中は好かるべし。能に随ひ彌々陽に奪はるゝの道理逃れ難しといへば。虎安驚き給ひ。幼少より世話を焼き養育致すも末々夫婦となして。子孫をあらせ家相續をさせんが爲なり。然るに却て怨となりて此娘故に家を断絶させんとせし事恐るべし。偏にお影にて一家の破滅を知て此災厄を逃るゝ條。悦び是に過すと道鑑を様々款待難波に返し參らせ。借おかんをば木津の里の妹の方へ。只申悪きと計にて返し遣はし。其後は養子娘の沙汰も止みぬ。三年先の事をいへば鬼が笑ふといへり。見透しといへる道鑑が何を考へて申すぞ。廻り遠き末々の事を見透さうより明日の米の相場を知れば。占ひせいで。俄長者になる事を。是は虎安を茶かしたと譏れる人もおほく有けり。相性見て夫婦になるは中より上の穿鑿。下々は仲人さへなく直々に。柴部屋の片蔭にて急な約束。相性は火と水と揉合て。〇〇〇〇〇上では。何性が〇〇悪いか知らず。是を無性よい中といへり。

第二 萬福長者二代の大臣

家ふるまひの御馳走は大名戻り

器量の能は母の艶顔を産つけられ。風流なる身持至つた穿鑿學ばずして。知れるは父親の血脉をつぎ。諸藝に器用なるは其身過去より持て來た徳。金銀は固より。家に傳へて何程と云限りをしらず。是ぞ諸果報と出入人にもてなされ。戀のさく年は十六の春元服をして。名を竹五郎と付られ御母屋を受取。萬事重手代の藤七と裸し合て家の治る事。親虎安支配の時より。格別實體にして繁昌尙盛なり。或時御出入の御手醫者。花寄梅薫御影にて本町に家を求めし祝義に。若旦那并に藤七殿を茅屋へ申請度よし。手代勘兵衛太郎右門を以て御機嫌の折節を伺ひ申上れば。早速御出有べき旨。家の面目近所への聞こえ有難しと御家の料理人治介新入を頼み若旦那御好物揃の獻立善盡し美盡し。手を盡しての馳走。暮方より御家へ御出入座頭澤都城俊など。色糸をならして旦那を勇め奉り。酒もそろくしむ時分

亭主梅薫廿二なる美女をつれて罷出。是は娘らんと申候が。十五年の年より西國方の去る御大名様方に。御奉公勤め罷有候へ共。私も次第に年寄一子もなければ。何卒似合敷弟子も取。此娘と妻合。花崎の家を恙なく相續いたさせ。旦那へも幾久敷御出入を致させ可申と存。去冬より御暇を願ひ。やうく此比相叶ひ。御隙を申請罷歸り。大悦大方ならず。今日御目見へ致させます。若旦那の奥方御入遊ばされたる時分は御腰元に成共差上。只何時迄も御憐愍下さるべしとの長口上。何れも至極に存られ。旦那のお盃をおらん殿へ進せられたらばと申上れば。竹五郎最前より此女の容色人に優れたるに見とれ給ひ。指圖なく共猷さうと思ふたに。幸ひかな是へ寄りやと招き給へば。流石御大名様の御側に使はれし程あつて。少しも辱らう氣色なく。大蠟燭のかまはゆき燭臺の前に。莞爾と笑ふて坐したる様。人間の類にあらず。只天人の白人になれるが如く。端手にして下卑ず。一座の人々目を離さず。少し酒宴の堅めも和し心になれど親父始め自慢で。勝手へ入らぬが氣詰り。是は太郎右亭主に内證云て。梅薫にはいわて娘に座敷を任せ。構はしやれぬが御馳走であらうと勘兵衛が氣をつけて囁かすれば。梅薫畏て兎角。どの道にも。旦那の御機嫌のよいやうに假令娘に疵がついても。若旦那の御意なれば。神以て苦しうない。何れもよいやうにと申もあへず勝手へ入れば。是てこそ吞めるは。おらんどの。憚ながら合をして下されぬか。イヤ爰へ來てなんぞ一節看はなりますまいかと。高野で女見し如く。彼方此方とおらん獨りを。引張あふぞ可笑かりき。固より竹五は器量よく男盛のさくら山庄左衛門が藝ぶりに。風俗のしやんとした所が似て。而も器量は庄左衛門に十倍増りの色男。女の好く風。おらんも宵より目を離さず。何ふぞ隙間も有ならば。我所思を通じましたい物じやかと。心を碎きてゐる内に。竹五郎もおらんにも近寄りて。口説て見たいと思ひより。人目を窺ひ折節は。目で所思をして見せ給へど。行届かず。詮方なさに醉にもてなし障子を明け。ぬれ襟に枕しておらんちと肩を捻つて給るまいかとの仰。渡りに船と嬉しく。尻輕立てお側へ參り。お春中へ〇〇〇〇をじつとじて。大方は目の色でも知れさうなものじやかと。小聲にて宣へば。お







見通し。思ふやうに以て参られしかば。女郎共何れも此大臣に懐み深く。粹自慢せし手代共。口利きの末社迄照され。片隅へ寄て我を折り通しける。然も遊びこせらず。寛濶なる事を好み。人の後にさがらぬ心掛。是極上の大臣と。廊中の待遇し。女郎共の賞翫限りなく。次第に募り出られ。彌生中比花の盛も。當地は氣が變らて面白からず。いざや鶯の尾の山櫻。散らぬ内に見に行かぬかと誘ふ水は淀の枝川に屋形舟を飾らせて。太夫の禿ばかり十二人作り若衆に仕立。誰忍ぶ關はなけれど。京橋の町端迄は暮に色を包みしが。鳴野といへる里の邊より四挺三味線引かけ。芳兵衛心は入江の海よと。梅やしぶのつれ歌にて大踊。目馴ぬ百姓は。鍬かたげ手放つも道理なり。難波に住みて梅の酸いも甘いも辨へたる諸人。氣をとられてあたはぬ欲の出來て。金さへあらば浮世の思出に。あの身に成て何事も夢の春なれや。飛蝶それも夢と繪着物の親仁共無用の無常を觀じける。入相近くなつて夕日紅の梢にもりて。麓に下れば日比御目掛られし。太鼓仲間より拵へて持せ來りし由にて。二間四方の乗物に屋根は金入の錦にて覆ひ。四方の角に四季の作り花を飾らせ。前には風爐釜中棚に入子鍋。并に魚鳥入し青目の組籠杉重にさまゝ菓子を入。堅横に棒五本通して。十人掛りの籠の者皆紺の單衣の膝節迄にして。水車の紋所一様に着飾り。是に召して此坂を靜に上られませと。つどく心をつけて申越れたと。針立支甫が取次。大臣御機嫌限りなく。是りや唐土玄宗皇帝の物好にて。大酒の揚句床へいらせらるゝに。醉興と名付て女中方に昇かせ給ふかごも斯やありけん。さらば我も其皇帝の學びせんと。十二人の中にて愛らしき禿四五人乗物の内にいられ。残る美少女には手をかけさせて。小歌さまゝの音曲にて五十丁の坂を上げれば。あたら櫻も此色に負て。今日更に見る人もなし。是を奢の第一なり。我より上見ぬ鶯の尾參詣。春宵一日に百兩の入費。惜や此儲け悪い世の中にと。重手代の藤七御歸りを待請。様々異見申せど。こんな面白こと。知らぬ先の異見なれ。最早傾國の蟲が物身に染みついて。前方なる物堅ひ異見など。高が色狂ひといふ事。此方からがよい事とは存せぬ。其よいことでないといふ事をして行は。能々面白い所があると心得てさりとては。詞費

しに重てからは御無用くと。中々耳にも聞入れず。明ても暮ても廓沙汰。借錢してさへ止まられぬは此道成るに。増て金銀有り餘る身の。殊さら血氣の盛りなれば御尤もくと取合せ云ふ人もあれど。藤七はたゞ此事に胸を痛めぬ。

第三 手代仲間威勢争

見るを見眞似に僕か小宿狂ひ

貴賤に限らず上に立人は。心の師となつて心に異見をして。常に身持を嗜み萬事を謹むべし。假令親より何萬貫目讓られても其子覺悟悪ければ。大分の金銀を皆人の物になしぬ。聞べき時の算用を捨をき。物見遊興船遊び年浪のけはしく打くるをもしらず。銀手形の詮義もなしに。手代が言分を體に。印判押せといへば夢の如くに前巾着あけて。親代より世に廣ふして置たる徳には。我印判一つで千貫目の事も埒が明くと何時とも是自慢。身の行ひ宜しからず。外より鑽をうたれ。ひそくといひ出すが最後。印判に替りはなけれど。押手の行跡變る故に。一錢の事も埒のあかぬはしいた事なり。惣じて其家の親方に備はりし人は其力計りの世渡りにはあらず。一人の志を以て家内の外。何十人が身を過る悦び。是に増したる差根なし。盆正月二度の勘定濟たる事なり共。油斷なく改めて。毎月晦日に算用あひを聞けば。物毎忙しき故に。手くらまぐらの銀廻しもならず。親方を倒し。請人に厄介かける手代も出來ぬ物ぞかし。扱も佐渡屋竹五郎は色の淵に沈み入て。暫時も我宿に尻もためず。うかくと通はるれば。家來の心も自らのふずに成て。未だ年季の小者上り迄紙入に金銀を絶やさず。迎も貳百兩や三百兩私。商にて儲けたればとて。我代の時の足りにもならずと。六軒町太左衛門橋筋。或は新地蜷川の磯せりの酒より肝が太くなつて。山州も可笑からずと。泊人呂州を呼出し。四五度も逢へばは芝居行の趣向をいひかけられ。引に引かれぬ首尾になつて。我逢



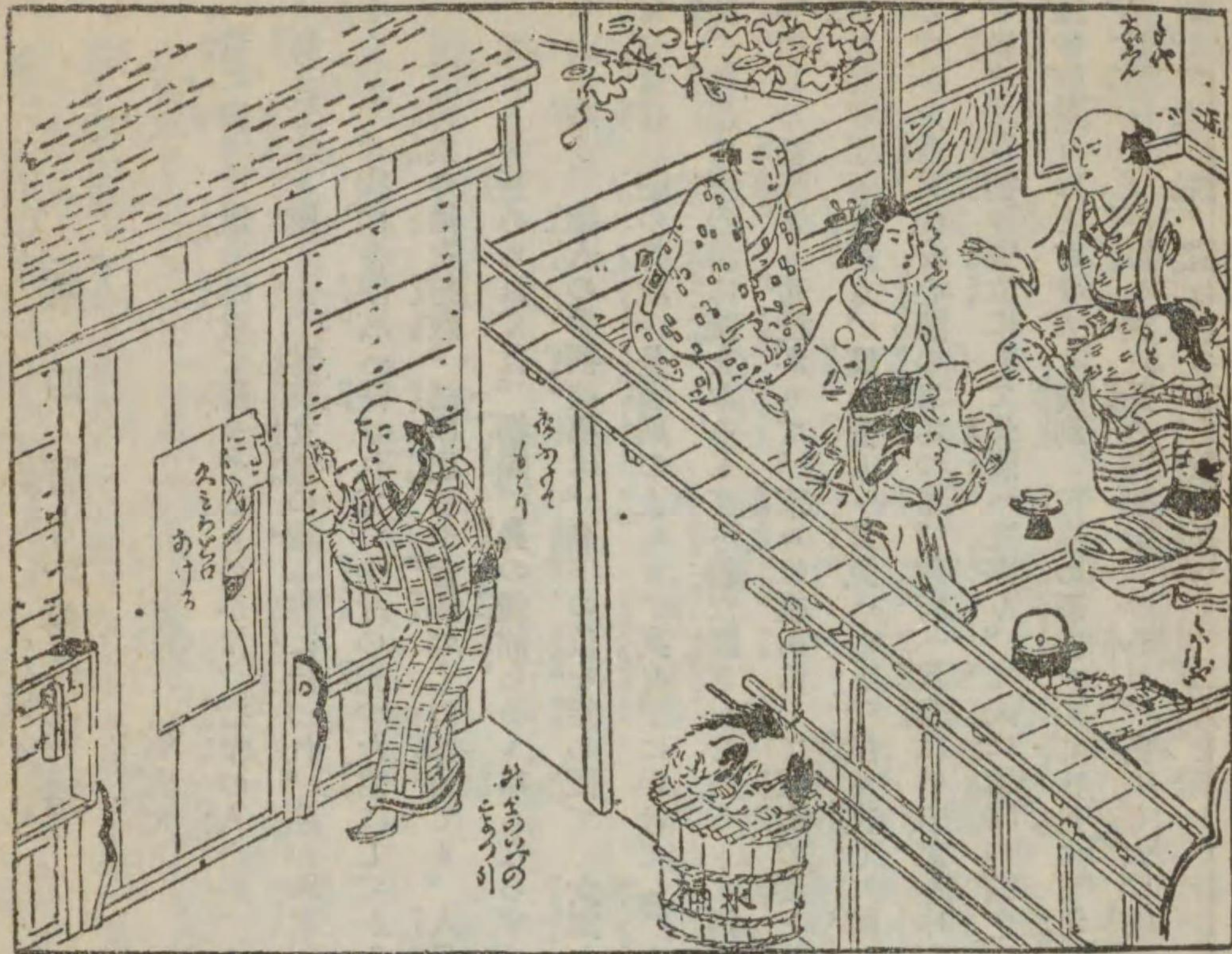
へる色ばかり連れて行かふ共いはれず是非に及ばず。山州小女童花車もお出なされといへば。外のお客ならおてうやおるいは進ぜますまいけれど。お前の格別の大事のお客なれば。何がさて進ぜませいで私も晝時分から参りまして。お影で五年振て嵐を見物致しませぬ。棧敷は此方から序でござります程に申て遣しませう。食ります物は。八兵衛が勝手覺へておりますれば何ぞ御酒のあがられさうな辨當をして進ませせんと。萬の事客からいはぬ先に。花車が出て受込み。西の二軒目三軒目を極めに遣はせば。大臣迷惑ながら。白人手前の盛に汚なびれた事もいはず。大様な顔して世話ながら。花車好い様にと申せば。心から可笑うもないに。輕薄な笑ひを作り。お心よいお客では有るぞ。始めから私とはお合口で。何事も噓次第とおつしやりましたお任せなされませ程。御如才が成ませぬと。泊州に取合ひひて勝手へ入れば泊人は我にのぼつて来てかふした事じやと。〇〇迄呑み込。はや手に入て。なんと明日芝居歸りに。又爰へといふも氣が替らひて可笑うござんせぬが。清水の久兵衛殿が。尾崎屋邊へ。とてももの事に此家残らず打こみに参りますまいかと我物はらねばとて。不遠慮につかくと好み出せば。山州共も我方へ連れて戻れば。親方の儲けに成る事は構はずして。是は氣が詰つて不斷同じ事。何うぞそんな所へ行て。一日氣を延したいに小ふじさん。こりや平さまを進めさんして。わしらも共にと。したりかゝつてはひ出せば。是も嫌とはいはれず。まんまと晝夜をくりつけられ。立歸りて明日は木綿布子の常の體にて。重手代藤七が機嫌を見て。今日は在所の兄弟共が。生玉の開帳拜みにのぼりまして。それから天王寺住吉へ参りて。今晚は谷町に一宿仕るよし。私に隙ならば案内仕りくれと申越しました。夕飯過には歸ります。旦那お尋ならばよきに御取合頼み入と。形もなき偽り申て隙を買ひ。常にゆく小宿へ走り来て。預け置し黒羽二重に似せ八丈の袷羽織打きて。嵐芝居を見物し。果ると色共を瓦崎屋方へ遣はし。其身はまた小宿へ来て。木綿物着替へ。旦那方へ立歸り住吉迄連れて拜ませました。在所には大きな山公事がござりまして。是が負に極まりますれば。兄弟共が難義仕る由。今宵は其相談が仕りたいと。止めまし

てござりますれど。内方に何なる御用の有も存せぬ。立歸りて御用もなくば。又参らふと手筈仕り歸りました。一寸宵の口御隙と申出せば。藤七少し苦顔して幼少から在所を離れて御家に住みて様子もしらぬ其方に。山公事などの談合仕掛たとて。何の足りに成りさうなものとは思はね共。相談力にかなせふと思ふての事成べし。其分てはあまり隙の入さうな物でもないに。初夜時分には必ず戻りやれといひ渡し。そこへ聞て又小宿にて衣裳着かへて行くなど。獨り狂言の如く。是ても遊びたいに如才はなし。一盃呑めば可笑く。二盃呑めば面白く。三盃呑めば現を抜かし。四盃目は儘よ。扱五盃めはわざくれといふ。無性氣になりて。初夜に歸るの手筈を忘れ。つゝ後夜の鐘を突いてからは。床入する間に八ツになるはしれた事。惣じての人爰て心を改むるものはなくて一寸切るも二寸きらるゝも同じ事。迎も濡た袖じやものと。百人が九十九人迄は極つて悪き方に力瘤の出るもの。此手代もうかくと夜を更かして。惣立にして一連に。太左衛門橋迄は此面白さ。明日首切らるゝも構はぬ氣なりしが。橋より皆々別れて我獨りに成て歸る時。始て主人の事を思ひ出し。是から恐味が付て。仇口も止めて旦那の町になれば。足音も靜に。門口に暫く立て内のさなりを聞き。晝より久三に隠し合せて置たる様子を聞けば。戸口に久三臥せりて左の手を唇でくくり。其元結を戸の隙合より。外へ出し置く約束。家内静まり。折節は軒の音も聞ゆる時分に。件の鬘外より引けば。久三が。左の手にこたへ。むくくとおきて用事かなゆる振にて。戸を明てやる賃。一夜が五六匁つゝ賈ふ事なり。久三も是を溜置かば。宿這入の時元手の足にも成べきに。彼奴も相應に飯焼に知音して。小宿せりに皆にする事。次第送りの好色。今此世界に生有て。たゞ居る者は稀なり。惣じて此津の奉公人は。仕着きる小女童丁稚迄。私銀の少しづゝ有事。餘國と違ひ。毎日常少の端商ひする故に小銀の少しづゝもたばさみ。幼少より儲ける品をしる故に。年も行かて又悪性にもなり易し。扱も手代勸兵衛は。幼少より此家に使はれ。今竹五郎の後見役をすすべき身なれ共。主人虎安の供はやしにのみ参りて諸藝一通りは何にても心得居れ共。算用に疎く。儲けるに愚なれば。勘





兵衛より後に來りし藤七に。萬事の支配を任せられ。今  
 後見迄仰付られ。佐渡屋の家内にては。藤七に上こそす  
 手代はなく。出入人まで用ひ格別なれば。勘兵衛つね  
 づね是を無念に思ひ。いかにもして藤七が仕落を見出  
 し。此家を追放し。我藤七が替りとなり。威を家内に  
 輝かさんと目を付け心を配れど我身に難の出來れど。  
 藤七には微塵越度なくして彌々以て隱居の心に叶ひ。  
 日々に威を増し自ら勘兵衛も藤七が威勢に恐れ。假  
 令心に合はぬ事をいふても。詞も返さぬ程に従ひしが。  
 古參の身として新參のものに従ふ事。如何にしても悔  
 しく。是からは若旦那に執入り讒を構へて。藤七を追  
 失ふより外はなしと思案を極め。竹五郎悪所通ひに付  
 添ひ。彌色を勧めて主人の心を奪ひける。是佞人の  
 隨一なり。ある時竹五郎勘兵衛を竊に召され。此比茨  
 木屋のあづまに深く懐みて。來る名月と菊の節供を受  
 合しが。例の物堅き藤七。此中は何が目に見へたか。  
 頻に異見して中々金銀など自由させず。みんつうに事  
 をかいて。差當り第一の難義。いつもと云ひながら。



どふぞ思案はあるまいかと。小聲にていはるれば。  
 私もそこらは油断ませず。最早お銀の入時分じやが  
 とは存じながら。只今迄段々御遣ひ銀貳百七十貫目入  
 帳の内見へませぬを。私と傍輩の太兵衛右など、  
 一つに心を合せ。買置の有物に勘定したて。藤七に一  
 杯喰せまして。七月前をやうくに済ましまして。ま  
 だそれから間もござりませぬば。どうも才覺の手が盡  
 きました。是からは御祝言あるやうに世間へ申なして。  
 呉服屋と紙屋を語らひ。絹布帛物奉書杉原延半紙を取  
 込。京へ上せて安く賣拂ひ。當分の御用を達する方便  
 をめぐらし。彼里と義理を繕ひ奉らんと申上れば。  
 さりとは汝は忠臣かな。随分頼むぞ才覺せよと。後前  
 しらずの無分別。此人に限らず。今時の若男。色に深  
 く染みぬれば。さまざまの悪心起り。終には身代破る  
 る芭蕉葉の。脆くも落る露の命を繋ぐ。謠うたひと成  
 て。果る人多し。慎むべきは此惑ひの一つと。吉田の  
 法師も物に徴りて書おかれぬ。



第四 帶とかぬ枕物語

昔忘れぬ美男大臣

昔に變つて歌や連歌で靡きやるものかは。近年の人心戀する人も格別に成て。兼言の兼の字はと問へば。飯櫃形鶯に萬と云字を書く由。詩經文選の讀み癖にはづれ。順が和名にも此事を載ず。陸言の六ツはめて壹兩貳歩と算用する中くより。須磨や明石へ流されて。物身の光つた君にしてからが。小宿の如才して置いては。何處て一つの儲事もならず。狩衣の袖を打敷。誘ひ出るや合點づくの妹背でも。人目の外に飼犬あり。寢入らぬ役の番太郎が拍子木。何者じやくと咎められては。塀際で鼻の邊甜らるゝ事もならず。是等の悲しき戀せんよりは。それに拵へ置いて艶なる姿の上を磨き。逢人の手柄次第に。高下の位を定め置いて。女郎といふもの如何成る人の心にも叶ふやうに持て参りて。自由自在に戀の抓取。是遊興の上も。其身手にかけて。商をせず。手代任せにして儲け悪いといふ譯をしらぬ和子様。此里の戀の姿に礎をおろして沖體だ騒ぎをせらるゝも道理ぞかし。されば其頃竹五大臣。茨木屋の吾妻と出かけ突出しの初姿より可愛がりて。未々は根引にして我宿の妻と眺めんと。恐ろしき誓紙取交して。互に心の底を打明け。君ならずばと女郎も。眞を盡し一日見へぬと千度も文して問ひ参らせ。戀し床しに誓文腐れ偽はなかりし。夏の初めつかた親父虎安心願の事あつて。伊勢へ代參に竹五郎を申付られ。親の命もだしがたく。十日計の旅の中途はぬ事を嘆き。我宿は晝立にして先廊へ立寄り。太夫に暫時の暇乞ひ。引舟遣手禿迄に。それくゝの置土産。吾妻方からも道中御慰みにとさまく。錢別。首途の酒盛すんで夜舟にて船に着し。それより大津を越て石部泊り。是迄太夫様から御見立にと。平蜘蛛の雲入禿の市彌をつけられ。名にも似ず物堅き石部で。やはらかな酒事して。太夫様への御書翰に。草津の姥が餅。梅の木の和申散迄諷へて。二人を朝とく歸され。追付御下向待奉ると立歸るに。禿の市彌大臣の御

乗物の見へる程は立止りて。お土産に鯨尺を買ふて来て下さんせといへば。雲八可笑く。鯨尺を土産に貰ふて何にすると問へば。太夫さまに延びさんした客さん達の鼻毛をさすと。是を大笑ひにして機嫌能く廊へ歸りぬ。其日川口屋方に變つた客がとれました。その優形なる男。年は廿四五にして形の美しき事。千早振神代も聞かず龍田川と。詠まれし人の著盛もやと思はるゝ程の器量。頭巾深く忍び笠を坐敷迄着て這入れ。坐につきて編笠を脱ぎ。先亭主夫婦に貰成る物をばつと下され。少し詞に訛ありて。皆を頼むどうぞ吾妻殿に御けんなりたいとの物こし最愛らしく。何下されずと斯んなお客にはまはりたい心で。其日茨木屋長左方へ堺のお客とお約束有を。亭主さまく。働らき首尾よく貰ひが成まして。追付はへ御入嬉しく。酒少しづゝ召あげられ。お慰に手づから三味線弾かれしその色の美しさ。いやや溜る物ではないと。少々事肝潰さぬ亭主が我を折り。暫座敷を勤るうちに。太夫様御出なされまして。例の床柱に背中をもたしかけられ。足を突出しての身振。古鉄買が見ても松の位のうづだかく。盃事済後。お床入有ても互に〇〇解かず。取しめて何を話さるゝ體もなく床より出られ。亭主を呼て。太夫殿を今日よりして當月中は何方へも約束無用と。連れられし鳩のかいの市助といふ素人末社に仰付られ。當月晦日迄廿日の間の揚錢を遣はさるれば。是はお堅い御事。是には及びませぬ御事と申ながら請取。其日はざつとして御歸り。又次の日も御出にて。先の如く假の枕は並べながら。分を立らるゝ事もなく歸られ。其あけの日はちと遅くお出あつて。酒にも少し品をつけ。折節は思はれたき身振などして。又床に入て上帯もありの儘しめやかに手などしめ。假にも卑しき詞なく。お袖の溜木さへ常ならず。吾妻も少し身を恥らひ。何事も我方よりはいひ出さず。お敵の仰らるゝ返答をのみ申して。打解悪き御仕形。今宵は我方から口説てあなたの思召を聞て見んと。空寝入して居たりしが。何時もの如く揺すり起して。明日又お目に掛らうとお歸りあるを引とめ。偽りにませよ。我御執心にて。お通ひなさるゝと。お詞には出されながら。逢ひまして今宵迄。終に誠の枕を交し給はぬ御心底の程。いかにしても心得がたし。是非に今夜は心の下紐打と



け。誠の契りを込めずしては歸しませぬと。袖に縫りて中々放さず戯れかゝれば。彼男心弱くも立歸り。又床に入て言ふ様。其方は佐渡屋の竹五郎と深い中にて。互に誓紙を取交し。二世迄の約束有るよし。それは勤のならひにて書れし誓紙か。又は眞實から竹五殿を。最愛う思はれて書て遣られしか。此誓紙の實不實が聞たいとあれば。是は變りし事をお尋ね誠か。偽かは竹五様と私と。互の心底に有事なれば。今お尋なされて。申てからが益のない事。それは何にも遊ばせ。先方様の此頃の御しなせ振。どうも讀が解ませぬ。わしが誓紙よりはこな様の様子が聞きたいといふ。成程。不審な筈なり。我は定まる妻も無ければ。其方の心いきを聞て其上で。急に請出し此世は扱置永き來世迄添ふ氣さしじやが。何と竹五殿より身共を大切に思ふといふ起請を書て給るまいかとあれば。吾妻打笑ひ御仁體に似合ぬそんな前々な事は。言はぬ者でござんす。今迄は奥深ふ存じまして。心がおかれましたに。今の御一言で御目にかゝる事も一向五月囃ふ成ましたと。手強く申放せば。こなた程の全盛の君が請出さるゝが嬉しいとて。昨今の我等に馴染の大匠を見替へやふと書ふとはいはれぬ筈なれど。竹五殿を大切に思ひて永く逢ひたいと思ふ心ざしから。書れた誓紙にはあらず。いつ迄も焼付て此里へ通はせ。其身の光りにせふ計に釣り寄せらるゝにて。底眞から大切に思はるゝにては微塵もなし。如何に勤の身て人を嵌める商賣なればとて。誠と思ふて身のくづ折るゝも厭はず通はるるを。ちよろまかさるゝは。近頃酷い心意氣。未來の程を思ひ遣りて。好加減にたらしめてやられよと。妾には似ぬ憎言。最早聞ては居られぬと。胸づくしをしかと取。これ男如何に卑き流れの身なればとて。實有る男を偽り。餘情計に釣り寄せると。押下ての言分竹五さまを大切に思ふ我心を。偽じやといひ手があるか。二世迄と契りし中に疵を付られ。抑や女の一分立べきや。誠でないといふ證據を出されぬうちは。千年萬年も爰を放さず。女の手業にも髮剃といふもの自然の役にも立まじきものにあらず。竹五さまへの言譯に。其方相手にして死なねばならぬと。外をも恥ず泣出せど。件の男騒がず。それが眞實ならば我様子を語るべし。竹五殿此頃御參宮なされしとは偽り。誠は其方の色

にほだされ。一日も宿にとてはおいせず通はせらるゝに依て。我等段々異見いたせど。聞入れ給はず。愈々繁く通はるゝ様子。親旦那虎安の耳に入て。此度江戸より遙か奥へ勘當分にて追下され。永く此津へ歸られぬ首尾ゆへ。我一命に替て親旦那の手前をさまゝ申直せど。重て色里へ通ふまいといふ一札をせば。許すべきとの事。竹五殿に此事をいひて。當分親旦那の氣休めなれば。一生此里へ。足を踏込むまいといふ一札をなされて進ぜられ。さて親旦那御機嫌直りし時分。又通はせられといろく申せど。其方が一日見へぬと命がないといふゆへ。通ふまいといふ一札はならぬとあるゆへ。是非なく今度勘當の身となり遠つ國へ下され給ふ。何と其方今われし通眞實から竹五殿が大切ならば。親旦那御機嫌のなほる迄は。假令五年七年でも。御爲なれば逢ふまひといふ心底は据はらぬか。其心さへ極まらば。我等今より夜に日について竹五殿の跡を追ひ。連れ歸りて色里へ向後通はれまいとあると取做し申て當分勘氣許さるゝ様に。取繕ふて見るべし。さるに依て其方の心底を聞かん爲に。此頃買手の大臣となつて心底を引見しは。極意を聞かん爲計じや。斯ふいふ我等は聞も及ばれん。竹五郎の後見役をする手代藤七といふものじやと。始終を語れば。吾妻は愈々けふとがり。何とやらん此方さんのいはんす事。一つとして合點行かず。しかし御手代の藤七殿とは逢ひました事はなければ。どのやうなお方やら。御顔は存じませぬと。皆御供して來る衆の咄しを聞くに。藤七殿とやらんは。四角四面な殿子と聞きましたに。方様は色白く。お公家様の如く立振舞柔かに。お年も竹五さまに餘り違はぬ體成に。後見役とは何ふてもこな様は。紛れものじやと受付ねば。是は尤も至極也。紅は園に植ても置れなきといふ假令には變りて。近比辱かしひは。内々噂にて聞もし給ひつらん。我むかしは其方に變らぬ勤の身。藤田平次郎といひし舞臺子成しが。親旦那不便をかけられ。今藤七と名を改め。竹五郎殿の後見役迄いひ付られ。萬事家内の支配はすれ共。昔の如く親旦那。今に我を愛し給ひ。手代といふ名は付ながら。身持は以前舞臺を踏し時に替らず。物云ひ身振も其儘との御意もだしがたく。首も可笑げなるを恥て。逢ひ初めし日より今に頭巾を離さぬも。その故と



語れば。吾妻是にて得心し。扱は我ゆゑぬし様は。勘當の身とならんしたか。御下りの日此里へも御入遊ばし。明了様にも仰られず。私に物思はせまいとて參宮と計り實らしう言わんしたが。それが永き別れの暇乞であつたかと。始て泣出し譯もなふ取亂し。今の思ひにすれば假令五年七年逢ひませぬとも。變らず盛んでお暮しなされますと聞いたらば。懐かしひといふ斗て此思ひはせまひもの。是藤七様。主様のお首尾のよう成る事ならば。五十年が百年なり共逢ひますまい程に。どうぞお詫言をして進んで下さんせ。頼みますと手を合して歎けば。其方さへ其心底が極り。假令御勘氣許され給ひてお歸りなされ。廊へござらふ共。此方の方から先四五年も。心強ふ逢ふまいと思召す心を。誓言立て聞かされなば。今是より直に消掛け。四五日か五六日の内には連れまして戻り。何の浪風も立たぬ様に。上首尾にして進ぜふが。愈々竹五殿が如何様に文していはれうが。わかされふが。我等指圖致すまでは。眞實逢はぬ氣か。中々日本の諸神をかけて。逢ひは致しますまいが。文の取遣りは親御様の御耳に立事てござんせぬ程に。文計は遣らして下さんせ。せめてそれなりと樂みにといへば。それ〱其氣じやに依て。極てからが心元ない。竹五殿は既に親の命を背き。遠國へ流され者のやうになりても。廣通ひを止らふといはれぬが。それ程に此方に深ふなづんでじや。それに懐かしひの戀しひのといふ文を遣らせられては。又元の空阿彌。其時は今の勘當よりは。中々嚴しひ事てござらふ。爰は此方が竹五殿を我等思ふ同前に大切に思召さば。ちと胸愆な振をして。恨みらるゝを爲しやと思ふて下されねば。若旦那の爲にならぬ。そふ心得て此節は文が參らふと。御返事もなされな。我等吞込居る上は末は芽出度ふ御夫婦に致さふ。爰は何をしても方便でござると。あぢよく云ひまはせば。如何にも〱此上は。免角に其方様を頼みあげます。どふなり共よいやうにと。跡け涙で床も浮く斗成を。さまざま諫めて歸り品に。亭主を呼出し。彌々此中先金を渡して極めた通り。太夫事當月中は。假令我等來ぬ日じやとて。外へ貰ひも借しもせぬぞ。と主人が口迄堅めて立歸る。太夫も門迄送り出て。愈々彼の御方の事。首尾能お歸り遊ばすやうに。吳々頼みあげますと。涙と共に

に頼み。何がさて申合せし通の。愈々御心に堅まりし上は。直に今宵是から打立。一日も早く伴ひ歸るべし。歸宅以後此里へ參られても。必ず〱逢はるゝ事は拟置。文の取遣も堅ふ。無用にせらるべしと。詞を堅めて歸りぬ。揚屋の亭主下男迄。斯る様子はしらず。まだお馴染もないに太夫様の。今宵一夜の別をさへ惜ませ給ひ。御涙姿はお敵様より此方から大分のなつみやうと存る。いづれ物柔かな。女中を見るやうな。御生れ付の大臣。あの御器量で金銀に事缺き給はぬ御暮しは。太夫様方の命取りといふもの。道頓堀の野郎にも。あれ程の御器量は有まいといへば。太夫は心の中に其筈の事。昔が昔じやものと人にはいはず。別れの涙分に引舟にも是を語らず。たゞ竹五さまのお首尾のよいやうにと。愛染様へ心での立願僞でない心中。人こそ知らねほんに愛しい心意氣ではあるぞやれ。

第五 一ト思案が金子三兩

揚屋の酒むかひ末社宮雀口

神風や伊勢より御下向お芽出度と。手相の女郎其外日頃お目掛られし末社共。悦び勇んで門迄迎ひに罷出。大臣を中に包み。扇風方の大座敷へ入れ奉り。早速太夫様へ人ばしを掛けるに。川口屋に當月中は留舟にて。あれに礎をおろされ。其癖格氣深ひ客めで。いかな〱貸しもせぬとぬかしますと申せば。大臣少し不機嫌にて勤の身の約束有るは道理なれど。下向と聞なばちよと成共來さうなものじや。日比と違ひてちときこへぬではないかとあれば。何れも詞を揃へて。旦那に少し氣をましたしまして。後程淋しひ時分。によつとござらうと云事てがなござりませふ。外の女郎様方は存せず。彼方においてはお前斗には。微塵御如才のない所。われ〱慥に請合と取做しを申せば。いづれさふはない筈じやと。是にて御機嫌なをらせられ。扱々日和は續く。道中賑ひ餘程面白ふあつたとあれば。おぐらもろこしからさき高間など。一つ所に煙管を喫へて。わしらもお伊勢様へ參る身になりたや。明星が茶屋相の山など



の拙し聞てさへ。氣が勇むやうな。あはれ夢になりと見たやとの願ひ。幸ひ酒迎ひがてら。此家に伊勢の様子を寫し。参りたがらるゝ女中に見せましてくれ。お初尾は是からお取替申ぞと。兩の袂より壹歩四五出し給へば。未社を始め家内の上下勇み悦び。先旦那が我等が爲の大じんぐう。未社はわれ々さらば宮廻りをなされませと。砂の善六黒塗の紙笈入を烏帽子に着て。先是がよい客を釣らせらるゝ西の宮の夷殿。あなたが身請大明神。根引の松を植さつしやれ。是成が茶臼の宮。本地は身上り并。隙な女郎様方は。格子に曝され給はぬやうに。十二燈をあげられませと。口を叩けば太夫つきなされませふは。〇〇〇な味のよい所を。御案内申さふと云者もあり。料理人の六兵衛上下を着て碁石を籠に入。揚屋方の座敷ふさげの砂に成客を蒔出す。お白石を蒔しやりませといへば。亭主出て。是は旦那よりは我等がお初尾をあげふと錢を投げば。素ひ客のとれるやうに。白石を蒔ませふといへば。内方の帳の汚れるやうに黒石を蒔やと。たねが差出るも可笑かりき。野羅都は下袴着して。御參宮お芽出度ふござりますと畏る。下男の入助は裸身に四手切かけ四つ道になりて神馬買はしやりませといへば。太鼓打たる豆板取らさふと笑へば。いかにも打ませふと。ろてんを出して。矢庭に頭を叩けば。汚ひ事をする奴と腹をたてる。此方太鼓でないか打て見せたにまめ板いたさふと。理屈に詰られ許せといふて匿れぬ。お土産に笙の笛貝杓子。若和布を召しませぬか。納戸飯の口早に参られる。塗箸はいりませぬかと云ふもあり。禿共は投頭巾着て。びんざさら持て見かけてきたにイヨエと袖に取付。支甫は高間が腰を抱へて。高間の腹に子が止まりましとと嫌がる事を申せば。九奴女郎は立並びて。連弾の三味に乗せて。浅猿しや心ひとつと相の山筋を唄へば。背蟲の彦助か振袖着ててんちうじやと踊る。遣手のすぎは味噌漉抱へて。眉目のよい女郎衆に遣らしやるより。わしらがやうな色のない者に下さるゝが慈悲じやといへば。それは日比太夫様方に辛く當り。客さま達の虚言つかるゝを改め。觀面に恥置す討じやと思へど。大勢の跡からいふたは儘に佐渡島町の堺屋の男めじやと。腹を立てるも一興也。さる小才覺なる未社屏風をひきまはし。夜着ふとんをき

て。出雲といふ鹿戀女郎〇〇〇。天の岩戸〇〇〇〇なされて。神樂のすゞぐちをまいらせられといへば。是は指當りよい仕出しと。京の太鼓打が勇てはいれば。ヲツト山城の國素人未社。安繪屋の佐次兵衛殿。一番あげられましたと。大笑ひになつて。是から太神樂と六挺三味線弾かけ。さまゝの藝盡し。正身の太神も岩戸を開き。是は面白の遊やと。現を抜かし給ふべし。太夫様のお越なさるゝ間旦那を淋しからしますなど。未社手だれ共が。色々の事を致して時を移せど。それに御入かとの付届の御文さへ参らぬ。是は餘り成る持たせ振と。影へよつて誇りあふ一座の女中竹五の心を汲んで。取まはして諫めらるれど。花なき里の心地して。太夫が今に音づれない事いかにしても。合點行かずと。憂々共し給はぬ所へ。大坂屋の江口の君立寄せ給ひ。竹五さま御下向かエ。古市とやらで珍しい酒事してござんしよ。今日は川口屋へ参りますが。御越と聞きましたゆへ。お伊勢様のお盃を戴かうと思ふて。寄ましたとあれば。お心にかけれられ忝じけない。さて川口屋へお出とは若し吾妻と御一座ではござらぬか。地の客か田舎者か。ちと聞きたい事がござるとあれば。いやゝ吾妻さまと一座ではござんせぬ。伊丹の明樽様といふて。馴染のお客で丸屋の小ふち様。車屋の奥州様。扱は泉屋のみなぎり様か。よいら様などいつも出合ますが。今日も定めし。其お手合でござんしよが。吾妻さまの川口屋といふ事をお聞なされて。はや急心か其やうに思ふて呉れるお敵さまを欲しい事じやと。色をつけての挨拶。そんな事は耳にも入らず。外に居るなどを急ぐなどいふ。初心な事ではござらぬが。先から皆の者が是に居るといふ事を。度々申て遣るさふなに。下向したかと一筆の届さへござらぬ。近比口廣ひ事ながら。我等程の馴染有客は又外に。ま一人もないがしれて有る事。それに斯ふした仕做せ振。白癩呑込まぬ事てござれば。吾妻が今日の客は何の様な者ぞ。川口屋へござらば竊に聞て下されとあれば。夫はあんまりかた様の思ひ過ごしてござんしよ。透を見てござらふとの心ゆへ。音信がない物でござりませふ。是吾妻さまに思ひくづおるゝ男めと。頭をひしやりぼんと叩いて。さらばやとお歸りを。支甫勝手までついて参り。今日の太夫様の御仕形は。八



まん出来ませぬ。旦那の腹立が是計はお道理。うろたへな太夫様でないが。なんとして今日は狂言が出来ませぬぞ。まだいきつかしやる時分ではなし。合點が参りませぬ。彼方へお越なされたらば。ちよとお逢なされまして。爰の様子を吹込で進めて下されませと。小聲になつて申せば。成程くんと點頭してお歸り。さあ是からが酒事じやと拍子を合せて暫時呑む所へ。江口様から支那方への御書簡。是へと大臣取て讀ませらるゝに。仰の通り吾妻様へ慥に申通じ参らせ候へば。竹五様事ならば云ても呉れなと。愛想もなき御事。我身さへ餘程むつとする程にて候。お客は濡のきく色男のよし。たまが話にて聞まし候と讀も果す。文引裂て面色變り。さりとて心底見損ない。今迄賣女めに積られたが憎い。今日より女郎を替て面打に川口屋で呼ばふか。此無念さ汝等一代の智慧を出して。吾妻に生て居られぬ程の恥を與へる様な。模樣を工夫仕れ。よい思案を出すものには是を取らすぞと。金子三兩前に置き。齒を喰しめてけきりある。何れも吸物吸いもあへず。一思案が五十八匁小判にして百七十四匁が分別。狂言作りの三八より上給分じやと皆々文珠へ立願かけ。ありませぬ智慧を動かし思ひくゝに工夫する。中にも十郎次鼻脂を出して。かふもござらふか。先茨木屋の格子の先に只今札を立ませふと申出せば。して其札とは。されば其札の書付が彈りながら智恵でござりますといへば。大臣焦ちてさあ／＼子細を告げずに早く申せとあれば。札の表に吾妻からけて小便じやと筆太に書たらば。大事の大夫か薬一把がものに成て。明日から道中がなりますまいといへば。汝はそんな事外申まい。我等が此練れた箱入の思案を聞て手本にせよと。支那が進み出で申せば。箱入の思案なら臭からふと打込む。いかないかなそんなしやらくさい思案でない。なんのねばい事はない。我々どや／＼と川口屋へ押込み吾妻を捕へて。日本無類の不心中もの。大事の旦那をつかふたなど。糞ふてゐる衣裳を剥て丸裸にして脚布迄とつて胴を打たせて参らふといへば。何れも是は上分別第一氣味のよい事じや。是にお極めなされませと詞を揃へて申せば。大臣つく／＼聞し召して。それは心地もよからふが。さふした時には先の買手の大臣が中々見ては居られぬ場。堪忍ならぬと聞かぬ時に

はどふじやとあれば。それ迄は氣がつきませぬと申す。さりとてはしまらぬ飛上り共じやと。竹五も我を折り給ふ時。すこし年いきの女郎申さるゝは。各々様は吾妻さまを何しにお憎しみなされますぞ。竹五さまの文をござぬと御腹立られますも。吾妻様の今日の客の爰へお貸しなされぬも。皆大夫様を大事に思召すからなれば。吾妻様の科ではなし。それ程外をお急きなざるゝお心あらば。根引にして庭前の花にして眺め給へば。先様の何程に思召ても叶はぬ事。さあればお前は十分と申者でござりますとの了簡。尤々しかし我事いひ出して呉れなと。江口への噂は何と憎うはござらぬかとあれば。それも其日の客様格氣深いと見ますれば。お敵に膏を乗せて。喜ばす一手に。私等も云て来た事でござんすれば。太夫様にひとつも科はござんせぬと。道理を詰ていはるれば。大臣至極に思召て。然らば急に引かき今日の客奴に鼻あかせ。吾妻が心底をふるはせ。若しも心底に曇りあらば。思ふやうにさいなむべし。支那と亭主は茨木屋へゆきて。身請の相談極むべしと。兩人を召され仰付らるゝ所へ。砂の蓋六汗を流して他所より歸り。珍らしき事を聞て参りました。餘り不思議さに先程から川口屋へ参り。禿市彌に逢ひまして色々すかし。揚詰のお客の名を聞まして。けふも明日も醒め果てゝ歸りました。皆の衆も名を聞かれたら恐らく横手を打やるであらうといへば。大臣聞かれて早う聞て手が打たい。誰じやとあれば。あづま様を此頃しめつけて置かせらるゝ大臣は御家老の藤七殿でござりますと申もあへぬに。座中一度に手を打。是は我がへげるはと興をさせば。大臣愈々腹立あり。さあさあ愈々燃るは此頃手代の藤七め。頻に異見をするゆへ親父の悪性に合せては。我等が遊びは譏な事じやが。出所がちいさい所なれば。狭き心からせわ／＼しういふと思ひ。勘兵衛とは誇つてゐたが。扱は己が下地吾妻とくさりあふて居るゆへに。親から譲りの金銀さへ自由をさせず。自分の榮耀を致す事。刻みても飽かぬ奴。此上は猶以て吾妻を請出し。藤七めが鼻の先で。さいなまねば腹が癒ぬと。大方ならぬ腹立にて酒事も可笑からず。是から鹽町の下屋敷へ行きて彌身請の催し。勘兵衛太郎右門を招き寄せられ段々を語り。勘忍ならぬ所なれば。假令ば身を賣て成共金



銀を才覚し。吾妻を請て藤七めが目の前で。存分にせねばどふも蟲が静まらぬ。さるによつて玄甫を身請の相談に。親方所へ遣はしたれば。返事次第に引ぬく合點何時もの通火急に金の才覚せよと。切齒をなして仰らるれば。勘兵衛始終を承り。是は我の折れた穿鑿。今思へば御家の御爲を存じ御異見申たるにてはなく。己が戀の障となるゆへ。異見に擬らへ且那をせきしに紛れなし。さりとは人の皮を被りし犬より劣りの藤七め。其儘置く所てなければ。此段々を親且那へ申上げ。藤七さへ追拂へば。御藏の金は何萬兩でも思召す儘なれば。吾妻を請ふと唐土をつかまふと。此お心の儘と申すもの。兎角は急に此事を御隠居へ仰上られ然るべしと申上る。それは我等も合點なれ共。さふした時には藤七めも又身共が今迄の悪性狂ひのだんく。金銀の失し高。残らずいふて出べし。然る時には其方も汝も難義。どのやうにこけふもしらず。面々脚に疵あれば速にはいひ難し。最前もいふ通り。吾妻を請出し自由にせば。ひとり焦いて己と自滅疑ひなし。たゞ餘の山へ掛らふより身請金の思案をせよとあれば。勘兵衛承りいかさま御意の通り此方共の身持からが御前へは出し悪し。扱金銀の才覚はどうも手がつき思案にも及び難し。爰に一つの存じ付は。御家第一の寶物金の鶏を。竊に出し。是を金にするより外はと申せば。それく其雞。時の用には鼻を缺けじや。どふぞ夫を取出す智恵はとあれば。それは拙者に任さるべしと。竊に相談合せ。ざつと身請は済んだ物じやと。はや落付て。さあ是からが酒事じやと。廓を此處に移して。扱も命はの投節にあはせて三味線弾くや鹽町の屋敷にて。夜明迄の大酒。誠の鳥も唄ひて。水難水に朝日を寫し。早朝から斯んなもの食るは七種の心地がして。正月めいてわさくすると。末社口を申す。それは福わかし是は貧乏の業わかしと。心あるお出入の者は嘆き侍りぬ。

風流曲三味線 四之巻終

風流曲三味線 五之巻

第一 時の用に立つ金の雞

獨寢の床に氣をやむ娘

御家第一の重寶金の雞と申は。人王四十五代聖武天皇。南都大佛殿を御建立ありて。盧舎那佛の金銅の像を作らせ給ひし時。陸奥國小田といふ所より始て金を掘出し此像像をぬり奉る。其餘りの金を以て此雞の形を鑄させ。すべらぎの御代榮へんと。東なる。陸奥山に黄金花咲くと。大伴の家持詠て奉りし。歌の褒美として下し給はりし雞。子細ありて佐渡屋の先祖に傳はり。代々是を秘藏して。寶藏の三階の七重の箱の中に入置。元朝龜干年中に二度の外出る事なく。則ち手代勘兵衛例年其節出し入して。有所を知るゆへ相鍵を拵へ置。藤七他行の夜を覗ひ盗出さんと心掛しに。幸ひ今夜藤七は據なき用事にて。天満迄出ける間に。難なく藏へ忍び入。外家共は其儘にして元のごとく錠をおろし。下一重の眞塗に。いつかけしたる箱一つ斗に入。風呂敷にてよく包。三階を靜かに下り所々の錠前を音せぬ様に竊におろし。女關迄持て出。是から鹽町へ持ゆかれ。あら嬉しやと汗などふいてゐる所へ。花咲梅黨久しく御見舞申さぬとて支關へ仕掛。何と勘兵衛此間は御言を得ぬと四方山の物語耳にも入ず。早ういなれかしの待遇。扱は又彼奴か。平常の如く若旦那をそよのはかし。廓へ飛手管故己が心の急くまゝにそこくの不遇ひ憎さも憎し。爰は態と寛りと居て。遊びの邪間を仕らふと。梅黨はろくに居て面白からぬ長咄を仕かけ。扱頃日身共も太儀をいたして。藥箱を拵てござる。ちと一覽して下されと。供の者を呼び寄せ。挾箱より藥箱を出し。風呂敷解て一重一重見せければ。勘兵衛心は急ぎに急ぎぬれ共。口出して歸れよといふ事も流石いはれず。中々好いお物好てござ



ります。御太儀でも武士の具足と同前なれば。是程になされいでならぬ事。是ては何處へお出しなされても。辱しならぬ御拵といへば。御稱美に預り満足に存する。若旦那御宿にごさらば序に御目にかけてたいといへば。今晚は十種香の會に参られ。留主でござれば明日の事になされませと。たゞ早く歸したがる。それ此方合點で長尻する事。心可笑く供の者を呼付。今夜は是に暫く居る程に。汝は宿へ歸つて後程迎ひに参れと。家來角助を歸し。打寛ぎ十種香の御會ならば。追付若旦那にも御歸りて有べし。此の間は急病人多く。晝夜共に氣を遣ひ。ちと精なども盡たやうにごされば鬱散がてら寛りと語りませふと。藥箱を仕舞ひ風呂敷に包み傍らになをし。何と此比世間には何が流行ますぞといへば。嵐と半四郎がいかふ流行ますと答ふる。拙者は若ひ時から芝居嫌ひで。十年にも二十年にも見た事がこの初發のやうにござる。大かた風薬を用ひて大驗を得ますなどと。物堅き咄し一ツも胸があはどこそ。扇を使ふて欠伸をくろめ。さまん窮屈がる身振。可笑さを心に納めて。隨分子細をこねまはす所へ。梅黨家來の角助周章しく参りて。順慶町のおらん殿が。御血の道とやらで御目が眩ますと申で。急に呼びましに参りましたといへば。是は参らざる成まい。承れば若旦那には娘が方へ不通に御越もないげな。最初此方の御取持じや。聞へませぬぞ。折節は御出なさるやうに。取りあはせをいふて遣はされ。女でござれば斯な事なくいゝ存じて。目眩かな参つた物でござらふ。旦那へもお歸りなされたら。此通り心得ていふて下されと。とつゝとして出られしが。誠に忘れた。只今の藥箱を下されと勘兵衛に申て取。隨分早う順慶町へ向て参れと。道より角助を歸さるれば。角助佐渡屋へ立歸り。勘兵衛様に旦那の藥箱を遣はされて下されませと申せば。勘兵衛は梅黨長居に退屈して近年にない氣をつめた。ちと休息して鹽町へ行べしと。喜齋と云ふ小坊主に腰を打たせて居たりしが。是を聞てこりや喜齋。其處に有る風呂敷に包んだ藥箱を。梅黨さんの使に渡せといへば。喜齋腰を打たして。頓て件の勘兵衛が盗出せし金雞の箱の風呂敷包を

渡す。角助も藥箱と心得て頓て請取順慶町へ急ぎぬ。勘兵衛は鹽町へ行かんと身拵する所へ。藤七天満より戻り。是勘兵衛。其方は御隠居へ行て。明日天満に座敷能がござりますが。京の名人共が参りて仕るよし。御見物なされませふば。今晚から御窮屈にない場所を極めに遣はしませふと申てござれといへば。今晚は身共もちと用事ござつて只今出ますがといふ。つい御隠居迄行かると事として隙の入事ではござらぬ。御出なされふと有るならば返事を仰聞され。御出なされまいと有る事ならば返事承はるに及ばねば直に自分の用事を調へに。何方へ成共行かれよといふに否とはいはれず。彼の風呂敷包を持て出んと躊躇て居れ共。藤七玄關を離れねば。是非に及ばず咄きながら隠居へゆく。藤七跡にて玄關を見まはし風呂敷を見付。是は見馴ぬ物ありと。風呂敷を解て見れば藥箱也。丁稚を呼て背に誰ぞ見へたかと問へば。梅黨様の御出といふ。扱は梅黨の置て行かれし物ならん。醫者は何時しらずに病用あれば。他所に藥箱を指置るゝ事。家業の心掛に怠りあるに似たり。人の命を預り療治をせらるゝ人には不沙汰千萬。久三此箱を梅黨方へ持て行き。慥に渡して念じや程に。請取を取つて來いといひつけて遣はし。扱旦那は又どれぞ。御越なされたか。勘兵衛が今の顔付では。てつきり旦那はお留守であらふ。近比嘆かはしひ事じや。身共がお爲を存じて御異見を申上れば。勘兵衛は可笑さふに此藤七に負まいと。臂を張て面白い顔を一日の中には五七度もして見する。今日はいはうか。明日はいはうかと思へ共。勘兵衛は古參の者なれば。我にいはれて黙つては居ぬ管也。然る時には互に言分と成言分になれば。彼もお家に勤める事叶はぬ。勿論身共も。勤て居られぬ首尾になつては。私の意地をいひて事を缺かしますといふ者じやと。いつからやら彼へは用捨をして物をいへば。彌々以て勝に乗可愛やな。越の國の廉頗蘭相如が。古事を知らぬからじや。威勢を争ふはまそつと身共等より智慧の有るよい衆が古來からした事じやが。廉頗がやうに。主人のお爲にならぬといふ所に。眼をつけて。却て我非を悔て蘭相如に詫たとある。兎角眼が明かぬからじや。皆の者風呂の下の火はよう消えたな。勘兵衛は又旦那殿と一所に夜明てなくば歸るまい。若旦那の



御床はとつて有か。其帳を持って来い。ちと當つて見る事があると。その盤もつて奥へ入れば。丁稚小者は息をつき。延などする所へ。表を叩くを誰ぞと明くれば。勘兵衛隠居より立歸り。藤七はもう寝たか。こちらは何も内證しらぬかと思ふて。子細らしひ顔をして。澤山さふに此勘兵衛を使ひおるが。笑止や今に化が顯はれふと玄關へ上り。うろ／＼と尋ねて。喜齋爰に風呂敷包の物があらふが見なんだか。それは藤七殿が先程見てござりましたといへば。南無三寶。さふして何處に置たぞしらぬか。さあ／＼大事が出来た。旦那殿はと問へば。晝から見へさしやりませぬといふ。然らばおれは鹽町へ用があつてゆく程に。若旦那の御歸りあらば。あれへお越なされませと。勘兵衛が申たと必ず申せ。藤七が尋ねたら。明日は御隠居にもござるまいとの事じやといへと。そく／＼として鹽町へ駈出しぬ。擬も竹五郎忍び妻順慶町のおらんは。何日の程よりか竹五吾妻に心を移され。晝夜廓通ひに隙なく。遂に音信をだに仕給はねば。是皆傾城めが我をせくゆへと。焔立つ胸の炎に提の水も湯と湧きかへり。君と吾妻が中を裂んと。心を碎きさま／＼思慮を回せし。思ひの積りけるにや。此比は心地勝れず。目眩などする由にて枕一つの闇の中に取籠つて打臥ぬ。かく惱と告し故。梅薫は道より下人に薬箱を取にかへし子ゆへの闇に挑灯持はなく。うと／＼としてやうやうおらん方へ来り。心元ないなんとかと尋ねるれば。暮方より少し目眩心に有しゆへ。女共が氣遣がりて人かな進ぜしものならん。只今は快く不斷に變らず氣も慥に成たるよし。梅薫悦び一段／＼。先脈を見るべしと暫く考。兎角鬱症と見ゆれば薬を吞まず共。明日より心儘に何方へも出て。氣を養ひ。何事も苦にせぬが肝要也。榮耀な男は竹五郎殿に限らず。諸方を歩行て氣の定まらぬものながら。藤七が此比は強く異見をするよし。浮氣事さへ止まば獨りと爰へ来らるゝて有べし。左様の事も心に掛けず。兎角氣を病ぬやうにせらるべし。脉體よければ別條はあるまじと。養生の品をいひ聞さるゝ所へ。角助薬箱を取て參つたと指置ば。今宵は爰に此薬箱を留置。若も夜中に又目眩心あらば。此下の重に安神散を入置たり。それを白湯にて用ひられよ。定めし變はあるまじ。明朝やうすを聞べしと。

角助を連れ歸らるれば。おらんは跡にて又目眩のこぬやうに。用心に安神散を吞み置べしと。風呂敷を解き眞塗箱を開けば薬種にはあらで。金の雞に。すべらぎの歌書し色紙一枚添てあり。是は内々聞及し佐渡屋の家の寶物。年久敷勤めても下々は見見る事叶はず。年に二度より出ぬよし。それが何として此所へ紛れ来るぞと。大方ならず肝を潰し。色々思案をして見る程合點ゆかねば。まづ様子も有べきに。詮儀の有迄沙汰をすなと。お物師腰元などが口を堅め。長持の中に入置御母屋のさなりを聞居たり。斯て勘兵衛鹽町へゆきて。屋守の九右衛門に誰も見へぬかと問へば。若旦那様の暮方から玄甫殿や其外二三人連れてござつてござるといふを。聞もあへず座敷へ通り。さあ／＼ひよんな事が出来ました。金雞を鹽梅やう盗出しました所へ。梅薫が參りて。如何に醫者が流行らいて行所がないとて。人の心もしらず可笑しうもない長咄を致して歸りましたれば。藤七が戻つて私を御隠居様へ使に遣はしました。其跡で金雞を藤七が取つて置たと喜齋が申します。まあ是はなんと仕りましよと。色を違へて申せば竹五郎給ひて。はて夫は苦しうない。重て藤七何とぞいは。梅薫が兼て拜見の望黙止難く。一目見せよと勘兵衛にいひ付置しが。金雞が出せしものならん。大事の物を早速藏入おかぬが越度じや。以來をたしなめて。それはざつと濟む事じやが。金雞がなければ。當分金の調はぬが。迷惑じやとあれば。勘兵衛是にて安堵し。お前のさふ仰わかれて下されますならば。金雞がなく共金子の五六百兩は調る思案を仕出しました。是は分別袋が廣ひ事じやな。して其思案は。されば是にはちと役人が入りますが。窄人の雁野外記左衛門は參られませぬか。此人を此度の分別には加へねばなりませぬと申す。それこそ願ひの外記左衛門じや。それ谷町へ行て呼んで来いと人を走らせ。暫時が間に外記左衛門飛て參れば。勘兵衛申は。旦那此度吾妻を請らるゝに付て。金子が急に入用なれ共。兼て聞及びの通。藤七といふ金銀支配の手代が。心入あしき者にて。旦那若いとて自由にさせず。今迄我々御爲を存じて。才覺をしてあげませしが。最早才覺の手もきれ。どふも行詰つた詮儀ゆへ。我等見事な智慧を出して。藤七手前から金子の五六百兩も出さす巧を仕り



しが。此義には貴殿を頼みませねばならぬ事あり。頼まれて下されふやといへば。是は今めかしい。旦那の御用ならば命でも指上る所存と申せば。近比頼母しう存る。然らば旦那に斯の如くの一札を遊ばせと。下書書て指出せば。竹五郎是を取て見給ふに

一札之事

一貴殿留守之内。御内方と密通仕候段御見届被成。即時に重斬に可被成候處を。今一度親共へ今生の暇乞仕度候間。少之内私一命を御預け被下候へと申し候御断。御聞届被下。暫時御赦し。忝存候密夫に紛無之上は。追付立歸如何様共御存分に罷成可申候。爲念如件

竹 五 郎

雁野外記左衛門殿

竹五郎讀終つて。して是を書てどふする事ぞとあれば。されば此一札を外記左衛門殿に持たせて。玄關へ仕掛させ。六ヶ敷うねだらせ。藤七へは何と旦那の御命を救ふ事ならば。假令十萬兩出たとて惜からぬ事。此津一番の長者共いわれ給ふ御方の。五百兩や千兩て此外聞買れふならば安い物でござる。後見仕ながらこんな不義をさせてと世間でござる。まざまま申さば。こなた迄の名が出るでは有まいか。此勘兵衛は金銀づくて首尾よく内證で済まふ事なら。一萬兩でも出して沙汰なしに仕度ものと存ると。我ら相槌を打つたらば藤七が金で扱ふは見へた事。さあ金で扱ふ段になると。随分此方に六ヶ敷ういかせて高をあげる合點じやといへば。飛あがり共。是は箔のついた上思案といふ物。流石は大家の御手代程あつて天晴の御分別と感じいれれば。なんとあぢやあらふが。此事首尾仕ると百兩について十兩の分一。外記左衛門殿へ早速進ずる事じや。一兩でも高の上るやうにわだらしやれ。然る時は旦那のお爲。又は貴殿のお爲でもござるといへば。欲と悪とに目の見へぬ率人勇をなして。こんな非道な事をねだるが我ら得物でござると竹五に一札

かゝりませ。逆の事に御判があらば据へさせましたいものじや。それでは愈一札がしつかりとしてよいといへば。幸々こんな思案のあらふ事はしらず。金雞を盗出して質物に入るとも所持の證人判が入ふと思ふて懐中して來たと印判出して押し給へば。何れも聲を揃へて是は此事首尾仕るべき瑞相御印判懐中目出度し。是から外記左衛門の率人姿。申迄はない味をやられよといへば。そこらは昔二合半もこかして來た男と。紙子に朱鞘の大小。鼻の下に少し作り鬚して。是では如何な藤七もゆすりを喰ふでござりましたよ。明日は不成就日。明後日の朝飯過に仕掛まするでござらふと。勘兵衛と謀し合せて歸りける。是は世間に流行る筒持せといふ手とは裏腹なれば。持せ筒と云へしと。虎落仲間共申しあへり。

第二筒持せの裏腹

ないから起つてもがり分別

人間相應に智慧はあれ共。上智と邪智との差別あり。古人も狡黠といへるは悪賢き智を差していへり。今時斯様の智あるものを巧者と名付て。人の恐がる智慧ぞかし。己が身に係らぬ事にも分別を出して。公事裁許口論或は女夫いさかいの事迄も扱ひにかゝり。言葉ならぶるを人の賢きは是と思ひ。物にかゝるを面白く。一筆書くを幸に。無用の目安に氣を盡し。天理を背き形も悪事をたくみ非を利に作りなせばとて。歴々の智眼に顯れざる事有べきや。正道ならぬ事に人を掠めて物をとらんとする巧。悪賢き迄にも及ばず悪愚といふもの。乳房脚ゆる子が。癖びも。合點せねば取難し。勘兵衛随分惡智慧はしりし男。恐らく好智慧を出せしと。外記左衛門と謀し合せ。相圖を定めて。來る時分を待つ所へ。外記左衛門件の作り姿むつかしう見せかけ。玄關へ上り。先四方を睨み廻し。大柄に物を云て。小僧居ぬか。竹五郎に逢はふといへど。押放していへば。勘兵衛罷出。段々の口上を聞て内に入。折節藤七入組し算



用に氣を盡かし。算盤枕に寝入りたるをゆすり起し。さあ／＼御家の一大事が出来いたしたと。右の様子を語り。外記左衛門とやらんといふ傘人はや切入るべき氣色どうぞ此方逢ふて宥めて歸へされまいかといへば。藤七目をすりながら次第を聞いて。何と其者は武士の傘人に極りしかと問へば。武士共々々々然も二本迄さしこわらかして。すさまじき侍と嚇せば。成程／＼身共が逢ふて歸すべしと。下袴を着し。勘兵衛もろ共支關へ出れば。外記左衛門藤七に對し。貴殿は竹五郎爲には何人ぞ。我等事は谷町邊に罷有。雁野外記左衛門と云傘人也。此度丹州の親類共取持にて先きに貳百石の御加増で。體上片付く相談大方相極りし所に。拙者妻女と竹五郎不義の密通を。仕る段堪忍成難く。即座に重切に仕る所を。親共へ今生の暇乞仕度斷。武士の義を存。暫時の暇を遣はせしに。我を謀り今日において參らず。何共侍の一分立難く。さるによつて推參いたす。竹五郎を速に出さるればよし。さもなきと家内へ切込。一人も残さず。片端から無切にして。目前に死人の塚を築く心底を極めて來れり。さあ返答はと。果し眼になつていへば。藤七段々聞届。私義は竹五郎口眞似も仕る藤七と申す者。主人竹五郎若氣にて。貴公の御内室様と密通仕るに付。御立身の御妨に罷成。御侍の御一分立難く。御手打になさるべきよし至極に奉存。但し斯様の義は即時に見届られし所にて御存分になさるべき筈を。假令ば最期に親に逢いたきなど願ひ申せばとて。御宥免あられ。今手延になつて何の證據もなく密夫との仰かけられ。ちと愚意に落兼候といへば。こりや藤七武士が左様の所を油斷べきか。即ち其節竹五郎を膝の下に敷て斯の如く一札をさせて置たり。主人の手跡か見知るべし。是を見よと件の一札を投出せば。藤七二三返も繰返し。よく／＼工夫して申は。成程主人手跡にて而も判迄据へられし上は密夫に紛無之所流石は御侍様程あつて御神妙なるなされかた。感心致し候。扱竹五郎を御存分になされし上。御内方様は何と遊ばすと尋れば。愚な事をいふものかな。竹五郎を切し刀にてすぐに女めもづだ／＼にためすといふ。それでは世上へ密夫の沙汰廣く罷成。御爲に成申すまじ。貴公は侍の。竹五郎は町人の義。御存分になされてからが御高名には成

まじ。其上竹五郎と御内方様を御手討になさるれば。御自分の御一分相立申すや。承りたしといへば。中々不義の者共を年にかける上は。侍の本望といふ。何共其段心得がたし。兩人を手にかかれてからが武士の妻女を盗まるる恥辱は千人萬人相手を切さいなされてからが。剝げは仕るまいと存ず。然らば聲高に密夫の詮義なさるる程御身分の御恥辱を觸てまはらるるに似たり。殊更御立身の望武運に叶ひて。御親類方の御取持ゆへ。近々御身上御片附なさるる御障りにも成るべし。此度此妨にて御片附なき上は。永々御立身の願ひ相叶はず。御先祖の家名を埋ませらるる云もの。たゞ隱便に沙汰のないやうに御思慮あるが肝要と存るといへば。勘兵衛側にて是を聞。よい所と差出。是は藤七申さるる通。兎角隱便に内證にて御濟ましなさるか。憚ながら御爲と存ますれば。たゞ沙汰なしになされ下さるべし。其替りには頓て御片附遊ばさるる御拵の御用金は。假令何百兩でも旦那御役に相立申すべしと。詰りを金の所へ落しかけるを。藤七中々合點せず。さりとは勘兵衛武士道をしられぬ故に卒忽成る事を申さる。此段は勘兵衛申し誤りてござります。御堪忍なされ下さるべし。斯様の場に金銀づくの事を申出すは。愈々あなたに御腹立をさせます様な物じやといへば。外記左衛門聞て。いや／＼氣にはかけ申さぬ。段々貴殿のいひぶん至極に存する上は。沙汰なしに濟ますべし。然る上は今あの重手代の申さるる通。丹州へありつく時分金銀の用事に相違なく相立申さるべきやと尋れば。藤七扱はとがんづき。是はお侍様共覺へませぬ御一言。金銀の御用に相立申ゆへに此事沙汰なしになされたとあつては。大事のお侍様に異な悪名がついて。彌以御一分が立まじ。何共始終が吞込まぬ穿鑿。扱はそなた誠の武士で有まじ。發端からさふ睨んでおいた。藤七が眼は違ふまじ。主人竹五郎と其方内儀不義を致さるるを見付られて。手込めにせられし上にて書さられし一札には。筆の歩み正しく。常物書るるよりは墨黒の念の入り所不審なり。御自分の手込めにあい萬死一生の場にて筆も振はず。斯様にためつけては書れさうなものでない。我等主人ながらそれ程所存の落付いた人にてあらず。其上旦那の印判は時の間に何萬貫目の埒もあく。大切な



る印判ゆへ平生懐中して居らるゝ事。曾て以てない事。それに其方内儀に逢ひに行かるゝに。印判持参せらるゝ段。いかにしても合點ゆかず。是は貴殿より詮儀せられいても此方から吟味を遂ねばならぬ所。先ありさまは家持か借家か讀の下らぬ人なれば此方より人を添へ町所へ届申。御内方様もあるや。又近々丹州への有付もあるやの様子相尋めべし。若此二品相違におゐては。其方を相手にして御代官へ訴ひ有無の詮義速に致し申す。それ誰にてもあの仁同道いたし御宿所へ送り届け。手寄組中。お借家ならば家主へ屹度届けて來れと。件の一札を懐中し。苦り切ていへば。固より外記左衛門は妻子もなく。宿にははかま一つに二疊敷の少借家住居。歌骨牌の歌を書いて是を渡世の種とする男なれば。人を付られ町所へ届られては化の顯はるゝのみにあらず。さらりと今日切に所の住居ならぬ身なれば。大きに具合喰違ひ。嫌人添へらるゝには及ばぬ。侍の女房を盗すまるゝ事。言募る程手前の恥辱に成と有所て至極いたして。此事沙汰なしにして歸る上は。双方に言分ないといふもの。先身共は罷歸る。其一札を返されよといへば。沙汰なしにして歸らるゝ上に此一札の入べき子細なし。是は拙者預り置。是非に詮儀をせねばおかぬと。却而こちらからゆすりを喰せば。扱々済んだ事をむつかしう云ふ男じや。そんなら一札も取て歸るまいはさてと。弱口になつて最早。さらばと犬の迷吠の如く歸れば。勘兵衛が思案瓦落裡と違ふのみならず。藤七が一札をもつて是非に詮義せんといひし一言氣味悪く。是は藤七殿吟味なざるゝ程。旦那のお名の出る事。たゞ沙汰なしが好うござらふと。いふ程可笑く。斯んな事は屹度穿鑿しておいたが以來お家のお爲でござる。是には何ふでも御家の内に方人があるに極つた。誰にも致せ斯様の悪巧を致して。御年若な旦那の心を。さまざま狂はする奴を。詮義の上で見せしめにしたがよい筈と。濟まぬ顔していへば。勘兵衛は肝を冷し。辛きめに逢ふて鹽町へ直に走りゆき。座敷へ通れば竹五郎其外末社共勇をなして。定めて首尾ようまいらふ。外記左衛門が彼のむつかしい顔では。如何な藤七も一言も出さず。頭から金と出やうが。なんと貴殿の御思案が何百兩程になつてござる。是が正身の金分別といふもの。愈々旦那方に

も金事が急にならせられたといへば。如何なく四も五もくふ奴ではなし。却て外記左衛門を町所へ預ける筈を。色取做して身がら歸るが。外記左が大仕合といふもの。其上此度の巧を大方かんづいたかして。詮儀せねばならぬと旦那の一札迄懐中し。是には方人があらふに依て穿鑿の上。御代官様へ申上。其者を見せしめにする。中々黙つて居さふな氣色でござらぬ。構へて其事が顯ましたと私がたくんだとおつしやつて下されますな。爰な支甫がたくまれしと御意なされて下されといへば。支甫大きにけてんして。いや。私は夢にもぞんぜぬ。是は第一よう有まいと申したれと。はや咎をぬりあい中間いさかいになるこそ可笑かりき。所へ砂の善六郎より歸りて申は。吾妻様身請の義。親方へ愈々相談仕掛ましたれば。先達て支甫殿へ申通り。諸事七百五十兩で埒が明くと申進せし處に。其後御返事がないゆへ。はや去る御方へ八百五十兩で今日に身請仕る契約いたし。手付金三百兩夜前請取申たれば。最早思召切下さるべきよし。親方も殊の外残念がりましたと申せば。座中手を打。何處も彼も手筈が違ふてくる事じやと。何れもきなれば。大臣大きに力を落され。是はたゞ事ならぬ不首尾共。扱其引のく先の名は聞かんだが。其段も承り届けて参りましたが。いかふお匿しなざるゝ程に構へて申すなど。私口をも堅めて申聞しましたれ共。旦那お尋なされますに置しませふ筈はござりませぬ。請手は御手代の藤七殿でござります段。しかと承り届け参つたとは御一分の立ぬ所。主人のお逢いなざるゝ女郎を。家來の身として請出す事。賣物とは申ながら。お前の御不便掛けられましてお枕を交されますから。奥さま御同前。然れば旦那の奥さまを奪道理髓に鋸引が物は有は。是は却て旦那御仕合の御吉左右といへば。成程いふ通り最早堪忍ならぬ所なれば親父へいふて存分にするといふもの。しかし爰に氣の毒の事有。藤七が今に雞の事いひ出さぬは。こんな所でも持て参らふといふ下心で。何共いはずに居るかしらず。中々深い奴なれば。却て反りを喰ふやうな事有べし。爰は一代一世の思案所。とくと落付て分別をせねばなら



ぬ場じやとあれば。如何にも今日の外記左衛門手の如く。あちらこちらに成まい物でない。先金雞を其晩に何方へ取て置しぞ。其夜内に有合し者共に。なんとなく尋て見て。其上の思案に仕るべし。幸ひ喜齋御供に参りたれば。先づ坊主に勝手にてとくといわせて聞べしと。勘兵衛臺所に出て喜齋を招き。先夜玄關に置し風呂敷包は。愈々藤七が取て置しを見届たかと問へば。取て置れし所は存じませぬが。風呂敷包は慥に藤七殿見て居られましたといふ時。久三郎庭に鱧の皮をあぶり居たりしが是を聞いて。此中梅薫様の長居なされた晩の風呂敷に包んだ箱の事てござりますかと。問ひもせぬ事差出て申せば。成程く其事じや。左様ならとふからおつしやりませいで。私がねごんざうから知抜いて居りますといふ。是は珍重して藤七が何方に隠し置しぞと問へば。お前の御隠居様へお使に御出なされた跡で。藤七殿其風呂敷包を梅薫様方へ持たせ遣はされ。即ち私が持て参り念の爲じやと存じて。梅薫様の御家來衆の請取を取て置ましたと。合羽の煙草入の中より請取を出せば。勘兵衛悦び頓て披き見れば。風呂敷包慥に請取申候梅薫他出故爲念如。此に候佐渡屋藤七殿。梅薫内鹿山十助とあり。是は究竟の物と座敷へ持て出藤七が金雞の事申出さぬこそ道理なれ。己れが隠して吾妻に逢ふ事。終には知れて御家に永く勤る事成るまいと高をくより。兼てより。身構をして。斯様の寶をも幸にして。他所へ小出しをして置くと存ずれば。是を言立にして片時も早く御隠居様へ仰上られよと勧め申せば。成程我もさは思へ共。人の悪事を言上る此身が。さりとはずしからず。萬一藤七と對決に及びなば。我等が悪事も言ひ顯さん。然る時は互に組ておらる所が身の難義と成るべし。爰は汝が家を思ふとの言立にて。藤七を相手にしていふて出るがよかるべし。親仁や母へは我等内證から此段々を言ひ立て。表向と内證からと尾鱈をつけて言ひたてなば。即座に藤七自滅して。それから跡は我等が儘。さあ此思案に打付けよと座中揃て手を打ち。悪事に智慧のはしりし案者を頼み。口上書を認め。勘兵衛一人にては後便りなしとて。玄甫跡に引添ふて言ひ落しの所は拙者承る。ぬかりはせぬぞと。兩人門出の酒を過し。隠居の前へいて其比は八月中の事なり。

に藤七と双論に及び。一家二つに別れ。藤七方。勘兵衛方と。互に臂を張り目に角立てりきみあふ。是ぞ破滅の前表と時の人囁きあへり。痛ましひかなく。

第三 善惡を見ぬく主人の眼

萬の寶より〇〇の請賣

其身させる奉公もなくて。家に久しく勤めるを鼻にかけて。主人の爲になる忠臣の功ある故に秀てるを猜。藤七が上に立たん事を思ひ。此四五年權を争ひ。何卒して彼が越度を見出し。是を言ひ立てに讒を構へなきものにせんと。吹毛の咎をも一つ事にして折を待所に。今度若旦那の指圖を請。金雞の失しを幸に。御隠居へ申上ると己が失は顧みず。他の非を上て辯舌賢くいひ廻し。隠居虎安の御耳に入れば。虎安禪門驚き給ひ。是假初の事にあらず。明早天に双方共は小事院へ罷出べしと仰付られければ。藤七方勘兵衛方へ立別つて小事院に並居たり。五つの時計打て後。虎安禪門細床に腰をかけ。先勘兵衛が口上を聞かせらるゝに。藤七君恩に誇り専ら色を好み。新町の傾城吾妻と申す太夫を。數百兩にて近々請出すべき催しを仕り。即先金三百兩此比相渡し候處尤とも紛御坐なく候。其上彼者内々他所へ退く心用意を仕り。御家第一の重寶金の雞を盗出し。先月外へ預け置候段慥に承り届候。屹度御詮儀遂られ下さるべしと申上れば。藤七一を聞て興を醒まし。扱々跡方もなき虚言。私身不肖なりと申せ共。御目がねを以て若旦那の御後見を仰付られ下さるゝ事。生前の本望及ばずながら大切成る役目と存じ。晝夜心を盡し御奉公申。終に遊女町へ参りたる義會て以て無御坐候。其上吾妻とやらんは關東の惣名と承りたる計にて。女に吾妻と申名。只今が承り始にて御坐候。殊更金雞の事一年に兩度の外拜見を遂げず。盗取たる證據あるや。例年元朝蟲干二度の出し入にも。勘兵衛と私立合の上錠を下し。錠を若旦那に差上置候。假令ば私盗取たるに仕りてからが。勘兵衛が金



雞の見へぬ事を只今存せし事。是以て心得難し。今蟲干か元朝かの出し入の時節にもあらぬに。藤七金雞かな盗つらんと推量して御寶藏を吟味せられしや。此段如何に仕りても不審候と申上れば。虎安開召勘兵衛に仰らるゝは。金雞藏になきを見届けて申や。然らば一應我に尋。指圖を請て寶藏へ入吟味すべき所に。汝一人の心得にてよも吟味は致すまじ。定て金雞を藤七盗隠せしといふ沙汰を聞て。吟味仕度との願ひにやと仰あれば。勘兵衛承り御意のごとく私として御寶藏へ入吟味可仕様は無御坐候。あの者金雞を盗み即ち梅黨方へ預け置候節。梅黨家來方より藤七方への請取手形。手を廻し私取置候と御前に差置き。梅黨を召出され御吟味被成下さるべしと申上れば。虎安披きて見給ひ藤七を近く招かれ。梅黨方へ風呂敷に包し物を遣はせし段。此の請取にしろしあり。何なる物を遣せしや速に申すべし。少しも偽るべからずとあれば。藤七此請取をつくく見て。是は日外梅黨方へ藥箱を持たせ遣はせし。請取にて御坐有べし。此外何の覺へ御坐なき段申上れば。其分にては藥箱と極め難し。急いで梅黨召せとあれば。今日の義勝手迄相詰居らるゝ由早速御前へ召され。請取を以て様子を尋ねさせらるゝに。梅黨更に心得ず。請取は拙者家來の手跡ながら。終に藤七殿より藥箱持たせ下されし事を覺へず。其夜は娘病氣に寄つて拙者小者に持たせ。母屋よりすぐに順慶町へ罷越。藥箱は其儘娘方に差置候と申上るに依つて。藤七申分少し胡亂に聞へける時。藤七思案して申上るは然らば拙者金雞を其夜盗取候にも仕候へ此請取に風呂敷包と計御坐候を。勘兵衛金雞と慥に究め候事何共不審に存する所也。其時分風呂敷を解き中を改め金雞と申され候は。其節早速此詮義いたさるべき所に。只今迄の延引も心得がたし。但しは慥に金雞といふ證人ばし有之や。其證人を出さるべしと勘兵衛を睨んで詰かくれば。勘兵衛是に返答なく。金雞は兎も角も。家の支配をする後見役の身として。傾城を請ても苦しからずや。斯る奢あるからは金雞をも盗まじきものにあらず。是には慥な證人されば。何と辯舌を以て陳ずる共。陳じさせはせまじといへば。身請の事は扱をき。遊女町へ足踏ん込みし覺へなし。證人あらば出せといふ。成程。只今證人を呼出し其口を止め

させんと。兼て廓へ斷いひ。禿の市彌を勝手迄呼置しが。此時の爲と呼出し。そちの太夫吾妻に逢ひ。近日請出すべきとの契約せしは藤七に極りしな。大事の所ぞ恐ろしい事はない。眞直に御隠居様へ申上げよといへば。市彌罷出成程こちの太夫さんに逢はんして。請出さふといはんしたは藤七様でござんすといふ。藤七大きに怒つて。おのれは終に見た事もない女童め。何者に頼まれ此藤七に無實をいひかくるぞと。大きに急いで疊を叩いていひければ。市彌はきやふとい顔して。こなさんの事もいはぬに。いかふ腹立さんすお人じや。わしは竹五郎様のおため太夫さまのお爲を存じまして。藤七さまの事こそ申せ。終に一座した事もないこなさんの事を。なんの意氣筋張つていふものでござんしよぞといへば。勘兵衛もがいてやれ市彌。藤七が叱るとちつ共恐ひ事はない。うるたへずと心を落付ていへ。あれが藤七じやはいへば。市彌更に合點せず。いえ。こちの太夫さんに逢はんす藤七さまは。色の白い女のやうなものいひで。あんな恐いお人じやござんせぬ。根が野郎の果じやによつて。今でも立振舞に女らしい所がござんす。あのやうな理屈臭い男じやござんせぬといへば。勘兵衛玄甫其外日比念比成る者共。是は市彌何ふしたいひやうじや。佐渡屋の藤七とはあの藤七より外にはないが。胸に手はないか。酒には酔ぬかといへば。つがもない一度見たお客さんでさへ見損なはぬもの。まして藤七様は度々。ござんして好い殿ゆへにわしも目を放さず見とれておましたゆへ。見損なふ事ではござんせぬといふ。禪門つくく様子を聞こし召し。如何様是は藤七が權をそねみ。外に藤七といふものを拵へ。世上に惡名をいひふらせ。罪に落さんとする佞人有るには極まつた。兎角寶藏を吟味し金雞なきに於ては。勘兵衛手前より詮義して出すべし。それ。藏を吟味すべしと。他所に歴々として暮せし。お出入の手代共に仰付られ。母屋の藏を吟味させらるゝに。金雞なきに極りし所に御隠居の表の格子に。何やらん張紙ありと。下々まくりて御前へ差出せば。一首の狂歌なり禪門讀みて見給へば。末の世に。家潰さんと吾妻なる。身請のために金花散るとあり。禪門暫時再吟あつて涙をはら。と流し。此狂歌は全く凡人の作にあらず。察するに先祖の何某我



家の斷滅せん事を未前にしらしめ給ふ御告の歌なり。今詮義する金雞に添し。家持のすべらきの御歌を翻案して我に告給ふ上は。此金雞の盜手は世倅竹五郎に極まれり。それ〳〵召せとありければ。勘兵衛方には苦り切てぞみたりける。所へ順慶町のおらん罷出。恐れながら此度双方の申分は皆私業にて侍ふ。其子細は先年私親梅薫。若旦那を申請られ候時分私に假初の御詞をかけられ。それより御不便を加へられ。順慶町にさしおかれ。わりなくお通ひ遊ばされ。憚りながら二世迄も。有難きお情に預りし所に。いつぞの比よりか新町の吾妻といへる傾城に御懐み遊ばし。毎日お通ひなさるゆへ。私方へはそれより不通に御越もなく。申しかはせし契りもたへ〳〵しく。獨寝の淋しきも吾妻といふ。女郎ゆへと。女心の果敢なくも君と吾妻が中を絶ちなば。昔の如く又私方へ變らず御出遊さんと存じつめ。女のあられもなき男の身振りに姿をかへて。御家老藤七殿と名乗り。若旦那のお爲なりと偽り。互の中を裂かんと仕り候へば又此比かの吾妻を根から引ぬき。御手前へ入れん催し頻りなれば。斯ありては愈々此身も捨られまらせん事を嘆かしく存じ。如何にもしてかの女を我方へ引取。何方へも遣し申さんと案じ煩ひし折から。御家の重寶金の雞を。梅薫家來不計るに持來りしを。女心の嬉しく跡先の考へもなく。知る人を頼み三百兩の質物に入。身請金の手付に遣はし。竹五郎様方への根引の御企をさまし申候。是皆竹五郎さまの御情を慕まらせよしなき。悪事を仕り候科。我身ひとつに極り參らせ候。いかやう共此身を罪に仰付られ。竹五郎様藤七殿其外の御衆中を。御宥免なし下され候はゞ忝じけなく存ずべしと。涙を流して申上げれば。禪門を始め双方共に横手を打つて驚きぬ。斯る取込の中共辨へず禿の市彌は走り出。おらんにと取つき是藤七様お前はこりや女にならんしたか。太夫さまを身請さんして女では詰まるまいぞやといふも可笑かりき。禪門委細聞届けられ。梅薫を召され汝が娘三百兩の質物に金雞を置しよし。早々請返して戻すべし。さもなくば御代官へ訴へ申し罪に行ふべしと。屹度仰付らるれば。梅薫畏ておらんを伴ひ私宅へ歸りぬ。扱勘兵衛は金雞失し事を汝一人存せし事。おのれと世倅心を合せ盗出せしに紛ふ

所はあらず。即是より直に着の儘家を追拂へと。脇指紙入もぎ取て即時に家を追出し玉ひ。扱竹五郎儀は代々の家を潰さんとせし悪性もの。今日より永々勘當して母屋を隠居へ取上る。然る上は親類手代出入の下等迄。かの世倅を一宿にても致させ。少しもいたはるものあらば其人共に七生迄の勘當ぞと。大きに怒らせ給ひければ。藤七血の涙を流し。私の身を立てんとて。勘兵衛とよしなきいひ分仕りしゆへ。若旦那の御身の難義と罷成。代を傳はりし母屋を御隠居へ疊ませらるゝ段。何共迷惑至急拙者義をいかやう共仰付られ。若旦那の御事を御赦免なされ下さるべしと。さまざまと嘆き申せど甲斐なく。纏りし袖を振り切て奥に入らせ給ひ。間なく母屋へ追立の御使重なり。竹五郎を出し申し。七つの金藏五つの寶藏。残らず隠居へ運ばせられ。代々續きて繁昌せし母屋は人住まぬ明家となり。藏々の形のみ松風起つて草深く主なき宿となり果てぬ。斯て隠居へ運し物を見し人語るを聞しに。先判金貳百枚入の書付の箱六百八十。小判千兩入の箱八百。二十貫目入の箱はかび生へて。下よりうめくゆへに。其儘藏の下に捨てあるよし。錢は砂の如く。運ぶも隙費やしと。踏つけて通れど誰か一人目にかけるものもなし。扱五つの寶藏より出せし物は。元渡りの唐織山のごとく。引出す伽羅は掛木のごとく。珊瑚樹は五匁から百六十目迄の無底の玉貳千三百。青磁の道具柄鮫限りもなく持續く。飛鳥川の茶入斯様の類はごろつけ共構はず。かますに一ぱいづゝ投込み何百人か汗をしてかたげゆきぬ。其外人魚の鹽引。瑪瑙の手盥。水昌の水風呂桶。頼朝殿の頭巾。浦島が庖丁。稻荷殿の前巾着。大黒殿の千石通。曾我の十郎が百匁の手形。夷殿の胸掛。同じく玉襪。玄宗皇帝の鼻毛鑷。金平が大盃。依藤太が釣懸升。東坡先生の間第一の水と美玉ひし。〇〇の入し壹斗樽貳百。是斗は欲しや。榮耀な福人へ半合を金十兩に極めて手廣く賣て根本交りなし。〇〇〇〇〇〇と名を取時の間に見事な身代に成事じやと。難波の欲人寄つて願ひぬ。



第四 名残は盡ぬ泪の酒盛

廊の花も散々に成る大臣の身上

一切の女郎に位のつくは。いつからにても客次第也。髓成男あれば自ら張強く。一座もてくるものぞかし。扱も茨木屋の吾妻は。竹五大臣の光にて。さながら人間の外のごとく。雲上に構へ幅なき男は中々お袖に縋り難く。全盛廓に肩を並ぶる女郎もあらざりしに。禿市彌立歸りて。だん／＼の様子細に語り。竹五さま御勘當のよし聞より胸ふさがり。納戸飯も咽喉を通さず。涙にくれ竹も染る斗の嘆き。日比御目かけられし人々立變り入かはり。御事のみ申出して悔やむも。聞くに尙しも思ひの種となり。責ては君が來ませし所そと扇風方へ來臨あり。主人下を共に愛しやとのみ申暮せし所へ。竹五は思ひよらぬ勘氣に逢ひ。出入もの情にて。大和の片脇に知邊あればとて其方へ暫時立退き。親仁が機嫌なほる迄と立出しが。何時歸るべき時節もしれねば。責ては名残にと。荷付馬を梅花の油屋が門口に繋させ。昨日に變る百姓姿。終に召馴ぬ木綿島の袷を上ばり。花色染に丁子小紋の羽織藤柄の脇指菅笠に繩緒をつけて。髪はそ／＼けを構はず。されば人間は形も心も違はずして。昨日の衣裳と今日みくらべて。角もまた變る物かな。此身の恥を構はず。太夫に今一目逢いたさ斗に來たはとの一言の外。詞はなくて跡は涙で木綿の袖を濡しぬ。何れも今日斗は誠の涙を流し。幸ひ太夫さまも御入遊ばせばと奥の一間に伴ひ申せば。太夫は御姿の變りしを二目共見ず。わつと泣き出し縋りつきて四つの袂を絞る。兎角我身を殺してのち何方へも御越し。別れ參らせて暫しも此世にながらへ居らるゝ物かと。藤柄に手をかけしを。是は短かし此道に染む者。親の勘當に逢ふは珍らしからず。我一人のみに限らず。此津にも幾人か見及びしに。程なく許され再び榮花の花の春に逢ひし人多し。兎角命が物種と道理を盡し異見せらるれば。主人銚子盃を持出。今日一日は其儘昔の御心で。寛とお遊び遊ばし。お心よく門出をなませ

れませ。頼て御勘氣御宥免の御吉左右を祝ましてと。鳥臺を持せて出し。定まつて鶴のある所に雁を置き龜の居る岩組に蛙を置く事いかなるいはれぞとあれば。亭主畏まつて上は歸る雁の心。蛙は歸るの縁をとり。是成雪中の梅は寒氣も止みて。榮花の春に逢はせ給はんと。祝ひ申ての事と申せば。是は亭主きまこまかに氣を付られての祝ひ。此褒美にと。懷中に手を入れられ心は昔なれど。辱ながら。懷中の鼻紙さへない仕合。氣を張つて馳走せられても。今日斗は主人が自分のもめにならふもしらぬに。勤めずと其儘にしておいて給との御意。此幾歳か貰ひ重ねし御恩。今日斗は何をして上ましても。飽き足らぬとの主人が心底。揚屋の聖人成るべし。随分汝等座を持って。座敷を淋しいたすなと申しつけて勝手へ入ぬ。此心入の嬉しさ再び歸宅せば。千金を以て禮をすべしと悦び。今日限りの酒盛。三草山にて道盛。小宰相の局女郎に。名残を惜まれしも斯やありなん。吾妻は二つ祝てみつめには涙。それは近比不粹千萬。別れを惜みて嘆くは古代から有かく。此邊は氣を替へ。一銚子あげ。一投なげて大和の百姓が心を勇め給へ。命さへあれば千萬里を隔て。何のやうな住居して居ても。逢はれまじきものでなし。其方心底次第で大和の奥のところに。土をなぶる商賣せむ共。一生女房を持まいが。其方も假令請られ。いかやうな榮耀な身にならふと。我より外に誠の契りをこめまいといふ誓言聞たし。たゞし是からが我等まだ。她狂ひのまへかた成る言分と申出してはづかし。いは。根が賣物なれば我に替りて又大きに出て來る大臣あらば。自らそれに心移りて此方の事。忘れらるゝは見えた事。夫の死期には共に死なんと思ひ詰し女房も。日が立に従ひ重手代と狂ひ。寺の和尚を落す後家。世間に多ければ。今を今堅めてからがゆく水に起請書かすやうなもの。誓紙を取て悦ぶは。世に有し時此里通ひの友達に。ひけらかすせい斗なれば篤と合點して見るほど。誓紙も指爪も浮氣の沙汰。約束の違はぬ所ならては誠はしれず。今何をいひ堅めて。誓文五六百立てゝからが。末の事はいひ置かれず。しかしまづ。今日ぎり合點して今生の暇乞に。終にはぬ無理をいふて見るべし。其方我に未々迄心底變らぬとの事ならば。此鳥臺の金銀二つの土器に。見事につがし



て二盃呑んで。二つ共に我等に献し玉へとある。是は迷惑成る御望み私が下戸にて日比酒を呑まぬを御存じて。今日に限りて呑めとの御事。假令私お心いさめのためさゝを過しましよとも。今日は山々話したい事もあれば。控へよとこそ仰あるべきに。又何時逢はふもしれぬに私に息つかして。實事をいはずまい爲かといへば。なるを參るは心中にあらず。ならぬを參るが心中じやが。扱は今日限りの客と思召して。はや御身のいたはりか。それは太夫殿には日比と違ふて曲もないと恨出す。酒飲べて心中になる事ならば。今日此酒にていきつき。それが病となりて一生いごかれぬ身となる共。さら／＼厭ひます氣にはあらず。私が酒を過しますれば愛憎の盡きる事が出来るが。苦しうござりませぬかといふ。扱は双物三昧か。舞の舞も用心すれば怪我はないもの。申かゝつた事じや。爰は我等を立て、是非其かはらけ二つで呑んで下されと。愈々望めば。然らばどんな事があらふと。愛想つかすまいといふ御誓言が聞きたい。扱もむつかしひ御酒でござる。何が／＼愛想つかしたら。松尾大明神の御罰を蒙り永く小半酒も呑まぬやうになりませふ。そんなら飲べて進ませふと。金銀二つの盃に。たんぶと受て。二つ共に一息呑みにつゝと干して竹五にさせば。忝けない命あらば又御目にかゝらふと。是も二つ續け呑みにしておけば。太夫酒が回りしと見へて。顔色櫻に異ならず。日比は見へぬ額に大疵赤みばしりてあり／＼と見ゆる。竹五不審して。其方いつそれ程の怪我をして。生れもつかぬ艶顔に疵を付られしやと驚き給へば。されば最前愛想をつかし給ふなと口を堅めしは此面疵の事也。私日比酒を好まぬにもあらねど。酒過せば此の如く其疵跡の赤く顯はれしを。此幾歳か方様に見せまじきと。下戸分に成て終に見せませざりしを。日こそ多きに今日。名残といふ日。何時ない無理を仰られしに。呑まねば不心中に當るのみか。はや心も變り身をかばふかと。さげしまれんも悲しく。疵の跡を見せ參らせし事。返す／＼もはづかしと。涙ぐみて泣く／＼語りしは。私が親は大梨田庄五右衛門とて。武士の引込みにて木津の里に田地數多買ひ求め。百姓となり下り居られしが。私が親の親類の所へ養子娘にやられし所。先の養子娘にやられし所。

といはれし男の子。雀小弓を射て遊ばれし所へ。わらは參り邪魔せし咎とて。小弓にて額を射られ。當座に氣を取失ひしを。乳母共抱きかゝへ。それより互に快からず。我は實の親元木津の里へ歸りしに程なく母も果られければ。父親繼母にかけんことも不便也と。六つの年。河内の志貴といふへ養子に參りしに。此所水損にて身代潰れ。わらはを木津へ歸さんといひしに。木津にては父親も果られ。今繼母斗の支配なるよし。請とらん共いはず。遣る方なさに此里へ八つの年より禿に出し。昔の小弓の疵の跡と。長物語に竹五郎横手を打て。扱は其方の母はおちく殿とはいはなんだか。其方の幼名をおかんとはいはずや。成程左様に申せしが何として御存じぞ。されば其時小弓を當しは我幼かりし時也。是につけてもあしやの道鑑といふ天文の考手。夫婦とならば家を失ふべしとありしが。扱は朽せぬ縁におかんともしらず。我共しらで今斯く互に契りを込めわりなき中となりし事。いよく此上は志を替えず。假令所を隔て逢ひ見る事こそ叶はずとも。二人が心は變らじと。又改まる二人の涙。不思議なりし縁ぞかし。我此度勘當に逢しは。一旦其方と契りたる其いはれにて。此難義に逢ふとはいへど。縁は末々朽まじきぞと。名残盃なごりの床。起別れて出て行。誠に三世を見通しの道鑑と。今こそ思ひ合されけり。

第五 三百兩にかづき物

身は賣ながら儘にならぬ女  
 唐土の玄宗御在位の時。天下の父母たる者。娘を産ん事を佛神へ祈りしとかや。我朝の中の下より夫婦掛向に暮らす程の者は。男子をまうけて末を我世渡りの業をすけさせ。老て少しは樂をせんと願ひはなくて。小見めのよい娘をまうけたがる事道理ぞかし。下々の男童は。必ず生れ付不骨にして横道成る事を見ならひ。親の助とはならひて。悪性狂ひの金の才覺。人さへ合點すれば明日顯れて迷惑に及ぶ事も構はず。當坐賄ひの偽りを申。後には親一門へ難義



をかくる世倅幾人か見及びし。然れば下々の願ひ通も譲るべき金銀家屋敷もなければ。同じ腹の痛さ同じ造作ならば二つ取に娘の子こそよけれ。琴三味線舞など教へて。十五六より取親をしてお大名様方を憚りながら。聲に取まらせ。其身の仕合にて若殿様のお袋様に成事二親は昨日迄肩に置し棒を止めて。俄に置頭巾。鼻は夢に見たる事もない。娘が方から呉し着古しの縫入りの着物着て。五十年もならず鬢にせし髪を。弁鬢にするも可笑かりき。但し一概に娘を持って出世するにはあらず。疱瘡の神から運上取やうな黒菊石一面に引張し顔のみか。澤山ならぬ食に喰ひ肥て。立白の如き取なり。然も胸の下にえならぬ匂ひあつて聲付悪く。大分の敷金ありてさへ呼手のなさうな生れ付。是二親の一生の厄介。夫婦汗を出して稼ぐ中を喰て貰ふが藝にて。朝夕ある名は呼ばて貧乏神といはるゝも悲しかりき。されば梅薫は器量よき娘の影にて。一度は家の主共なりしが。まだ此上の欲心を起し。竹五の妾として一子にても設けなば。佐渡屋の奥様といはせて。舅顔して難波に鼻を高ふせんと思ひ詰し。胸算用違ふのみか。三百兩といふ金の才覚をせねば差當ての身の難義。家財残らず賣拂ふてから漸く貳百三十兩の身代よい娘持つたとて滅多に好事斗有ものにもあらず。おらんは我ゆゑ親に難義をかけぬる事の悲しく。此身を色里に賣て成り共三百兩の金を調へ。梅薫が難義を救はんと。竊に知れるものを頼み此津の色里扱は都の島原をきゝ繕ひける所に。佐渡屋へ出入の徳右衛門といふ料理人参りて申すは。江戸の分限者上方見物に上られ。京を見盡し此比此津一見のため。私近所に逗留いたされ。器量よき二十二三の娘あらば。婦妻に貰ふて武州へ下り度よし。拵金は何程にても遣し。親元不自由ならば土産に金銀望次第遣すべし。随分我等に聞たてよとの御事。内方のおらん様あの方御好みの御器量に違はず。なんと進ぜられますまいかと。木に餅のなるやうに申せば。梅薫悦びおらんを呼びて此様子を語られ。遠國へも行く所存ありやと尋ねらるゝに。何が扱三百兩の金さへ呉れられなば。假令鯨よる海邊へ成り共参るべしとの事。此上は何かなしに先様より金子三百兩だに給らば娘を遣るべし。首尾よく肝入呉れとあれば。徳右衛門悦び急ぎ立歸り暫くして

又参り。先様へ段々申入ましたれば。私次第にて御器量御覽なされるゝに及ばず。申請してくれよと。即ち三百兩差越せられしと。金子百兩包三包梅薫に渡し扱急成る事ながら明後日爰元御立なされるゝ筈。世間を憚り給へば。本名も御在所も高ふは御沙汰なされるまじ。江戸は本町二丁目糸屋織右門様と申す。御商賣は手代衆に任せられ。其身は芝とやらに引籠て御座あるよし。筋目は成程よいお方。先當分は娘子の親様達へ御意は得られまじきとの事。只今お逢ひなされませぬとて。かやうに御縁御取結びなされるゝからは。御一家幾久しく。寛々御目に御かゝりなされませと。巨細に申せば。萬事其方を頼むと三百兩の金に目がくれ。何の念をも入す。明後日の御下りを今一日延て下されるゝやうにならうならば申てくれるべし。一門共又はおらんが妹など共とくと暇乞ひさせて下したしと頼まるゝ。それ程の事はどうぞ申して見ません。まづ御用意あそばしませと。徳右衛門は歸りぬ。梅薫は門出の祝儀の料理など申付。おらん妹お園といへるは。四五年以前曾根崎森右衛門といふ武士の傘人方へ嫁らせ。天満の堂島にありしを。夫婦共に呼びに遣し。おらん江戸へ下りなば。登りの程も計りがたし。假令國里を隔たり共。互に無事を尋ねあひて。間なく文通をいたし遠きとて疎遠にいたすべからず。兼ては森右殿も奉公の望みあれば。江戸筋に一門のあるも幸ひと。祝義の盃とりくにて萬歳を誦ひ納め。扱件の三百兩に利足を添て金雞を請戻し。虎安禪門へ相渡し。萬方首尾よくおらんを仕立。徳右衛門ついで松や町の織右門とやらんいへる。江戸もの方へ送り申せば。旦那は暇乞ひに。他出ありしよしにて。家人一人出入の年がましき女二人立出。おらんを奥へ伴ひ。酒など進めて。今に旦那様御歸りなされるべしと。さまだま待遇し其日も暮れて夜半時分に。旦那お歸りと申すをみれば佐渡屋の悪手代勘兵衛なり。おらん肝を潰し暫時胸轟き。何共思案に落ちぬ顔付。勘兵衛見るより側に居寄りて。お肝潰さるゝ段至極く。様子を申聞すべし。我事此度主人手前不首尾にて身すがら追ひ拂はれたれ共。元來思慮深き我等事。斯様の事有べしと。内々より金銀をのけをき。何時追出されても難義をせぬやうに此家迄も名代を替て以前から求めをき。身構へを丈夫にせしゆへ。今日に至りて



も少しも難義をいたさぬ上。一生どのやうに遊び暮しても。不自由ない程。金銀を貯へ置たれば。是からは主なしの思ひ出。何をせふ共心安し。扱其方事抑。梅薫若旦那を申請られし時。始て艶顔を見参らせしより。どうもならぬ程惱み居たれ共。竹五郎仇惚を致れ。順慶町へ引取られし残念さ。主人の事なれば是非に及ばず。此幾年か思ひに沈み。我一生の中此思ひを晴さてはと思ひ詰し念力届き。今我方へ迎ひ取し事。生前の本望然共當地の住居は虎安方への遠慮あれば。一兩日中に江戸へ罷下る手筈を取。落付所もはや先達て致しおきぬ。戀女房なれば命に替へても大切に致すべし。又其方も一生添はるゝからは可愛がつて貰はねばならぬと寄かゝれば。おらん突退。是は思ひもよらぬ戯れごと。そもやそも。此方の心に従ひ添はれうものか。添はれまいものか。よう分別して見給ふべし。竹五郎様今御難義にお逢ひなされ。大和とやらへお越し遊ばし。不自由なお身でお暮し遊ばすよし。儘なる身なれば尋行お茶の給仕にても致し。志の御奉公を致し度と思へども。金雞を取戻し虎安様へ返さねば。親梅薫の身の難義是非に及ばず。身を賣て成共金銀の才覺せねばならぬ首尾ゆへ。大和の御配所へも尋行かれず。心に込めて嘆き居る身の。此方に添ふて竹五さまに何と言譯たつものぞ。思ひ共よらぬ事と打ふし嘆けば。勸兵衛むつとした顔にて。それは言分筋たゝず。其方は既に三百兩の金の才覺のため。勤女に成ともならんとて。此頃新町又は島原などへの口入する肝入とも頼まるゝよし聞しが。何と勤の身となられて大勢の男に逢ふても。竹五郎殿への心中になるか。大勢の男に逢はれふより我等一人が心に従かひお内義さまと呼ばれて樂いたされたがはるかに増かと存するといへば。それは愚なる言分。金雞を質に入て今親迄の難義とせしは。元吾妻を請出し何方へも外へ遣はし。竹五さまと吾妻が中を裂きなば。以前の如くわらはに御不便を加へらるべしと。竹さまに添ひましたき斗に。よしなき事を致し参らせ。今親迄に難義をかけしは皆竹さまを思ふがゆへなり。然れば此金の替りに身を賣り勤女と呼ばれて。流れを立るは竹五郎様ゆへなれば。千萬人に枕を並べても女の道に背くにあらず。一人の此方に添ひますれば。假にもお内義様の女房共のとな

がつきます。さすれば竹さま手前へ一分たゝず。一生男とては竹さまならては持たぬ氣。必ず此方などに添ひます所存は。露程もござらぬと昔なくいへば。それは愈々つまらぬ言分。最初江戸者成るが。婦妻に欲しきよし此方よりいひ遣はせし時分。勤女ならば参らう。女房に持るゝ事ならば嫌とはいはれぬぞ。そふした返事ならば又此方にも思案いたすを婦妻にならふとて三百兩の金を取。今嫌といはれては譯立まじ。所詮其方心底。我てない見ずしらすの。うぶの江戸ものなれば婦妻に成合點て來られしなれ共。思ひの外我ゆへに拙者の思惑をお思召し俄に賢女だてと存る。それは女の何やら斟酌とて有ならば。我等手前を思召さず。たゞ打解て給はるべしと。探る手をもぎ放しそれには段々様子あつて参りし事。勤女に身を賣べしと。京大坂の色里を聞かせぬれ共。突き出しとやらにしてからが。三百兩といふ金を出さふといふくつわなし。さるに依て何とかと思案せし折節。徳右衛門参りて子細を申せしゆへ。先何かなしに相談いたし三百兩を請取。金雞を請て佐渡屋へ返し。扱此方へ参り始終の様子を語り。此譯なれば極つて女房と申すには成難し。當分の奉公人になされ下され。何時も親共手前から金子調へ迎ひに差越候はゞ。御際を下さるべしと願ひ申し。是叶はぬ時には免も角も思案を極むべしと心底極めて來りし所に。思ひもよらぬ此方ゆへ當惑を致し参らせぬ。假令ば奉公人分にもせよ。此方に逢ふては竹様への女の一分たゝぬ所を了簡あつて。我身を何方へ成共。御賣なされ出されし金子を賣て少し成共取戻され下さるべしと。涙ながら理を責て申せば。勸兵衛も粹なれば兎角こんな事。木おりには成がたし。何卒日を重ね時々口説き落すべしと。成程くだんく聞届けたれば。直に梅薫方へ歸し度物ながら。今卒人の我等。三百兩と云ふ金子を出し。其儘損に致す事も迷惑なれば。迎も斯く思ひ詰られし事なれば。遊女町へ行て出せし金子の少も戻るやうにして給はるべし。但し當津都などは見しれる人もあつて。竹五殿迄の名が出れば且は其方の立てし心中迄が無息に成る事。迎も我等は下る身なれば。此度江戸方へ伴ひ申。吉原といふ色里へ賣て遣はすべし。又其内に思ひ直して從ひ給へば上首尾といふもの先武州へ下らるゝ用意と申せば。



如何にもく近邊よりは同じく遠國の色里望みと申す。然らば幸ひ旅用意して住馴し難波を跡をなして。武州に下りぬ。是や世間に云ふ金心中なるべし。

風流曲三味線五之巻終

風流曲三味線六之巻

第一 抑々是は謠の師匠

藤戸は磯さし通さるゝやさ女

世間の人は金儲けのために。商物を荷にさせ。是れを江戸へ持ゆき。なんでも一儲けせんと妻子を宿に残し。はるばると武州へ下るに。勘兵衛は三百兩のおらんを大事にかけて。何んの當もなき江戸下り。あの地へ着きたらば。どろぞろ口説おとして思ふまゝによい事せん門出と。新敷〇〇に仕替。其事のみに心をかくなれば。出立のころ汁に〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇のごとく〇〇〇出。乗かけのゆすぶるはよい加減に〇〇〇〇やうなれば。いよゝ〇〇〇〇今日旅立に。逢坂の關の岩角を。馬から下りて小便に〇〇〇。勢田鰻に兼て精力をとゝのへ。水口の鰻。汗もおらんが爲にと喰ふて通り。鈴鹿山の薯蕷酒。桑名の煎岩花〇〇〇〇を紙に浸して懐中するも。〇〇〇〇〇〇と成るよし。其道に心がけの人は格別と。松笠焼ながら茶やの鼻の感じぬ。泊り宿も棕櫚の木のある所をよけて。牛房薯蕷の料理する所に泊りぬ。明方急ぐ雞の卵子はも〇〇〇〇〇〇。大井川のながれを見て。此の水のごとく〇〇〇〇絶すもあらまほしと。〇〇〇〇〇〇りて行くに日を重ねて品川に着きて。心も勇む乗掛馬の鈴の森を後になして。兼て才覺致し置し。淺草の借家につきて。爰に居所を極め。當分商賣もあらねば。昔前髪立の時分虎安供に連れられ。能囃子歌連俳鞠茶の湯を見および。目なれて。諸藝大概に覺へしは今年人の福と成て。謠の師をして近隣の子供に指南し。其名を子細らしく。難波江左衛門と替て。昔は瘦馬にも腰をかけし者と。よいかげんの嘘を申て。手鼓茶の湯など心がけなき人に致へければ。重寶成る人と近所の者に用ひられ。小者男二人を召遣ひ。おらんを二階にあげ置折節蟲腹の起るやうに口



説け共。いかなくおらん氣色はなくて。日を経る程に愈々口堅く成て。後は優しき詞なくて。互に毎日喧嘩しくに  
 聲高になれば。隣家の人様子を知らねば。武士に似合はぬ不慮に。毎日女夫争論をする人と。蔑視しも道理ぞかし。  
 おらんは長旅の疲の上に江左衛門に毎日せめられ。心重く氣を病出し。食も進まず。次第に色わるく瘦て床につけば。  
 江左衛門驚きは死なしては三百兩を捨るやうな物也。逆も心に從がはずば。詰る所は吉原へ成共賣て。少し成共金  
 を取戻して腹をいねばならずと。藩の弟子共を頼み。近邊に御醫者衆あらば肝煎給はれといへば。幸に近所に竹下葉  
 安とて功者成人ありと早速人を遣はせば。随分隙な醫者と見へて。使より先へ参られ江左衛門に逢て御病氣とは貴殿  
 事かと問るれば。拙者女房共でござりまするが。上方者ゆへ御當地の水にかなあたりましたか。頃日ぶら／＼相煩ひま  
 すと申。まづ脉體を考へませうと二階へあがりおらんが脈を取ながら情々顔を見て。其方は辛爾ながら難波の梅薫の  
 息女おらん殿ではないかとあればおらん肝を潰し。成程／＼左様でござります。私もどうやら見ましたやうにござり  
 ますといへば。身共は葉安とて御親父梅薫とは醫學の同門分て懇意に御座て。我等大坂に有し時分は。毎日梅薫の方  
 へ参り。御世話になつてござる。其時分こなたは十四五でござつた。西國のお大名方へ御奉公に出さつしやると聞ま  
 したが。それから是へがなご縁に附れしものならん。扱々久しうで御意得た。親御には御息才にござるかといはるれ  
 ば。おらん涙を流し。私へ参りしはそれなる男に誑られ。無體に奪れて斯様の遠い所へ参りましたと。佐渡やの段々  
 金鶏の品。勤兵衛が横道残らず語り。三百兩を出し。此所迄連れ来りしは。手代の勤兵衛でござると申す事を。親元  
 方へ急に仰せ遣はされ下され。誰にても迎ひに人をさしこざるゝやうにたのみ上ると申せば。葉安段々聞届け。成程  
 左様に申遣はすべし。併しそれ迄もない事。是勤兵衛殿とやら。只今おらん物語の通りではこなたのなされかた可いと  
 は申されませぬ。且は主人の冥加をおぼしめし。早々難波の親元方へおらんを返されてようござらうとあれば。勤兵  
 衛大きに腹立して。こなたは女共が病氣の事を頼んでござれば。御療治計の事を仰られて。何れにても早う本腹いた

す薬を遣はされ。病つかれて謔言申をおとりあひなされて。病人と同じやうに合點のゆかぬ事をおつしやる。拙者は  
 難波江左衛門と云て町人の手代など致したものでござらぬ。左様な胡亂な事をいはるゝ醫者のお薬は心元なふ存れ  
 ば大切な女房共にたべさす事はなりません。最早こなたは頼まぬ。お歸りなされて下されといへば。おらんは葉安袂  
 に縫り今申したる事に少しも偽りはござりませぬ。國々親元方へ御申遣ひ下さるべしと。押返して頼めば。成程其段  
 心得ました。先御暇と歸らんとするを勤兵衛おさへて。熱にうかされ申すやら知れも仕らぬ空言を。女が親元へ仰つ  
 かけされなば。八幡こなたを醫者とはいはさぬ。急度お恨を申す。いらぬ事のぬけさやお持なされずと。似合ひしや  
 うにお薬をを調合して。病人にあたへ給へといへば。葉安勤兵衛が氣色におそれ。何が扱あのごとく成る謔語を。な  
 んの誠にいたす物でござるぞ。成程御薬しんじ申さんと。下人が持し薬箱取寄せ。薬二服あはせ。明朝迄に是を進ぜら  
 れ。又明日御見舞申さんと。是を機會にして歸へられぬ。勤兵衛後にておらんを引起しこりや女。今迄は胸をさすり  
 て堪忍せしが。最早今日といふ今日堪忍袋の口が切れた。何といよ／＼我が心に從はぬ所存じやな。常とは違ふた心  
 底を極めて申せ。悪い返事を致さば今日切の命じやと存ぜよと。大脇指を出し鑿元をくつろげ。腕まくりして睨つく  
 れば。おらん更に驚かず。愚や難波を出る日より。さら／＼生る心にあらず。假令へ八裂にすればとて。おのれがや  
 うな極悪人の心に從ふ事はせぬとはなれきつて申すを。取て引よせ。胸元を二刀刺し通し。息たゆると葛籠を出して  
 死骸を押し入れ。扱二人の下人を招き。此事沙汰いたすなと金子拾兩づゝとらし。口をかため死骸は夜に入り何方へも  
 埋めてしまふべし。弟子共来りて尋ねなば。病死と申置べしと。夜陰におよんで板敷をこじはなし。土を穿ちて死骸  
 を埋め。又元のごとくにしてさらぬ體にして。其夜も明て四つ時分に。竹下葉安御見舞申と内へいらるゝ所へ。勤兵  
 衛罷出。近頃忝なし残念にござります。友前初夜過より俄に病指出。暫く苦しみし内に痰せりつめ。夜半時分に  
 終に相果ました。お馴染もござりませぬに。御精に入られ切々の御見舞忝なしと慇懃に申せば。葉安肩間に皺をよ



せ。何共合點參らぬ。昨日の脉體にてさやうに俄に變の參らうやうはござらぬ。卒忽ながらいまだ御死骸を葬られずば。様子を見たう存ずるとあれば。勘兵衛にがく敷顔して申すやう。御當地には馴染もござらず。近所をばかり早速葬禮を忍びに仕りて仕舞ましたといへば。それはいよく合點參らぬ。昨日も申通おらん親梅薫とは懇意にござれば様子を承とゞけ。大坂へ申遣しませねばなりません。然らば葬送なされし寺は何方にて候ぞ。せめて墓所へ成共參り。廻向をいたし申さん。戒名は何と申すぞといへば。勘兵衛是につまりて返答出ざりしが。こんな所て弱身を見せて推せられては大事と思ひ。是葉安そなたは段々不足述懐あれども胸をさすり堪忍し。最前より其色目も見せず。あしらふてゐれば。様々の事を申さるゝ。おらん昨日其方が調合しておいた薬を一服もつたればそれから段段瘡が差のぼり急に取つめた。此薬の愈儀をもして其方をたゞはおかじと思へど。薬ちがひとふ事又世になき事にもあらずと。了簡をしてたまつてゐれば。死骸を見せなどゝ。可笑い事をいひかくる。療治を頼めば相果た死骸迄見て戒名迄聞いていぬるが醫者の作法か。何薬を合してのましたやら。息引取と惣身が紫色になつたからは髓に斑猫をつかふたな。何の意趣があつて身共が女房共に毒はもつたとねぢければ。葉安呆れて。扱も爰元のもがりとはちがふて。天晴一越こへた虎落ものじや。毒薬もつたか。汝がわざと殺したかは。知れる所てしれるであらうと詞を残してかへられければ。勘兵衛今は氣味悪く。最早爰には尻ためてゐられぬ所と。隠に其夜そこを立退。世間のなりを聞つくるひ様子をみ合せ。是より奥筋仙台。邊へ立退くべしと。下人二人との相談。唐へ欠落したればとて。此惡の塊いつぞはついて出て。命をとらずにおくべきや。只假にも善事をなすべし。第一夜が寝やうてよしと。老人の金言むべなるかな。

第二 錆たれ共形見の長刀

姉の敵うつゝないやつし神子

おらん下りてより終に一筆の音信もなかりしかば。梅薫心もとなく肝煎し。料理人徳右衛門を呼びよせ。それより後終に娘方より便りあらず。其方の方へは便宜ありしやと尋ねらるゝに。扱はまだ御便り御座なく候や。私は定めて御着なされたら其儘御便りもなされ。様子も御聞あそばせしものならんと今日迄存ぜしが。今迄御便りなきは心もとなし。元先様より拙者直にたのまれました事にもあらず。私懇に仕る休古といふ按摩取が。其江戸衆へ心安入致し。私を頼みましたゆへ御肝煎を申してござれば。早速首尾なりました事て。御息女をもらはれしお江戸衆事は近付にても御座なく。万事休古がさはいをいたし。拙者は先様のやうす存ぜず。先休古方へ參り。其後便宜これありしや尋て參るべしと云てゐる所へ。竹下葉安方より時付の飛札。心元なく梅薫披いて見給へば。おらん病中に見舞ふしぎに對面いたし。段々様子を承れば。武州の者として息女をもらふて下りしは。佐渡屋手代勘兵衛事にて候が。我等其元へ様子申遣ふべしと。おらんと契約いたせし事を氣の毒に存じ候や。翌日おらん病死と申して逢はせ申さず候ゆへ。せめて葬りし墓所へ成共參るべしと申候へば。何とやら勘兵衛顔色合點參らず。厳しく愈儀仕りかゝり候へば。其夜欠落仕り行衛しれ申さず候。定めておらんは殺し申たるものと覺へ候。假令立退き候とて上方筋へは參るまじくと存候。どの道近郷にかくれ居申すべくと存候。御知せのためかくのごとしと。讀みもおはらず徳右衛門をとらへ。おのれよくも某を誑りかゝる事にしなせしな。所詮汝娘の敵なれば逃ぬ程に覺悟せよと。相口をひねくりまはし。かはゆやおらんがさぞどうよくな親じやと。下りしなと思ふたであらふは。此家屋敷諸道具を虎安さんへ渡し。身すがら出て參る程に。是を如何様共なされ。たらずめは只今迄御出入いたせし交誼に御たし下され。金雞を御取戻し下さるべしと願ふたらば。叶はぬ事は有るまいに。家財をおしみ行衛もしれぬ者の方へ三百兩の替りに遣ふと。さぞ怨めしふ思ふたであらう。不便やもらいては歴々ときいたによつて。當分の金子より末々其身の安樂を思ふてこそやつたれ。こんな事があらうと知つたら何しにはるゝの所へやらふぞ。其上母が死期にも外の事はいはず



に。兄弟の娘の中にも殊更姉を不便がりて。くれぐれ頼んで死だにさて。是非もなや悲しやな兎角徳右衛門め。己れをきざみて成共。此恨をいはねばならぬと。偏に狂氣のごとく泣つ怒りつせられしは。道理至極と。徳右衛門も涙をながし。私を憎ふ思召すは道理ながら。最前も申す通り私は何事もぞんぜず。休古が先を取譯致し。勤兵衛とは夢にも存じませぬ。とかく休古めに此恨を申。勤兵衛が立退し在所も聞て参らふと。歸らんとするを引戻し。こりや徳右衛門そんな事を云て爰をはずさうや。いよ／＼以て憎き仕形。兎角妹聲森右衛門へ人を遣はす間。森右参られ指圖せらるゝ迄は。動きもするなど。堂島へ件の様子をいふてやられるれば。夫婦共に驚き飛ぶがごとくに走り來り。先詞はなくて妹のおそのは父に取つき聲をあげて泣出し。いふて歸らぬくどき事。森右衛門なだめて。兎角は火急に武州へ。立越勤兵衛を討てするより外はない事。めろ／＼泣く所ではないといへば。おその涙をおしのごひ。扱忝けなき御心底。然らば何方迄も召連れられて。姉の敵を一太刀うたせて給はれといへば。いかに／＼さうした所存すはらひでは。武士の妻女とはいひがたし。徳右衛門義尤も憎きものとはいひながら。又傳手とあれば我がわざにもあらず。併し人の娘を仲立するからは。先の貰ひ手方へ参りて。直につめひらきすべき所を。休古とやらの口計を便りに。肝煎いたす條。不届の至り。其替りには我々勤兵衛めを見しらねば。敵にめぐり逢ふ迄汝を何方へもつれてゆくぞとあれば。何がさて／＼私とても佐渡屋へ出入仕れば。旦那お家の怨敵願ふ所の幸ひ。たとへ勤兵衛身に墨をぬり。形を變たればとて見そんずる事てなし。はや御支度と申せば。夫婦悦び梅薫にむかひ。此度吾妻に罷下る身は定めがたし。萬一反り討にあひなば。是今生の暇乞ひ成べしと涙を流せば。梅薫常と替り眼をいら／＼げ。假初ながら大事の門出に。不覺の落涙未練の至りなり。討つも討たるも過去よりの定り事。反り討にあはゞ。又生を替て本望を遂んとは思はずして。心おくれしたるいひぶん。敵をねらふ者は理の劍。即座に首尾能討て先立し。姉に手向べしと。鬼より長刀一振取出し。是は汝が母我方へ嫁せし時分持せ來りし長刀にて。女共の先祖杉村の何某。信玄公川中島

の戦ひに。此長刀を以て甚高名せられしよし聞傳へてあり。是にて本意をとぐべし。明日もしらぬ老の身。汝等が悦びの歸國をまたず相果なば。長き形見と見るべしと。勇める眼にはら／＼と涙をうかめて申さるれば。おそのをはじめ森右衛門徳右衛門涙を流し。追付本懐を達し目出度對顔仕るべしと。暇をこつて罷出。其日は牧方に泊り。それ／＼に姿をかへて日を重ねて吾妻に着し。先づ竹下葉安方へ尋ければ。葉安立出て對面あれば。森右衛門おそのを引合せ。先づ以て早々姉が敵の義御知らせ下され忝じけなし。今程敵住所を替候よし。何方を尋申べき萬端御指圖に預りたしといへば。葉安申さるゝは。拙者推量仕るは。元敵上方生にて關東筋不案内と存れば。當地をばなれてさのみ遠國へ立退申べきとは存せず。當分所を替たる計にて。此近邊に忍びをらんと外存せねば。おその殿はおばら神子に姿をかへて。家々へ入て様子うかゞはるべし。又御自分は堺町木挽町扱は吉原の傾城町。又は淺草の觀音など。人立多き所を心がけ給ふべし。各々敵に回り逢本望とげ給ふ迄は。不自由成り共拙者茅屋を宿と思召逗留あるべし。我等も隨分心がけ敵の在所を聞出し。御本懐を達しさせ申さんと。頼母しく申さるゝにぞ。森右夫婦力を得萬事を頼み。此所に滞留して朝暮敵をねらひぬ。先葉安指圖にまかせ森右衛門は編笠深く。堺町木挽町の芝居共を見つくし。扱此所の色町三谷とやらんへ行きて見るべし。併し敵は人忍ぶ身なれば晝はゆくまじ。夜を心がけ此里知の椀箱の平助といふ太鼓をあないにて。暮方より宿を立日本堤にさしければ。呼繼番屋の行燈星のひかりに異らず。拍子木太鼓を音づれば雲にとどろく鳴神のごとく。思ふ中をばさくるものかはと讀しは。買盛る時分あつうのまはらぬと。氣のとをらぬ親仁を雷にも響へしもの。鬼一口の闇の夜に。往來のしげきは岸根の葦の友ずれ。さはぎ中間の一郡鑑とがめ鞆あて。假初の口論にも。打ての。擲けのとはいはず。二つにせられおらふと云は。さすが武士所なればと森右衛門も感じて。上方風の和か成身振をきつとしなをし。形をつくる衣紋坂を下りて大門口に至れば。上方とはちがひて番所きびしく。此内が色里かと思ふ程のかゝりなり。それより揚屋町に行て。平助がしるべの







はずなるが。彼の女に頼まれしといふは。手前の女房共おぼら神子にて町を歩し時分たのみおきしにや。さもあらば我に少しにても咄すはずなるが。おきく様に御本望をとげられてしんぜられよと。家來がいひしも不審なりと。自由立振して勝手へ立。亭主を呼出し。ちと宿に叶はぬ用事を失念して來れば。折返しに急に歸りて來るべし。大小をわたされよと請取り腰にはさし手に持奥成相客は侍。か町人かときけば。亭主口論と心得。成程武士方のござりますが。御手前様も御侍様御酒の上と申。第一は所があしうござります。何事も御勘忍遊されませと。物もいはず只御堪忍と。おしつけるもことわりぞかし。イヤ、亭主口論でもいさかいてもおりない。ちと御意得たいといふてくれられよといへ共。どなた様でも此里へは。御忍びで御出なされませれば。御連様の外は申届ませぬが。廓の作法でござりますといふ所へ。くだんの客奥より立出て。亭主大小々々といへば。必ず此家の中ていひぶんなをなされて下されませぬ。日比御目かけられませぬ私が身代が果ます事とござりますと。色をちがへて申せば。是は夢を見たか謔言をいふ男である。侍が悪所て口論する物ではない。まづ刀をわたせと請取。腰にさして家來を起さする所を。森右衛門詞をかけて。卒爾ながらこなたへちと御意得たふござる。拙者儀は曾根崎森右衛門と申て。生國は大坂の者でござるが。連添ひまする女の敵が御當地に隠れ居ると承り。それを討に當春より只今迄心をくだいて諸方をつけねらいまするが。武運に叶ひませぬかして。今日迄在所を見當りませぬ所に。今晚よそながら承れば。貴公の御規ひなさる、敵と。名苗氏が同じ事とござる。殊に有家もどうやら御聞出しなされたやうの。御家來の物語の體でござるが。御自分のお爲にはどうした敵でござるぞ承りたい。此節の義でござれば御用心と存じ。御覽じ付らる、通。態々大小も腰にはさみませぬ。是にさしおきますると。持たる大小をくだんの男が前にさしおけば。彼者聞て家來が最前申した義御聞なされた上は包みませふやうはござらぬ。成程今暮敵の隠家を見届てござるが。こなたの規はる、敵の本名は何と申ぞ。されば以前は勘兵衛と申て佐渡屋と申有徳人の家來でござつたが。御當地へ参りては。

難波江左衛門と申て。誦の師を仕つて居つたと承つてござる。成程々々此方の敵も其通りでござる。身共は勝山奥の進と申者でござるが。去る卯月のはじめつかた目黒の不動で女に行逢ひました。近頃お恥かしい咄でござるが。終に見ませぬ器量でござつたゆへ。未だ拙者に定まる妻もござらぬゆへ。若し夫もござらば夫に致したふ存じて。武士のござるまい事ながら。戀は分別の外と申せば。他の譏も顧みず。直に口説いてござれば。身に望あるものでござれば。是だに叶ひませふ事ならば。いかやうにも私心底にしたがふと申たゆへ。あたりの茶店へ伴ひ隠に子細を尋ねてござれば。當地に難波江左衛門と申す姉の敵がござれば。後見をして討せて下されなば。成程拙者が妻女にならうとの事。侍の敵が有ると申事を承つて引ればいたさぬゆへ。連添ふ上からは身共が爲にも小姑の敵なれば。いかに後立に成て。ともく、討つて本望をとげさせふと契約をいたし。それゆへ諸方を尋ねさせましたに。武命に叶ひ早速有家を聞出し。満足に存するといへば。森右衛門聞て合點せず。何共それは心得がたし。よも御侍の虚言はござるまいが。拙者ねらひまする敵も愚妻が爲には姉の敵。殊更私の女共ははじをりかゞみの兄弟。たゞ二人ならではござらぬ。其内の一人をくだんの江左衛門に討せてござれば。外に妹と申者は拙者妻より外にござらぬが。して御自分の御かたらいなさる、女中の親父の御家名は何と申ぞ御聞なされてござるか。中々の事手前の女が親は難波にて花崎梅薫と申す名醫の娘じやと申すといへば。森右衛門少しせき心に成て。ム、扱は身共が女房共。拙者一人ては本望とぐる事を心もとなふ存じ。御歴々と見て貴公を頼んだと存るが。いかに丈夫に本望が達したいとあつても。女の道をそむき拙者が眼をぬいて。御自分と不義をはたらく段。敵の事は二段。まづ此女めをきさまねば堪忍ならぬと。面色かはれば。是々御侍おせきなされな。不義とござつては。某とてもきゝのがしにはならぬ所。いざまづ拙者方へ是より直に同道いたし。女共に引合せ。其上にていかやう共思案次第にいたさうといへば。扱は拙者留守の中はこなたの方へ参つて居るか。いよく以て堪忍ならぬ。成程々々こなたへ参つて。兎も角も分別をきはめませう



といへば。奥之進聞て。何とやらこなたの言分胡亂にござるは。手前の女は最前も申すごとく。去る卯月のはじめつ  
 かつたより。目黒から誘引いたし歸つてから。終に他出はいたさぬが。こなたは卯月のはじめ比から旅宿へお歸りな  
 れぬかと尋ねれば。是は何共合點のゆかぬ穿鑿。女房共は今暮是へ參る迄は宿に罷有。先月迄はおばら神子に姿たを變  
 へ。町中をねらひありき。毎夜宿へ歸りしといふ。是は互に心得がたき義。然らばこなたの御旅宿へ拙者を召連れら  
 れ。御内室御宿にならば御夫婦共に私方へ御供せん。是尤と兩人打連れ立て葉安方へ立歸り。表をたゞき先づ森  
 右衛門内に入れば。おその立出で大事の身を持夜更くる迄どれにか遊び給ふ。敵を覘ふといふよいかこつ種の種を  
 こしらへ。私には恩がましういふて大方は遊女町での御榮耀。人には淋しい留主をさして。眞にあぢてござんすの  
 と。濡をこめたる挨拶。森右衛門聞て。敵の有家開出した。子細は此仁よく御存知ぞと。奥之進をよびいれおそのに  
 引合せ。右之段々を語れば葉安をはじめおその徳右衛門も是は何共心得がたしといへば。奥之進はおそのを見て。扱々  
 世には是程に似たる女中もあるものか。物ごし顔だち此方に罷有女に生寫しといふにぞ。いよく不審はれず。兎角  
 こなたへ參るべしと。森右夫婦徳右衛門諸共勝山方へゆきて内に入れば。くだんの女奥之進にすがり何とておそふお  
 歸りありしぞざりとは頼み甲斐のないと打怨むを見れば。勘兵衛が手にかゝりあへなくなりしおらんなり。是はとお  
 その走り入。是姉さまかといだきつけば。形は雪の春日にあふがごとく。きへくと成て見へずなりにき。人々驚  
 き扱は過行きしおらんが幽霊。奥之進の武勇を見かけ。敵を討つて本意を達せんため。假にまみへしものならんと。  
 皆々感じ。此上は片時も早く切こみ。即時に討て亡靈に手向くべしと。何れも勇む所へ。温飴屋の表に宵より付置し  
 由兵衛罷歸り。今晚は講講と見へて大勢入こみ。今にかへらず表の温飴屋迄。賑に人だへ仕らねば。明日の事になさ  
 れ然るべう存るといへば。然らば明早天に討べし。汝は夜明迄くだんの温飴屋が表に見分してをるべしと申つけ。其  
 夜はかぎりの酒盛して。明れば以上四人白き袴を着し。錦々心覺の刀に目貫竹打替。武者草鞋しめはいて。いづれも

勇む中に。おそのは玉禪をあげ。梅薫にもらひし長刀の鞘をはずし。日比の本懐達する事のうれしやと。先に立てゆ  
 き見れば。温飴屋の亭主たゞ今起しとみへて目をすり／＼見世をあくるを。親父此裏に龜内と云ふ茶湯者があらるゝ  
 かと問へば。夕部は夜ふくる迄客がござつた程に。まだやすんでござらふ。用があらば後にといひもはてぬに四人一  
 緒にこみいり。裏の戸蹴はなし。臺所へ踊り上れば。二人の家來おどろき。むく／＼と起上り。逃んとするを二人共  
 に縛め。傍なる柱にしぼりつけ。大音上て花崎梅薫妹。娘園。姉の敵龜内起て勝負をいたせと寢間口迄切て入れば。  
 勘兵衛肝をつぶし。枕もとにありし大脇差の鞘をはずす所を。おその長刀を以て左の腕を打おとせば。森右衛門奥之進  
 徳右衛門立ならんでづた／＼に切すて。今ぞ本望とげたりと。四人一緒に笑みをふくみ。扱最前の二人の細付を引出  
 し。おらん死骸を殺せし時分何方に隠せしぞと責問へば。前方をりし借宅の縁の下に埋しよし白狀すれば。かの家へ  
 ことわり申て埋所を掘かへし見れば。不便やおらんが死骸土にまぶれて申々二目と見られず。靜に棺にうつし入  
 れ。葉安しるべの寺におくり。亡き後をとふらひける。おらん幽霊成佛うたがひ有べからず。頼母しや／＼。

第四 再び歸宅の悦び

持ならひの太鼓ならぬ世渡り

大名の元には久しく居るべからず。功なり名遂げて身退は是天の道と功ある身さへ大祿を辭して小船に棹さし。湖  
 月に心の濁をすましけるとこそ聞きしに。我何の功もなくしかも後見せし若旦那を他國へ移し。若代の家を潰さし。  
 何の面目あつて今迄うか／＼暮せし事ぞ。かく思ひ立し念を翻がへす。御家を離れて遁世の身とならばやと思ひし  
 が。よく／＼思へば我此お家になくしては竹五殿の勘氣を申宥め。再び歸宅させます人あるまじ。何卒一命をかけ  
 此訴訟を申して見て。此功をたて、其後身を退かんと思ひなほして。身命をなげうち竹五勘氣赦免の訴訟を日に十度



もせめかけく申上ぐれば。虎安もさすが親子の中。恩愛すてがたく思召しなほされ。向後悪所狂ひの道をたち。實義につとめる物ならば。成程勘當許すべしとの御意有難く。其段證文を以て御請合を申上げ。大和へ人を遣はし竹五殿に此事を告るに。大和もすみうきとて東の方へ赴き給ふよし。人づてにては叶ふまじと。藤七自身徒跣にて東へ下りぬ。扱も竹五は勘氣を請てたゞずむ方なく。大和の國に誼のものあるを頼みて僅か成る板庇をかりて夕は灯もみへず。朝の割木絶へてさりと悲しき暮し。人の戀も濡も世にある時の物ぞかし。草取女共が所節のおかしげなる田歌うたへど腹に物なくては好色もおかしからず。とかくかうして居ては命もつゞかず。空腹い腹を帯しめてこたへ。動く物とは目より外はなくて。生をも變へずとのやうに成果てるものかと涙くむ所へ。かゝる暮しとはしらず。難波の色町より差引の残り銀。取に此所迄尋來り。此事斗りにはるく爰迄くだれば。是非に埒あけて歸る心ざしにて。随分恐い顔を作て此借宿へ入つて。此暮しの體を見て。申事はさておき扱もおいとしやと錢六百と蒲團一つ進らせ。揚屋の男は難波へ歸りぬ。色は色しる下々迄優し。是浮世にある盗人においといふとはちがふたる事ぞかし。此錢を路錢にして。江戸に色友達の念比に申越しをあてにして。俄に思ひ立てお江戸に下り。吳服町の綿屋の七二方を心ざして。近所の店守りの手代に七二宅を尋れば。身共は京から今罷下りて委様子は存せぬが。お尋ねなさる綿屋の七二殿とやらは。始は宜しき身代なりしが性惡の大將にて八年此方におよそ一萬四五千兩ほどつかひはたして。可惜浮世に親は淺猿しく。其身は色より捨坊主になりけると承り及びしが。世にはかゝる阿呆もあるものかな。末末の語りぐさにそんな仕果の悪性ものが顔を一目見たい事といへば。心にこたへて赤面し。是から靈岸島の唐物屋の太助方へ尋よれば。下女が出て太助さまは。三谷狂ひと堺町通ひに。大分のお金を減らされし咎によつて。親旦那の勘當を請。長崎通ひなされし時。大坂にて御念比になされし。佐渡屋殿とやら申すお歴々を頼み。はるくお上りなされて今は此お家にはござらぬといふ。扱は太助も我をあてに大坂へ下りしか。是もあての誰が違ふべしと。それよ

り淺草の寺町の横筋に。世にありし時召連れし草履取。髪月代もして重寶成男と。極めの外に度々物とらせしと思ひ出して。そこにゐるよしほのかに聞置しを便りにゆきてみれば。伽羅の油見世を出してにつごらしきくらし。まづ内に入て角助が所は爰かとあれば。亭主立出て御姿を見て肝をつぶし。扱を變はりし御顔。先達て御勘當の様子も承り。御笑止に存じませしに。數ならぬ私を目當に御下り憚りながら疎略には。仕らじ。先内へおはいりあそばしませ。女房共上方から旦那様が御下りじや。茶の下もやせと世話をかくを。これく角助あんまり旦那よばりしてたるな。鳥おどしのやうな姿で。主人といはるゝも且は其方の外聞がそこねる。お内義慇懃にははずと。向後あかぬやうにして下されと。爰に頼みをかけてたゞもゐられず。油見世へ出での長口上。十八日には觀音參りおほく見世に人立もしげく。賑々敷柴崎林左が口跡をうつし。詞をならべて喋り合所へ。材木がしの福法師數多末社を連れて通りがけに見付られ。扱もありしに變る身の上。奢りかか成果るならひなれば。さらりと昔の氣をかへて。折節は私宅へも御出とあれば。口上申して是忝なし。以來は御家來同前に頼み奉ると。昔は下目に見し法師に。様の字を百二百と付て。其後は太鼓中間に入て件の福法師のお次につめて。提煙草盆の掃除するなど。少しは口惜かりしに。書院先の鶯の糞を拭けと通ひする小坊主めが口からいへるは。最早堪忍成難く。喰すに死だが増と暇乞なしに座を立んとする時。夕御膳とて先銘々杉焼小鳥づくしの田樂鮫鱈汁にくづなに鯛をすりこみし蒲鉾。平目の指身其外さまの料理。見るからかゝる調菜今の身にして喰事は思ひもよらずと。又時の氣になつて町人ながら大名そと。裕かな暮し羨ましく。下座になほつて。悉く肴どもに箸もかけぬに。竹五をからくり人形にして慰むまいかと。矢庭に裸體にして下帯ばかりさせて碁盤の上につくばはせおなじ太鼓が後へ廻り。是は大坂の竹田が細工時計。ぜんまいを以て此人形に只今盃のしたみをのませます。首尾ようまゐればお慰みと。せんをぬくまねをすれば。是非に及ばず人形のごとく身振して手をあげ。盃の臺を取て口のはた迄よせて。是は許せとたゞんとするを末社共とらへ。旦那のしたみが



いやか。常住樂をしてうまき物をお影てたべて。面白い座敷へ參つて指のまたをひろげてお金をもらふほどのな。結構な商賣が外にあるか。其替りに夫程の事があればこそ。旦那衆の太鼓商賣なされね。此上にふしやうな事さへあらずは。末社の身過せぬ者は阿呆の中であらふぞ。我々は只今一角給はると灰吹てもむ氣じやは。氣にくはぬ事があつてむつといたすなれぬ氣ならば。太鼓をやめて旦那になれといへば。無念ながいへば其通りと。飲むまねしてさしおきぬ。いづれ太鼓持の役目とて夕は無理酒のあひをさせられ。埒もあらぬ加賀津節を褒め。女房共が親にもかくすまたぐらの痣を申出して人様を笑はせける。世に身過程悲しき物はなし。我世にありし時心なく末社をつかひし罰かと思ひ出して悲しかりき。或時法師竹五をめされ其身になりても何ぞ望みありやと尋ねらるゝに是は憚りながら愚なる御一言。人は高下によらず生を請し者に望みなき者あるべきや。私隨分色にこりて此顔でござりますれど。また色に望深し。あはれ爰へ五十二兩降れがし。世の思ひ出をする事じやかと申せば。僅かの望誰をか忍ぶと仰られしに。先日桐屋市左衛門方より御歸りがけに。道中で詞をかけられし女郎に命と申す。さすが下地なれば汝もよい目利じや。あれは巴屋の異國とて本朝にもまたあるまじき粹なれども。床不好物にして十度に二度ならては〇〇なし。女郎のその事嫌ひなば。駕籠昇の肩のないやうなもので。乗事がならないでおかしからぬとあれば。其嫌を見こんでお情にあづかる合點と申せば。それは大きにちがふべし。此里は上方とちがひ。初會に床せんさくは氣もない事。上手を仕掛ても是斗はならぬ事。三會迄は汝が太鼓持程に。其内一度見事に首尾を仕つたら。傳馬町の家を。とらせふと仰らるゝ。家の義は格別今日より三日つゞけて御造作に預りたしといふ。それは最前もいふ通り心安い事。はや今からといふ浪の二挺立を飛して。間なく日本堤に上りて。いつも御出の揚屋へなりこみ。西尾八重霧小主水異國。彼是四色をまねき例の酒事一入つりの。聞なれしつきぶしも今日は分て面白く。何づれも我を忘れての遊び。命も覺て三十年は儘に延ぬべし。元より竹五は下地。上遊びを出て来た男。盃のつめひらき。女郎を我物にしてのこなしやう。

諸藝は世に有し時金であかして習ひおいたれば。何を一つてんごうしてもしほらしく。大臣の法師をはじめ一座に似たものもなく。異國は云ふにおよばず四人の娘達うつゝをぬかし。皆此男が側に居寄て氣に入度き風情。外の末社共何れも氣をもつ中に闇の夜の勘入と云太鼓。取分むつとがり。竹五がする程の事を打込。あんまりなめすぎなる。今日も旦那に口ごひにして。やう／＼女郎ひとり買ってもらふ。取付の素人末社の分として。人もなげなる座ぶりあぢ過て見悪い。おいてくれといへば。打こまれて竹五返答なく。口惜き顔付にてしほしほとして。片傍へ立んとするを。四人の女郎袖をひかへ。是何處へいかんす。今日の一座の花なれば脇へはなりませぬ。其まゝ爰にと取止め。異國勘入に向ひ申されけるは。こなたも同じ身てゐながら。末社よばりさしやるが。何とこなたは見事太鼓持の座配を知るか。其日のお客のお機嫌のよいやうに。おかしうなうても作り笑ひして嫌の間をもし。唄ひとむない小歌でもうたふて座を持つ太鼓衆の役めてないか。それに先から一座の興をなして。法師さまを慰め給ふ竹五殿を打こみ。遊びの先をおりて興をさまし給ふが末社の仕形でござるか。竹五殿のこなれぬお人なれば。今のこなたの云分ては興のつきぬるのみか。いさかいに成りますが。其上かふてもらふ上郎とは。逢ひますわしが身にして心ようござらうか。外の太鼓衆なれば。斷申て歸る氣でござんすれど。竹五殿計は此方から戀をしかける程の所思。私の方に限らぬ事。此座の女中方に何れか嫌と思召お方はあらじと見返し給へば。残る三人の女郎大臣の前も憚らず。異國さん用心さしやんせ。盗む氣じやぞえと。花の唇をそろへて申さるれば。法師をはじめ一座の者共。是は不思議の色。男と我ををる所へ。亭主罷出てありふれたる口上ので。扱旦那へ申上すは。此頃三浦方より珍らしき新艘御出。其美しさ過し小紫さまに百倍の御きりやう。かふしたお勤。始てには稀なる粹さまにて。お情ぶかる親方の白鼠さまとて三浦の悦び。此里繁昌の嘉瑞。お名を難波津さまと申て今を春への御全盛。今日は松葉屋方へ御入あそばす約束。お敵さまさはり有るよしにて。もらひが成さうなものでござりますすが。御拜覽なされませふば攫んで參りませふかと。申出すよ



りきかぬ氣な法師。それを我等に問ふ迄におよぶ事か。はや攫んで參れとの仰を蒙り。松葉屋方へ人を走らし。暫くゆとり有ていよ／＼御出に極はまりましたと。柘植の櫛の齒を引くごとく人橋をかけて。はやうと法師いらちたまふ所へ。太夫さまの今ぞ御出といふしほの。さすが始ての出相なれば。一通りの挨拶過て何いふべき品もなく。まづお盃と花車が取持。難波津さま御取上あそばし。法師様へしんぜられませといへば。盃とりて法師へさす粧ひ。此世の人とは思はれず。偏に西施の勤姿。最前から花と見し四人の女郎は。ひとへに深山木の色香もなきごとく。今迄此君しらずに暮せし事の悔しと。涙もろき法師殊の外になづみ出し。當年中は爰に契約いたして。他の手にわたすと募らるゝ最中に。竹五は自由にゆきしが立歸り。座敷へ入て新艘を見れば。順慶町にかゝへおきし梅薫娘のおらんなり。是はと互に肝をつぶすといふは大抵の事。横手をうつて氣を取失ふ程にて。開いた口や久しうふさがざりしが。難波津涙をながし。是は先變りし御形。何として此里へはおこしあそばせしぞ。我事此身に成りさぞや憎ふ思召ん。さりながら是には段々様子有つての御事と。三百兩の代り勘兵衛に誑られ此地迄下りし所に。是非に心にしたがへと申せしゆへ。ある夜隱に勘兵衛方を拔出。大坂へ歸らんと思ひたちしに。路金の用意もなく。まして一人日をかさねて上らん事も道をしらねばかなはず。其上勘兵衛方へ少しにても金子を戻さねば。萬更かたりて金を取しにあたり。とかく此身を吉原に賣て。身の代を勘兵衛方へ遣はし。暫く此里にとめて。頼もしき人もあらば其お方を頼み參らせ。始終をかたり大坂へ二度かへしもらひ方様の御行衛も尋參らせんと思ひしに。是は思ひもよらぬ御見。満足ながら此身に成つての對面は。さりとは／＼面目もなき仕合と。人目も恥ぢず聲をあげての歎き。竹五段々聞て。扱扱勘兵衛めが仕業。人倫の道にそむく人非人。先彼奴が方へふんごみ此鬱憤をはらし。其上にて兎も角も思案を極むべしとあれば。されば私の身の代百兩を。人頼みして勘兵衛方へつかはせしに今は其所にも居ず。近所にて尋問へどもしらぬよし。妾此里にゐるとはしらす。上方へのぼりしやと。跡を追て行しものかと存るといへば。竹五暫く思案

して。俄に身を持替心をあらため。今迄はいつくばいし法師より上座にあがり。さらりと詞をなほし昔つきあひしごとくに。先以法師只今迄の御介抱過分の至り。扱様子は今女が物語御聞なさるゝわけなれば。此上はこなたを男と見こふて頼んでござる。此女何百兩にもいたせ請出して。身共諸共大坂へ歸るやうにしてたまはれ。親共へ命限りに勘氣の訴訟申して見て。宥免ありて昔のごとくならば急度此御返禮申さふ。若し又勘氣赦免なくば。此度取替へ給はりし金子程は。母へ歎きてなり共損はかけはいたすまい。偏に頼み存ずるとあれば流石の法師皆迄いふまい。竹五殿呑込んでござる。こんな所て弓や入幡ひく氣な男でない。諸事氣遣いなされなと。扱亭主を呼びて難波津身請の事を申出し。早々首尾するやうに取持と申付れば。亭主承つて。外の太夫さまとちがひ。いまだ昨今のお勤末のながき事。殊に近年まれなる名女郎と。親方も満足がれば。中々なみでは根からしんじませふとは申まいといへば。随分汝。働て急に首尾させよとあれば。畏つて取ものも取あへず。くるわに行きて。親方に相談し立歸つて申は。私し最前申すごとく。近年の出来女郎末永き事なれば。中々外へならば五千兩共申すべけれど。法師様の御事了簡をいたし。千二百兩に仕り進べきと申よし。法師少しげん心にて。何卒汝は智慧を以て。七八百兩にねぎつて見よといふを。竹五聞て是々法師我數ならね共佐渡屋の竹五と。京大坂の色里にて普く名を知れし身が。此里へ始て来て女郎一人請くるに。ねぎつて請たといはれては傾城買の名折れなれば。千二百兩の外に百兩も祝義をやつて。諸事わけよくして引抜きたし。亭主随分小道な事はず共。且は難波津が外聞なれば。物事大たばに捌けと。今一文も手銀のないなりして。さりとは廣き心と法師感じて。我等此里で恐らく物事鷹揚にさばくと。少しは自慢心なりしに。汝が今の言分大臣にそなはつた心根。中々此法師がおよぶものにあらず。昔時頼朝ずんと未熟な時分。上總介廣常一萬貫目餘持參いたし。大分の銀子お取替申すと自慢顔にて申せしを。土肥次郎を以て纒なへそくり銀を遅ふ持て參つたと。大きに叱られながら廣常此心の廣き事を感じ。一定日本の大將となり給ふべき御器量と恐れしと聞しが。汝もそ



れにかはらず今朝迄も此法師が太鼓持し身なるに。はや昔氣に成て我物顔に鷹揚なる言分。追付勘氣ゆるされ。三ヶの色里にかくれない大臣となるべき心根頼もし。此上は十萬兩でも此法師が取替るぞ。心の儘にさばけとねざる事をやめて。先法師持せられし有合金二百兩を難波津身請の手付に渡し。今宵は爰にて飲みあかし。明けなば祝儀とのへて此里の身請の手本になるほどの事して見すべしと。奢第一の兩大臣。今宵一夜は他の客いたすなと申渡しして。廣八丁の大騒ぎ。此家内繁昌と。揚屋中間に是を羨みぬ。

第五 ○神の御利生一家繁昌

あづまが嫁入庭には金銀の島臺

金龍山の戀しらずと。萬人の客にそしらるゝ突鐘に。そりや夜があけたと盃をさめて亭主が千秋樂先以て目出度し。宿へかへりて追付祝儀をさしこすべしと。兩大臣末社共にそれくの女郎に。暇乞ひて此家を立出。持越酒に足も定まらず。くるわをねりて歸る所に。鎌倉屋の客と見へて。亭主がおくりて。侍まじりに三四人。名残をしき顔して地蔵の道行語り出し。跡ふりかへし見てあれば。和國不双の女郎。金輪際すてぬ氣と。戯れてかへる男をみれば。我方へ久しく出入する料理人の徳右衛門ではないか。是は若旦那様か何としての御下り。若はおらんさまの御事御聞あそばし御當地への御越か。先はおいとしい事ではござりませぬかといへば。されんば段々の様子らんきにきて不便さに。今日請出して難波へ連れてかへるはずといへば。徳右衛門合點のゆかね顔して。それは何共其意を得ぬお詞。おらんさまは勘兵衛めが手に罹りてお果なされ。それゆへ是にござるは曾根崎森右衛門様と申おらんさまの妹。御夫婦共に姉御の敵をお討なされんため。爰元へお下りなされ。是成奥之進様の武勇を以て。早速敵勘兵衛を比日首尾能討負せられ。明日大坂へ御歸りの名残に。夜前から此里へ御出。只今御歸りと兩人の人々に竹五等を引合すれば。是

は何共の呑込まぬ事。其方達は昨夜の酒がまださめぬ物であらふ。成程おらんは息災にて。今は名を難波津とかへて三浦の女郎。即ち是にゐらるゝ法師の當分世話にて。今日引抜くはずといへば。徳右衛門領き。さふした事も此方にござりまして。森右様と奥之進様と。いかいりやうけん違ひなつめひらきがござりましたが。終にはそれで敵の有家がしれました。本望をおとげなされてござります。今おまへの逢ふたと仰られますおらん様は幽霊でござりますといへば。森右奥之進も詞をそろへ。それは成程おらん亡靈にきはまりました。此方でも只今御自分の御肝つぶさるゝ程横手を打た事てござる。則ち死骸を面壁庵といふ禪寺へ葬しとあれば。法師此咄を聞て。扱は幽霊に二百兩の手付金渡したか。消へぬさきに取戻したいといへば。竹五聞て各々を疑ふてはなけれ共。餘り不審に存すれば。その葬つたところある禪寺へ我を伴ししるしの墓を見せてたべとあれば。いかにも是より程も近しいご御同道申へし。前代未聞咄の種にと法師も共に打連れて面壁庵へ行。是ぞおらんが塚と教ふるを見れば。いまだ石塔はあらず。卒都婆計たてゝあり。是を見計てはしれず。土を穿ちて亡骸を掘出しみるべしと。鋤取を取よせ。塚を掘りかへして見れ共。骸はなくて横へ深き穴あり。是はふしぎ。逆の事に底迄掘て見るべしと。鋤取りあぐれば中より白狐あらはれ出。我は是難波上町邊小橋といふ所の穴神の眷屬なるが。おらんが貞心なるを感じ。此地迄付添ひ来り。危き命をすくひ。我おらんと姿を化して。勘兵衛が手にかゝり。殺されし身振をして此塚に身をかくし。又らんといふ名をあらためて。きくと替て奥之進にまみへ。敵を討つ手引をさせしは。蘭といふ名によりて菊と改めしも。狐蘭菊にたはふるゝといふ縁によりてなり。殊にらんは金の鶏ゆへに思ふ男に引別れ。東の空にさまよふも。元雞は戀の妨と。昔より戀する人の憎みにて。夜あけなばきつねはめなでくだかけの。まだきになきてせなをやりつると。よみし東女の歌を思ひ出て。我此戀の障りをはらひ。再び汝と添はせんため。是迄つきそひ来りたり。今吉原に勤め居る難波津こそ。誠のらんに紛れなし。早く請て夫妻にせよ。又それなる奥之進は難波の色里に時めく吾妻が親元。大梨田庄五右衛門が惣領。



吾妻がためには現在の兄。幼少より武家へ養子に來りて。古郷の事をしらぬこそ果敢なけれ。竹五郎とも元一家なれば末々懇意にかたるべし。扱又汝が勘當も最早虎安がゆるしてあり。見よ、今に吉左右あらん。なほしも行末まもるべしと。忽ち野狐は失せにけり。人々奇異の思ひなす所へ。竹下葉安を伴忠臣の藤七此寺に來りて。人々に廻合ひ悦びいさみ。勘氣赦免の御使に參りしと。難波の様子を具に語れば。竹五は白狐の奇特をはなし。片時もはやく難波津を請出し。連れて歸宅したきとの願ひ。外の事ならず穴神の御指圖なれば其儘にてはおきがたしと。千金に替て難波津を請出し。法師にも數々の禮をのべ。扱森右衛門妻おそのおらん再び對顔悦び涙つきず。千日萬日語る共つきぬ互の物語。皆打連れて難波に目出度歸宅して。虎安に對面兩親の悦び限りなく。重ねて賑ふ家となりぬ。其後吾妻を請出し奥之進と名乗り合せ。扱竹五郎吾妻に向ひ申されけるは。そなたとは二世の契約あれば。此度直に夫妻共すべきなれ共。神の御告によつて蘭を妻にきはむべしと。親共をはじめ藤七迄が申すゆへ黙止しがたく。此度親類共へ内義なりのひろめ迄せし上は。當分此家にさしおく事も。勘當ゆるされ間もなきに不遠慮のいたり。暫く料理人徳右衛門方へ預けおくなり。我申かはせし通り。今とても心底に露ほども替りなしとあれば。吾妻反つて悦び。それは私が念願が叶ふたやうにぞんじますは。尤添ひましたいは申さぬとてもにて候へ共。昔をきけば養子娘に參りしに。蘆やの道かんとやらん末の事を考へ。夫婦にならせられなば御家たつまじきとの御事と。日外お咄なされしゆへ。扱は我に御不便をくはへられしゆへに御勘氣をもうけ給ひ。母屋も絶てさうらふかと。何程か悲しむ存じませし處に。此度御有免あつて再び御歸宅なされしに。又妾が添ひましては此後また如何成ふしきが出來なん。只自らはお情に外へ遣はされ下されと。段々理をせめての申分。竹五至極せられ。則ち藤七にあづまを下され。我に代りて隨分不便がつて呉れとの仰。畏て家宿の妻とさだめぬ。扱、再び榮花の身となり。親子夫婦眷屬一所に相集る事。偏に小橋の穴神の御影と百味の膳美をつくして奉り。數々の神いさめありて。猶々樂しき繁昌の家と榮たまふぞ目出度かりける。春

の日の永きといひながら。翁姥二人の長物語に。日は西山に入相の鐘に御室の花見幕もたむ時分。大臣暇を乞て立出て給へば。二人のうばおほち送。我々は是陰陽の神とて。世の色すける人々に崇敬せらる。男女の道を守る女道衆道二つの穴神。今難波津に跡をたれ。威光を四方にあらはしぬ。汝いまだ前方成る色狂ひをしめさんため。世界の好色さまく替りし品を引出し。今爰にのせたり。曲三味線のいとあらた成御告によつて。大臣粹となり給へば。二人は白狐の形を顯し。梅の都に歸り給ひぬ。



大色  
全道  
傾  
城  
禁  
短  
氣



序

神代以來。世に遊興のうはもりといふは。女色の外なし。孔子も椀久も此門より出られぬ。釋迦如來は脇の下から誕生しますとや。今の衆生そんな事など合點はせず。其出生の本をわすれず。一生女色に身をゆだね。水薬師の邊に笹の庵をかまへ。頭は霜を梳りて散髪となし。居士衣の袖を子細らしく。名は甄色居士とつき。不斷は精進。あるにまかせて魚鳥もあまさず。座禪の夢さめては美妾にいざなはれ。留木のかほり絶す。佛壇には佛もなくて女の姿繪をかけ。世に有がたき女道門をあまねくとさひろめて。衆道門の窮屈なる物がたき宗旨を破し。老若共に女の通におもむかせんと草庵を出て。洛東水邊衆道盛の場において。一七日の説法は何と有難い事ではないか。チンチン。

寶永八年卯月中旬

作者 八文字 自笑



傾城禁短氣總目錄

一之卷

第一 島原の女郎方便の一枚起請

付り 太夫の内證眞實報恩謝

〔此段は〕不惜身上とて女郎狂ひにかゝるからはある程の物を打こまいては此道の眸にはならぬと既に  
のら如來も説おかせられてござる此心を以て爰に記す

第二 三野の女郎安心の身請

付り あげやに有難がる千兩の光り後光

〔此段は〕前方なる買手共は女郎に思はれんとてつひえの金を蒔事あり爰を以て御經にも女道得錢と説  
おかせ給ひよねの方に損せぬ仕掛を爰に記す

第三 難波の太夫即身根引の成佛

付り 引舟にひかれて彼岸に至り大臣

〔此段は〕妻にきはめて永く夫婦一連の樂をなすを安心決定の身請と云又不安心の身請といふは浮氣  
にて引かき間もなくあきあかれて中有にまよふ二つの分を爰に記す

第四 女郎買物回向の鐘木町

付り 眸の教化にしづまる亂氣

〔此段は〕下心をさとして間夫ある事をさつし萬事を妄想と見てうけつけず本心の實を見すへる眸の有  
難き肝門をつぶさに爰に記す

二之卷

第一 野傾の兩宗あづち論

付り お裏お表一物にあらぬ争

〔此段は〕女郎衆道の至極をあらはす要文ぶすい衆生のおよばぬ高論互に眸同志のつめひらき中間破の  
底をたゞいて委く爰に記す

第二 身揚りはくつわの方便品

付り とゞけの文は顔見せの花の種

〔此段は〕二代興衆分如來のをしへには女道門の眞ある所は假令勤女にても心にはつする客にあふて  
は忽懷妊して子を孕と云ふ大腹問答の極意を爰に記す

第三 異香薫する女郎の内懐

付り 血脉かけて心中の指切

〔此段は〕迷ひの買手をすゝめこまんだめ女郎捨身の行をおこし指爪をはなして寶の池の水をのませ大  
きにおよがせんとあるてくだの奥儀を爰に記す

第四 女宗にあふて衆道門尻から閉口

付り 分らしき野郎の替紋

〔此段は〕廣大無邊の女色門のひろきを聞て衆道門のせばき宗旨をみづから辨へねがひ入し前髪を切ッ



三 之 卷

て皆女道宗に改宗する所を記す

第一 巾着山白人寺に弘る新宗

付り 色茶屋の娘かいひやくの大臣

〔此段は〕勤の果に至るものは少女なれ共心至りお紐とときに手間をとらずいかな睥にも口をあかせぬほどの發才の流女始て成佛する事を記せり

第二 流義を立る色の諸末寺友吟味

付り 睥だてば半分聞て我と手だまり

〔此段は〕するが川へはまるといふ目前損者の教のごとく皆迄聞ず悟だてをして仕掛の海を泳ぎ永く借錢の淵に沈淪する體を記せり

第三 表向は佛の白人金色の花代

付り 跡のはげぬ塗師屋がてくだ

〔此段は〕天人の五衰とて女郎にも鳥屋といふ病苦あり此くるしみをやみぬけては其まゝ金の高給取となりて此道の功者と成る内證の秘事を明せり

第四 情深い誓の海におはまりの男

付り 戀の闇にまよふ座頭の思はく

〔此段は〕凡夫の買手の身として女郎をはめんとかゝるは我と身上の回向を急ぐがごとし假令大臣何程賢ふ立まはつても女郎のはまるといふためしなき事を記せり

四 之 卷

第一 吉原寺四十八夜の夜見世談義

付り 高尾の紅葉色に出るうかれ男

〔此段は〕武藏野の限りもなき此道に引接して潜上名聞をはなれ水上より新女實相の眞あるしんていを見ぬくほどの睥になる所を記せり

第二 紫雲の染小袖女郎の御來迎

付り 太夫の姿繪物くはぬて持る身上

〔此段は〕金銀を施し花をふらす斗にて睥にはならず只此道に永く通ひ勘當渡天の身となりさまぐの執行をせは太睥の果には至りがたき事を記せり

第三 萬徳圓滿釋迦の私金

付り 痛ふもない腹さぐりに來る太鼓が方便

〔此段は〕八萬四千諸の末社取付蟲の衆生等他力本大臣の御影をわすれ自力にまぶをせんと心がけふ勤に成ておのづと旦那のもらひの網にもるゝ事を記せり

第四 教の駕籠にのりの道連

付り なきからの肌につけた千兩の金佛

〔此段は〕因果の道理をしめして諸大臣仕果の輩にくはねばひだるいといふ所をしらしめんがため柴屋町のご事を引て爰に記せり

五 之 卷



第一 難波の新艘水上の新談義

付り 姉女郎色道の奥義手くだの指南

〔此段は〕女郎功者のてくだを以て 諸客を有頂天へ上し身上を根からすくひとらるゝ有難き仕掛の極意を新艘禿井にときをしへ給ふ秘密を記せり

第二 外面似井内證は振に極た女郎

付り 一番太鼓は情しらずのばちあたり

〔此段は〕黄金の力にて一旦床の上へむかひとらるゝといへ共ふり付られて涅槃に入る事を得ざる縁なき衆生に睥だてをやめよとのをしへを記せり。

第三 女郎の水管に迷ひの凡夫

付り 紋目をくゝつた枕の中込ちやかすく

〔此段は〕しはき衆生紋日物日にへらをつかひ女郎の頼みの綱にはづれん事をかなしみさまゝの方便を以て物にし給ふ所を記せり

第四 禿も水上してから即身上物

付り 内からの分別あらたまる新町の入口

〔此段は〕きのふ迄は下品下生のがり膳に目をつけし無心の童女も太夫の果に至つては自然と位備つて諸客を引廻し其氣に應じて嘘を施し給ふ事を記す

六之卷

第一 色里一遍上人大臣共へ色道の教化

付り 初會の睥だてはふるゝ基

〔此段は〕女色信心の輩に無益の物入をかづかぬ廓のさばきをあらはし未熟の客共に大はまりをさせまじきとの慈悲心のをしへを記す

第二 女郎買大善根の施主の企

付り 蛇も太夫さまに間夫の氣ざし

〔此段は〕此道にふかく入て諸分をよく知ほど萬事大形になりて金銀ををしますいろゝの花麗なる奢を思ひ立事を誠め給ふ事を記す

第三 不審を打たる太鼓の善悪

付り 無明の酒株さめて悔しき約束の銀

〔此段は〕あげやの亭主は律氣にかまへてはよい身には成がたし大臣の熱のさめぬ内に約束は早く極めて急にとれとのをしへを記す

第四 女郎買五重相傳一重紙子

付り 仕掛の淵に深入せぬ大臣の觀念

〔此段は〕よい程といふほどを知て早く止を悟道の睥といへり只色道は慰一遍と思ひふかくそまぬを此道の大辟法とするのみ只信をおこして此巻々々を味ひ見給ふべし



傾城禁短氣 一之卷

第一 女郎方便の一枚起請

付り 太夫眞實報恩謝

それ人と生れたるしるしには。色道をしり女色のおもしろきといふ事をさとするべし。むかし二神夫婦となり給ひて。天の浮橋の下にて。鶺鴒といふ鳥の尾を土に敲きけるを見給ひて。始て此よい事を知給ひ。喜哉可美小女に遇りと睦語をのたまひしより。夫婦男女の道すたらず。世に廣く弘りてより次第に昏なる艶女。ばんくに出世し給ひ。いろくの諸分をときひろめ。衆生の機縁にしたがひて。無量の手管をほどこし給ひ。傾城白人茶屋呂州巾着比丘尼夜發など。八宗九宗にわかりてより。さまざま位に高下ありといへ共。もとはひとつの陥穴涅槃の床に至つては。いづれか上品上味の喜悅の所にちがひはなし。然るにいづれの時よりか。高野大師を祖師とあがめ。衆道門といふ窮屈なる宗門をおこし。男と男の契りをむすび。兒少人にくるしめをかけ。是を男色若道宗となづけ。僧俗をいはず。むしやうにすゝめ。有難き女道門を妨げんと。てれん上人といふ此宗旨の尻持。あながちに女道宗を破して。傾城無間茶屋傳馬白人謀客風呂獄卒と。諸の流身派の女道門をうつ事。至極の僻事笑ふにたへたり。其上流身派は。なべて偽りかざり更に實なしとなじりて。女郎未見眞實といへるよし。可笑かな。前巾着の小錢を以て。てつち小者をたらずやうな。小乗の若道宗が口さきから。廣大無邊の流身派の沙汰。近比慮外の至り。數萬兩の功を積て上品女郎屋の座敷に至らずして。何とて傾城の實不實の評判思ひもよらぬ事。惣じて女郎に實なしといへるは表向一通りにて。内證にいはずして眞のある事申々おの一方のはした金つかはれしふんにては。有難き西方女郎の内心の眞を。いか

傾城禁短氣

で見つけたまはん。かりそめながら此説法はむつかしき事ながら。勤女はなべて偽りばかりいうて。實のないものと心得給ふ。愚癡無智のやぼたちの爲くはしくといてきかせ申す。大事の所ぢやとくときいて悟道せらるべし。▲女説實顯論に曰。昔日都室町通りに熊本屋といへる肥後問屋。いづれ長者に似たり。皆客の物にて外聞つゝむ丁銀毎日宿に山なして。勘定はあはずと女郎にさへあへばと。お池の久左衛門がしのび鶴籠のりかゝつてとめどはなく。一文宇屋の古唐土になげがね。紋日役日もひとりしてつとめけるが。此大臣本は貳百兩もつて熊本屋へ入聲。いまだ養子親堅固にて近所に隠居し。娘おぎんと妻合五年以前に面家をわたされしに。養子聲の惣助けしからぬ嶋原狂ひに肝をつぶされ。一家をよせて家を追はらふ相談。娘おぎんひとりかなしみ。私異見を仕り向後ふ通にやまるやうにいたすべし。此度の悪狂ひは若氣とおぼしめして。御堪忍下さるべしと涙をながして段々の侘言。さすが娘の心入不便さに。然らば以來西通ひをやめさすべし。此以後一度にても嶋原へ足ふんごみしときなば。汝共に勘當ぞと是をいひ仕舞にして隠居へかへられ。一門衆も随分おぎんどの御異見なされと皆々たれし跡にて。おぎん思案するに。つれあひ惣助今水の出ばななれば。異見の堤をついたり共。急にはふせぎかたかるべし。何とぞ是にはとめやうのありさうなもの工夫し。卸の久左衛門をひそかにまねき。きゝめのつよい鼻薬をもつてとくとたのみ。もろこし方へ内義こましくしき文をやられしに。太夫ひらいて見るに。惣助入るの身なればよのつねの勘當とはちがひ。家を出されてはふたゝびかへり給ふ事ありがたし。さすれば永きわかれとなる事。何ほどか我身のかなしさ思ひやらるべし。世間の女のごとく嫉妬の心にてかくいふにはあらぬ證據は。是にて察せらるべしと外に一通。吝氣心にあらずとの諸神をかけたの誓紙をそへて。今おやたちぶきげんの間。其里がよひをしばらくやまるやうにと。筆に眞をこめてかゝれたるふみ文體見るより。唐土心にこたへ。命にかへて此節此里がよひをとめまし。御心をやすめ參らすべきよし返事をおくり。惣助が通ひの遠ざかる仕様を案じてゐる折から。不斷のあげやから惣助さま御出と人ばしがかゝるをわ



ざと勿體付て急にはゆかず。惣助は待たいくつして亭主太夫はまだ見へぬか。家賃おいてかりたる銀で紋日つとむるやうな大臣と。此男を同じなみにあてがはるゝは迷惑。二日拂に氣骨をおらせず。いうた事のちがはぬ客には。朝から来て待ていやつても大事なはずと。大きにむつとがる所へ太夫さまお出と申せば。大臣ひぞられてくわしやを相手に。惣じて女郎に勿體のつくも。後に根づよき大臣柱のすはつてあるから也。賣物にこしらへおきたる女なれば。其時の相場のよき人におもひつかるゝが。あきなひ上手といふもの。いひにくけれど皆の衆が悦ぶ上をする霜先の男。どふなりと氣を取つたなごおかれなば。正月のつかひ物になる大臣。急によい鳥もかゝらぬ物ぢや。かしらにばつと出ても跡のない新規の客より。なじみの體な男にまはられたが。よからふやうにおもはるゝとあてこといへば。太夫はそれにはかまはず。めしつれられし末社の與平次が耳つかまへて何やら私語るを。大臣手前めいわくがりて。太夫な聲しておつしやつても大事な事を何かありがましうおさゝやきあそばす事よ。いかにもくお出おそしとて旦那光程より御機嫌わるく。よつぼど御取なし申ておりしといふを。さりとて睨めとすりたての月代たゝいて座になほり。捨てある盃取あげ一ツのみて。わしがおそいが今日に見へたやうに新しくござんすの。全盛の太夫と思つていゝといて下さんせと。わづかな言葉の中に千萬のおもはくこめてのいひまはし。よい機嫌のなほしと。ちと待身にして見て。此たいくつさを思ひしらせたいと。是から口がほどけて来てしばらくの酒盛。夕飯過て日も西に座敷も入めな時分。人顔もそろゝ見へず。勝手には燈火の用意する比。大臣用にゆかれかへりに。庭の作り木詠めて立てるらるゝ後から。太夫はたゞと來て是與平次さま先にいうた通り。玉さまへ是をひそかにしんじまして下されと。かさ高に封じたる文一通大臣の懐へ入らるれば。是はと其ふみ手にもつて。さてこそお性根がしれて來たと。ねぢむかるゝ顔を見て唐土くわつと氣をあげ。時ならぬ紅葉面にあらはし手持わるき有様。見ぬさきより大臣腹立眼になつて座敷へかけあがり。封じめといひて燈火の本にてひらき見らるゝに。外にあふ客はたとへ別業をかさねても是正眞のつとめ心。誠はこなたと二世のけいやく。おもはぬ方へ根引にあふ共。命にかへてぬけ出せひに夫婦と成べし。此事たがへなば我身はいふにおよばず。二親もろ共奈落におちまし。此世は日本あらゆる大小の神々様の御爵をうけて。身の毛もたつ程の誓紙。當名を見れば玉さま參る唐土と血判すへて。さりとてはにくき心入。兼ては我等と二世の約束起請迄取かはせしに。それをやぶりてかゝる所爲。今迄うかゝ鼻毛よまれしくやしさと。太夫が鬚をとりてふんづたゝいつ。花ぐしき大きくぜつ。是は旦那日比とちがひ蓮葉成御仕方。まづ御心をしづめられよと與平次が取つて。おのれも同じ穴の狐とつてとばし。もはや里通ひも今日切と牙をかみていかりければ。太夫髪かしらみだるる心を取なほして。それはおろか成仰。勤する女がおひとりばかりまもりて何とたつべし。二世三世と約束申はこなたにかぎらず。あふ客毎に申事と手をはなしたるいひかた。惣助是を聞て。明た口をふさぎもせず大きにあきれて。女郎に心をつくすは世の中のはけなりと。今迄の身をかへり見て。それより此里狂ひ物の見事にやみぬる事。是唐土があてどもない方便の一枚起請を見せて。實のない仕形をして見せ里通ひをとめたるは。内證の眞實。心中をたてて。末々まであひとほせしより。遙にまさりし心いき。身の爲になる客を取はなし。我身をぶ心中者になして。大臣に思ひきらせし所。女郎に實がないとは申されず。是表向は偽りあるに似たれ共。内心の眞何といづれも。有がたい心いきではござらぬか。なむあみだ

第二 三野の女郎安心の身請

付リ 揚屋に有難がる千兩の光後光

▲女郎方便品に曰。人間遊山のうはもりは色里に増事なし。此有難道に入て。八宗見學女色一遍上人のすゝめに。女郎買は抑より太夫にかゝるがよし。其故は又此上もなき職なれば。かぎりを知てとまる事はやしと。むまれなが



らの水道の水のみこみのよい大臣。身上は根つよい礎。石町の丸七さまとてかくれもなき女郎買。始て吉原へ通初ら  
 れし日より。三浦の太夫職花紫に色濃も染付。毎日のよね狂ひ血氣の團助が貳挺だて。上下貳人めされし舟の。い  
 つもよりかくべつあし入て。櫓はいそげども遅きを不思議たづれば。大臣下人にもたされし風呂敷包の中より。革財  
 布を出されすこの物が重りにかゝる事よと。取出し給へば裸金にて千五百兩。是は何になる小判と。船頭肝をつぶ  
 しておたづね申せば。されば、かよひ盛て花紫といふ花を。根引にする身請金よと仰けるほどに。船のあしの入  
 もことわり。思ひあまりて引かきたまふ金なれば。さもこそあらめといふしほの。さすが武藏野のひろき人心とて。是  
 にさのみ我もをらず。とやかくいふ間に船が着て。日本堤の道鐵が扣鉦きけば。無常の煙右の方に見すて。自然と鬢  
 に氣をつけ形をつくる衣紋坂をおりて。大門口にさしかれば。跡より袖をひかへて。ちと申度事ありといふ程に。  
 ふしぎさに見かへれば。色白き男の身には淺草島の幾度か水へ入て。中綿の表へ透て。しかも所々釘裂してやぶれ  
 あみ笠。丸くけの細帯とりしめもなき男。小聲になつて申は。貴殿は石町の丸七といふ。三浦の花紫にふかい大臣に  
 あらずや。我も其太夫に水あげの日よりあひそめ。未は夫婦に成べきとの。勤はなれて殿しき誓紙取かはし。かよふ  
 程にけるほどに五年が間に。親の讓金に家迄そへてやつてのけ。今は一門共に迄見かざられ。此身はかゝらふ島もな  
 き船町の喜田といふ男なるが。きけばそなたはけふ太夫を千兩餘にて身請せらるゝよし。それは別家において。をり  
 ふしの通ひ女にとつておかるゝ思案か。但しすぐに宿へむかへて。本妻にする合點か心入が聞たさに。最前から此大  
 門口にまちかけてゐたるが。心底はどうぞといへば。是は珍しい事をとふ男がある物かな。千金にかへて請るからは。  
 何にせうと我心の物好次第。それを聞切て何にすると。一腰をひねくりまはしてむつかしき顔つき。さりとは此里通  
 ひする程にもない。角のとれぬ男かな。さのみりきまるゝ事にあらず。我等只今たづぬるは別業にもあらず。若本妻  
 尋れば。最前もいふごとく。花紫と我等は太夫成の口明より。大方は他の客にあはせず。五年が間はひとへに妻女の  
 とくなれなじみ。互に偕老の契りゑびや半兵衛座敷にて。其初秋の七日の夜空をながめて。たとへ此身天竺衆人の身  
 となる共。見すてまいかはるまい。命のうち一度は夫婦になりてと。天にちかひし二人が指の血をしぼりて。神々  
 を證人たて、眞のあるほど書つくして。灰にしてつけざしの酒の肴となし。ふたりが腹の中をさめおきぬれ共。  
 つかいづして今一錢もなき身となれば。あふ事稀にして互の心ばかりを筆にいはせて。今朝迄も便りをせぬといふ  
 事なし。然るを貴殿金の威光にまかせ。太夫が花の姿は請られても。底心は我等が請ておきぬれば。女房にせられて  
 から底きみはようあるまじ。尤のぼりつめたる客共には。望にまかせ誓紙もかいてやるよし。是は勤の中七十五枚迄  
 は。ならひあつて書起請。佛神もゆるし給ふとや。若そんな本心のぬけがらの誓紙を眞請にして。請出さるゝなら大  
 キなはまり成べし。太夫が眞の分は此男が皆さらへこんでおいたれば。實に二ツはない筈。いか様見れば貴殿も壽命  
 はながからう。鼻の下がながいほどにと。よい機嫌聲でわらへば。大臣以ての外にせきが来て。首にかけし守り袋よ  
 り。太夫が起請取出しさんぐにひきさき。地へなげつけてふみにじり。今迄たばかりし太夫めに。遺根ありとはい  
 ひながら。女なれば相手にはしがたし。汝花紫が夫と名のり出るこそ。幸なれ。覺悟せよと脇指に手をかくれば此男  
 さわがず。誰も盛時はさうした事もあつた。そんな所がこなれいでは本御女郎買とはいはれぬ。今迄何ほどつくさ  
 れしかしらね共。まあ四五千兩ほど打こんで執行めされ。女郎は客をだますが商賣。それをそなたは今迄眞じやと思  
 ひつめてかよはれた所が殊勝な。萬それから無性に腹が立ものなり。其方本の眸ならば。何となく常のてうしてあげ  
 やへゆき。太夫をよびてふな町の喜田といふ男と。未は夫婦になる筈のやくそくあるよしきゝしが。我に請られ本妻  
 になりても喜田にそふ心か。但し思ひきつて我と二世迄もそひはつる所存か。其心底をつゝまずあかし。喜田が事體  
 に思ひきらるゝならば。我疑ひのはるゝ程の事を仕手見すべしと。こなたから模様このまですに打出して。女郎の心を



探り見て。其上でのみこまぬ所あらば。さらりと身請をやめて。一家の太夫の中を頼めてに引ぬき。太夫に鼻をあかさす程の意趣がへしは有まじ。日影ものゝ我等を相手にして。あたら命を世間へ出ぬ義理にすてられては。世にいふ損恥なるべし。かうした模様はそち達のやうな。磯なよね狂ひ達は出ぬが道理と。手を打てわらへば。腹立の中にも是は耳にとまり。いかにもくは拙者が卒忽。御免なれと面をなほし。互に一禮の腰をかめて海老やへ丸七大臣は御來臨。太夫さま今朝から御出にて。此里の名残も今日をかぎりとお暇乞のお盃ごと。年がまへな女郎さま方はあやかりたいと。遊行上人の御札いたゞくやうに。御盃を頂戴あそばさす事。何とて旦那おそきお出と。御きげん取の男共取まはしてそやし申せば。遅きには子細ありと。下人にもたせし皮財布を取よせ。千五百兩の金を。五包つづ三ならびにならべ。太夫是はさもしき物ながらも。命の替りにもなるは是ぞかし。此大切なる金銀を出して。そなたの身請をする我心底は。實か虚かいうて見やとあれば。太夫につこりと笑ふて。是は改つたる御一言。眞の御心あればこそ。うき勤する擲の苦患をすくひ。此里をお出しなされて下さるれ。そもや實なくてかゝるお心づかひのなるべきや。それは申さぬともしれてある事と。小指をそらして小盃取あげ。かうした座敷でこなさまと酒のむもけふばかり。コレ旦那どのあげまじよとさす盃をおさへて。まひとつとひたい事あり。我等眞の心底は今のてしれたが。そなたが實の臍本をきゝたし。我にそうて一代礎をおるす心か。船町の喜田に末はつながらるゝ心底か。此思ひ入が聞切たいといふ時。太夫座敷をたつて。さういはず共身請の返替は成べき事なるに。淺ましきお巧。皆さまおさらばやと歸らんとするを。大臣はしりよつて袖をひかへ。身請の返替とは丸七に疵をつけるやうないひやう。小判の山をついてくる男に返替とはどうした言分。そんな上手はいはずと。喜田とそはねばなりませぬと眞をあかせ。大盗人と兵庫曲の髪を掴んでふみもしさうないきほひ。一座の末社宿の嘆も。大臣の袂にすがりおまへのが御尤。太夫さまの只今のあそばしやう。りよくわいながら御出出来。我々お休言申あげますと。今朝からの酒のさめる程笑止

がれば。時に女郎座について。コレ丸七さん。喜田さまはおまへにおめにかゝらぬさきに。たんとおせわに成まして。今とてもわすれぬおかた。その男の事思ひさらば請出さうづ。さなくば御思案あるべきとの御言まはし。そもやそも身請が何程うれしいとて。馴染をかさねしお客の事を。思ひ切ましたといはれうものか。御了簡なされて見て下さる。若又思ひ切たと申した時は。我身の榮花を思つて大切な客を思ひきつたとは。つめたい心いきの女郎ちやと口がましき擲中の沙汰にあはゞ。ぶ心中ものとしてあるわしを。女房になさるゝこな様が心よからうか。あれは心中ものちやといはるゝ女郎をこそ。一生そうてござつておもしろもござらうけれ。是は我身へ難題を仰かけらるゝと思ふゆへに。身請の返替と推しましたが。私があやまりかと。さすが所がら二本さす客にもまれ給ふほどありて。義理づめのいひほどきに。丸七も至極せられ。なじみの客をすてぬ心ざしからは。身請してやるほどの男は猶以てわすれぬはずと。日比に十倍かはゆさまして。命々と悦びの大酒盛。相生の松を根引にしながら。さすが我宿へは一門の手前をはゞかり。先本庄の石原といふ所に。かり座敷して入おき。親類頭の重手代をだきこみ。本妻に入れたきねがひ披露させしに。いづれも別義なくすみて。母方の伯父靈岸嶋の江戸屋道齋老親分になられ。近日あらためて婚禮ある筈。花紫も悦ぶべき所をさばなく。大晦日に算用のあはぬ顔つき。是は太夫さま御一生のかたまる時節いそゝあそばせと。つきくの女共いさめ申せば。おれは大分心あてのちがうた事ありと。髪頭さへなり次第に。櫛のはも入ずみだれ姿。何共よめぬ太夫が仕形と。丸七不審をなす時。太夫申は私おまへの奥様となりませぬ。と思ひの外成がひ事あり。是を御聞入下されぬ内は。御手にかけるゝとあつても。おかさまに成事はなりませぬ。と心籠しね事を申出さるれば。丸七もさすがの眸にて。夫婦になりて一生我内をまかすからは。心底にすこしにても隔ありては打とげられず。成程願ひあらばつゝまずあかして。何事も心にかゝらぬやうにして。本妻になほすべしといへば。ちか比かたじけなき御心入。申出すも恥しながら。船町の喜田様とは末々夫婦に成べき互のかため。誓紙迄取かはして



今とてもわすれがたし。身は賣物なれば金にしたがふて。いづれの宿へもなびきゆくはならひながら。外におかれて當座の花とながめらるゝぶんは。金が敵の世の中それは是非なし。極つてお内義様とよばれては。いひかはせし男の貧なるを見すて。榮花の家の奥さまとなりしと。喜田さまに思はれては。たとへ大名の御前さまになりてから本望にはあらず。ねがはくはおかたなりの前に。喜田さまにあうてぬしの心底き。互の起請を取もどして。心よくこなさまと夫婦に成ましたいと願ひ。あはせにくい物ながら。此おもはくの心算用をすませいで。千里が野邊に虎をだいてねる心。底きみすぐれねば。ともかくもとゆるして。喜田がかくれ家へ人をやれば。此男も來にくき所をおめず参りて花紫に對面し。太夫こな様をよびましにやりしは別義にあらずと。いふ口上のさきををりて皆迄いふまい。そちなればこそ此節に人おこして。一通りのいひわけ一生そなた同前。いひかはしたる一言をたて。是非夫婦にならねばならぬと。立身するそなたに邪魔をなして。我等昔の起請をいひたてにして。無理に我宿へともなひゆけば。手鍋をさげさせながく貧苦のくるしみをかける。是眞の情にあらず。かふ落て來るからは。志は互にかはらねど縁がないといふもの。ずるぶん丸七氣に入て。見おとされぬやうにし給ふが肝心也。我事その方の請られし日より。男をたて。はそちが行末の障りと思ひ。かうした姿に様をかへたれ共。取かはしの起請をかへす迄は。佛神のおそれあれば付髪をして。今日迄表向は男をつくつてあたりしが。是より後は有がたき身の取おき。見をさめに見給へと付髪とればすりたての青入道。淺草島の破小袖肩をぬげば。下には鼠色の木綿衣。爰より信州善光寺に参り。それより上方へ参るなれば。菩提のさりと誓紙取出して太夫にもどし。我等が起請はそこにて焼てすて。たべ。命あらばかさねてあふべしと。とむる袖を振切て立出ければ。太夫しばらくは狂女のごとく啼くるひしが。我と心を取なほし。俄に機嫌をつくり。首尾よく婚禮すみて。二月ばかり過て。段々亭主に出家の暇をもらひかけ。つひに身を墨染となして。鎌倉の尼寺に。おこなひすましていまそかりけり。

第二 難波の太夫即身根引の成佛

付り 引舟にひかれて彼岸に至り大臣

▲下心僧都の興女要集に曰。女郎に嘘の眞眞の嘘といふ事あり。是傾城買の大事。肝心肝門の所でござる。いづれもよく聞せられい。たとへば女郎のいやと思ふ男なれ共。勤とていやなる顔もならず。折ふしはいとしいふりして善哉くよい男め。諸事あまるはなど焼手を見しらし。のぼせのぼされ此女郎にそはては。浮世の中にすんだかひはないぞと。力瘤を出し根引にして。遂に夫婦になつて永くそひはつる所を以て。嘘の眞と申。又眞の嘘とは末は夫婦にならうと。八枚起請をかいて心をかためても。思はぬ方へ根引にせられては。いひかはせし事も嘘となる。爰を以ていにしへの睥たちも。眞の嘘とはとかせられた。何と有がたい事ではおりにないか。此類の事ちかきころ難波に。ありまやの山といふ大臣。女郎は新町の茨木やの半太夫を物ずき。一日も宿に枕をさだめず。毎日く通ひつゞけて。三年は爰に住吉屋の。二階さしきを不斷あけさせ他の客を入ず。南の堀の口がるな役者二三人めしつれられて。ずるぶんと思はれ自慢。太夫は名におふ手だれ。客をのかせぬ仕かけの名人。かしらはいつとも口舌にして。中ほどは〇〇〇〇〇二三度もありて。跡は男を涙もろくしてたんとうれしがらせ。始は金銀ありまやの山と。高くのぼりし身なれ共。此女郎に坂おとしにせられて。今は山も麓に見おとされて山水なるありさま。一度はさかへ一度はおとろへる謠うたひの。中間はづれのやうな紙子姿。是程おちても九軒町を晝歩行は。分のあしからぬ仕舞と。揚屋に引残りある大臣共が。ほめたりしもことわりぞかし。ある時半太夫都の銀大臣におもはれ。全盛むかしに十倍。白銀のふき出し見るやうな枇杷色した顔ばせ。人めなくば御ほゝげたへくひつきたいほど。うまさうなる所體。山はやぶれし編笠の中よりまもり見て。是太夫様こなたはかはらず御盛でめてたい。我等は替りてかうした姿になりても。輪廻き



たなく恥をすてゝ。せめてはお姿成共見てなくさまんと毎日参るが。今とても昔の情はわすれ給はじ。我とても偽りならぬ心ざし。今に絆の種となりて。親の呼でやらふといふ女房を嫌ふて。親一門にうとまれかくはなりぬ。せめては我が志ばかりをうけて給はれ。あらば何かおしかるべしと。かすかなる前巾着より文錢一文取出して。いにしへの百兩より今此大切な所。一錢はかろくても。心底のおもき所をもらうてたもれと差出せば。太夫涙くみて。かゝる中にもまだすてたまはず。おせわ成お心づかひあだにはぞんぜずと。往來の人にはぢらへる氣色もなく。彼一錢をおしいたゞき禿をまねきて。大事のおあしぞよくとつておけ。死て冥途へ行時六道錢となして。あの世迄お情をわすれぬ種にと大事さうにわたせば。山は是を見て我ををり。初心成女郎ならば赤面もすべき所を。半太夫なればこそ大道の真中にて。ようはいたゞきし事ぞ。是はもうたまられぬ所ぢやと。挾箱持し下人をよびよせ。蓋を取て五十兩包を出して。今の一錢の替りに是くれなるの。ばつとしたるしこなし。太夫さらに悦ぶ氣色もなく。手にとるより五十兩の小判大道にばらりとまきて。眞ある一錢にはおとりし物と。見かへりもせず直に越後町の扇風方への御來臨。此見事さ夕霧以來の御太夫さまと。山も我ををり住吉屋にかけゆき。我しばらく親の勘當をうけて。兵庫に忍びて居たりしが。近い比親父はてられ。跡取べき子とは我ひとりにて。母一門より人ばしかけて。ふたゞびよい身になりぬれ共、太夫が以前にかはらぬ心ざしか。見とゞけての上につかき。一代地をふませぬお家様と。そなゆべき心入にて。此比かうしたやつしをせしが。けふといふけふ見事な心いきを見て感にたへたれば。親方手前をあしからぬやうに。なんぢはからひて根引にしてくれと。挾箱の中なる金の山を。亭主に見せてたのまれるれば。是は八まんない圖。そも仁徳天皇此津に都をさだめられし此かた。かうした身請はきかぬ事。太夫様へも此荒猿をしらせまして。お心用意もさせませふと。扇風方へ参りて内証を吹こみければ。女を見ちがへられて。しれてある心をさぐられ。お姿をやつされて。さまん心とひいて見らるゝ。疑ひのつよいお方に。何がうれしうてゆかれうぞ。疑ひのつよい男は。あまきか

はやい物なれば。末のとげぬ事に聲を出るはいやぢやとの返答。是は太夫さま一代の御無分別。今大臣のきれめな時分。かうした大氣なお客は稀なもの。きおいがぬければ身請がこぢけて。かならず御後悔あるもの。けふのお客におことわり仰られて。しばしの間我ら方へ御入有て。大臣におうれしい顔をしてお見せなされませと。お爲を申ほどお心にさかひ。お身立の通りあなたに取はなされなば。百年になる迄此里につとめてゐるでござらふ。其時はあるじ様もお馴染がひに。子もりに成共やとて下さんと。にくいひをなさるゝにぞ取つかう嶋もなく。亭主はかへりて臺所にて冷酒ひつかけ。胸をおとしつけてまだ此首尾をいはず。どふぞ手を入て首尾さしたがるは。商上手といふもの。心にすゝまぬ笑ひつくりて。太夫さまをかりにやる其間のさびしさをくろめんために。おちかづきの女郎をあれこれかりまして。酒事つりの野都にひかせて。二ツ井小太夫に上るりをのぞみ。しばらく興をもよほしけるが。肝心の君さまお出なければ。大臣どこやらさびしさをにわたらせ給ひ。いにしへめをかけられし末社共を。近所の揚屋よりさがし出して。是は旦那めづらしの影向や。月すみよしやてお目にかゝるも。久しぶりぢやと口あひ申て。さまざまのものもんさくつくし。大臣も熱まはりて。花めづらしく打ちらせば。さながら座敷は山吹の瀬を爰にうつし。辰巳あがりの聲して。是は旦那昔よりはお智恵があがつて。見事成あそばされかた。どふでもいとしい子には旅をさせいぢや。少しの内の田舎すまひに。是ほど分がようならせらるゝ物かと。そやしたてる所へ。半太夫さまから御文が参りしと捧申せば。大臣ひらき見給ひ。何／＼けふの客は田舎のかたい衆にて。少しの間もうごきかとれぬとの言譯状。奥迄見るにおよばず。かふした所を名譽呼よせるが我等が得物ぢや。ちと見ておけと自慢たらふく仰られて。硯取よせ返事かきてやらるゝを。亭主下心あれば罷出て。はゞかりながら何と仰つかはされますとうかどひ申せば。されば半太夫そも／＼新艘の開眼我等いたして此かた。末は根引のやくそく。おそらくいふではないが。ひろき難波にあの女郎を。ひつかきさうな大臣外に覺へず。請出さふというたらば。さんたもしさふな物が。少しの間勘當せられて。



おちたと見すゑたかして。兵庫から度々文していひつかはせしは。我身勸氣にあふはしばらくの中なれば。追付ゆるされめてたう立かへりて。約束のごとくうけてやらうというてやりし返事に。かならず我事おぼしきらせられて。たゞ御首尾よくおかへりのみをねがふと。身請の事とはなほ書にもかいておこさぬは。逆もかへりてからが力におよぶまいと。あの女が見すゑた所がにくさに。此比立かへりて以前の身に成ぬれば。わざとあさましく姿をやつし此里へ来て。きやつが心底をさぐるに。どうも實を見つけぬ故。けふ一文の錢をあたへて心を見しに。あつばれな所を見出したれば。最前も汝にいふごとく。今日中に親方手前を埒あけ。明日は此里より新しき乗物にのせて。我方へ直にのりこます合點なるに。其方に此方内證を聞ても。今迄爰へ來ずに。おさめてゐるがにくいと。よつぽどむつと氣なる所へ。田舎の堅い客でいかれぬのとゞけの文。八まん強過て身請をしそこない。今の間に格子の柱に。指の先に唾つけて。の字かいて後悔してゐるを見るやうな。それで返事の御出成がたきよし。さ候はゞ身請の事も成がたく候はん。我身しらず様まゐると三くだり半にかいてやると。さら／＼とかいてひきむすび禿にわたせば。亭主さし出て申度一言あれ共。旦那の今の御機嫌いかゞと。はからひかねて思入を胸にもつて罷しがる。禿はくだんの返事を取て。扇や方にかへりて太夫さまに見せ申せば。御披見あり。こちが心はさうではないにと。しをれ給ふを其日のお客は都の吹出し大臣。此返事を取て見給ひ。弓や八まん我あふ女郎にひけをとらす無念さ。過し年より此太夫に我等がかゝつてゐるとは。おそらく西三十三ヶ國にはかくれもない所に。けふ來ずは身請の事も成がたいと。おのればかりが銀持がほに推參千萬。たとへ太夫一代此里を出す擧の土となればとて。此返事を見て彼奴が所へどふゆるかるゝ物ぞ。定舊はゐられぬか。只今茨木方へゆきて。此太夫を金と背くらべさせて。今身請の埒をあけて來らるべしと。有合の金子三百兩先手付に相わたされ。残り明日と事急成身請の相談。何時も金の浮世。今いひ出して早速相すみ。御旅宿より乗物取よせられて。太夫さまを箱入にして其夜に取てかへられぬ。さりとはきみよし是てこそその都

の大臣なれと。難波の水をのんでゐる共が。我國ならぬ京をほめけり。山はかゝる事はしらずして。今の返事を見たらば太夫がさだめしとんで來てござらう。所を我等は物いはず少しひざり姿に。もとをらぬ三味線ならしてゐやう程に。あるじは笑止がる顔して。申太夫さま何をしてござります。お前は貧乏神と念比してござるかして吹付る仕合をうしろから濫團てまねくやうな事。私が先程からあまい口のすうなるほど。お前に成かはつて侘言いたせど。中々旦那の御機嫌かなほりませぬ。太鞍衆をおたのみなされて成共。なりかゝつた身請のきえぬやうにあそばせと。實らしう申べし。其時末社どもにたのみますと取かゝらば。私共が力におよびませぬ。取次よりは直訴あそばせとつききはなせ。然らばせふ事なさに。例のならひの涙をこぼし。ようござんすわしさへしぬればよいものといふ。てつきり思ひこかしてあらふ。そりや人音がするだまれといへば。太夫ではあらで。やあこれのさころもといふこんはくはしり來つて。半太夫さまは都の吹出し大臣様が金とつりかへにして。只今抓ておかへり。お前へ一筆のこされたき御心入なれ共。もうかふなるうへからは。さだまつた男ある身。旦那どのゝ手前遠慮すれば。何事も見た通り心得ましてくれとお言つけを申に參りました。何とおまへには遅時にして。なじみの女郎をよその花にはなされし事ぞと。申出すより山大臣。神鳴に臍をとられし心地して。大キに肝をつぶされ。最前の言合せも。正眞の樂やて聲をからしめてのけ。是はまづどうした物であらうと。三里さがつてもがいて見ても叶はず。末社共も指のまたをひとつによせて。手をつき御尤というてゐるより外はなくて。座敷の興とともに夜もしら／＼としらけてのけ。おかへり品のぶしゆび。勝曼の方をうらめしげに見やりて。我と太夫が二ツ紋の挑灯かけし契りも。今こそは眞の嘘と成てのけけり。

第四 女郎買惣回向の鐘木町

付リ 醉の教化にしづまる亂氣